福　岡　市

今宿五郎江遺跡 I

Imajuku　Gorôe　Site

福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集

1986

福岡市教育委員会

福　岡　市

今宿五郎江遺跡 I

Imajuku　Gorôe　Site

福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集

遺跡略号　IJG
遺跡調査番号　8406

1986

福岡市教育委員会

巻頭図版 1

SD-01 II層遺物出土状況(東から)

巻頭図版 2

SD-01 II′層遺物出土状況(北から)

序　文

今津湾を臨む今宿の地は、市民の憩いの場として親しまれている自然の豊かなところです。ここは、弥生時代の石斧製作跡として全国的にも著名な今山遺跡や数多くの前方後円墳をひかえた県下でも有数の遺跡の密集地帯でもあります。

今回、今宿小学校の改築にともなう調査によって、弥生時代後期の環濠集落を発見することができ、当地の弥生文化の研究に貴重な資料を得ることができました。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、かつ市民の皆様に広く御活用いただければ幸いと思います。

発掘調査から資料整理に至るまで、数々のご協力をいただいた今宿小学校の諸先生をはじめ、関係機関の各位には深甚の謝意を表します。

昭和61年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐　藤　善　郎

例　言

1．本書は、福岡市西区今宿に所在する今宿小学校の校舎改築に伴い、福岡市教育委員会が昭和59年８月から９月にかけて実施した埋蔵文化財の調査記録である。

2．本書に収録した遺跡は周知の今宿五郎江遺跡【福岡市埋蔵文化財分布地図(西部Ⅱ)】に相当し、旧知の今宿小学校内遺跡である。

3．遺構・遺物の実測は小畑弘己、小林義彦の両名が行い、製図は小畑がこれを行った。

4．写真撮影は現場関係を小林、小畑が、遺物を小畑が行った。

5．本書の執筆はⅠ章を小林が、他を小畑が行った。

6．本書の編集は小畑が行った。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに
　１．発掘調査に至る経緯……1
　２．発掘調査の組織と構成……1
Ⅱ．遺跡の位置と環境
　１．遺跡の位置と周辺遺跡……2
　２．遺跡の立地と環境……2
Ⅲ．遺構と遺物……7
　１．中世墓……8
　２．土壙
　　（１）　１号土壙……8
　　（２）　２号土壙……9
　　（３）　３号土壙……9
　３　井戸状遺構
　　（１）　１号井戸状遺構……10
　　（２）　２号井戸状遺構……11
　　（３）　３号井戸状遺構……11
　４．SD－01 ……12
　　（１）　Ⅰ層出土遺物……13
　　（２）　Ⅱ・Ⅱ′層出土遺物
　　①　土器……14
　　②　底部……35
　　③　鉄器……41
　５．各遺構出土石器……41
　６．柱穴及び包含層出土遺物……44
Ⅳ．考察
　　SD-01出土の土器について……47
Ⅴ．まとめ……52

挿　図　目　次

Fig. 1　今宿五郎江遺跡の位置と周辺主要遺跡(５万分の１)……3
Fig. 2　遺跡周辺の地形図(31,250分の1)……4
Fig. 3　調査区位置図(1000分の１)……6
Fig. 4　調査区全体図(185分の1)……7
Fig. 5　中世墓(30分の１)……8
Fig. 6　中世墓出土遺物(４分の１)……8
Fig. 7　１号土壙(30分の１)……9
Fig. 8　１号土壙出土土器(４分の１)……9
Fig. 9　２号土壙(30分の１)……9
Fig. 10　３号土壙(30分の１)……9
Fig. 11　３号土壙出土土器(４分の１)……10
Fig. 12　１号井戸状遺構(30分の１)……10
Fig. 13　１号井戸状遺構出土土器(４分の１)……10
Fig. 14　２号井戸状遺構(30分の１)……11
Fig. 15　３号井戸状遺構出土土器(４分の１)……11
Fig. 16　３号井戸状遺構(30分の１)……12
Fig. 17　SD-01Ⅱ層遺物出土状況(約50分の１)……折り込み(1)
Fig. 18　SD-01Ⅱ'層遺物出土状況及び断面図(約50分の１)……折り込み(2)
Fig. 19　Ⅰ層出土土器(４分の１)……13
Fig. 20　Ⅱ・Ⅱ'層出土土器(1)(４分の１)……15
Fig. 21　Ⅱ・Ⅱ'層出土土器(2)(４分の１)……17
Fig. 22　Ⅱ・Ⅱ'層出土土器(3)(４分の１)……18
Fig. 23　Ⅱ・Ⅱ'層出土土器(4)(４分の１)……19
Fig. 24　Ⅱ・Ⅱ'層出土土器(5)(21分の５)……20
Fig. 25　Ⅱ・Ⅱ'層出土土器(6)(４分の１)……21
Fig. 26　Ⅱ・Ⅱ'層出土土器(7)(４分の１)……23
Fig. 27　Ⅱ・Ⅱ'層出土土器(8)(４分の１)……24
Fig. 28　Ⅱ・Ⅱ'層出土土器(9)(４分の１)……26
Fig. 29　Ⅱ・Ⅱ'層出土土器(10)(４分の１)……27
Fig. 30　Ⅱ・Ⅱ'層出土土器(11)(４分の１)……28
Fig. 31　Ⅱ・Ⅱ'層出土土器(12)(４分の１)……30

Fig. 32 II・II′層出土土器(13)(４分の１)……31
Fig. 33 II・II′層出土土器(14)(４分の１)……32
Fig. 34 II・II′層出土土器(15)(４分の１)……33
Fig. 35 II・II′層出土土器(16)(４分の１)……34
Fig. 36 底部分類(a～e)(４分の１)……36
Fig. 37 II層出土鉄器(１分の１)……41
Fig. 38 各遺構出土石器(1)(１分の１・２分の１)……42
Fig. 39 各遺構出土石器(2)(２分の１)……43
Fig. 40 柱穴及び包含層出土遺物(４分の１)……45
Fig. 41 SD-01II・II′層遺物出土状況ドット図(100分の１)……47
Fig. 42 壺形土器・高杯出土状況模式図(120分の１)……48

表　目　次

表１ II・II′層出土底部のタイプ別個数……36
表２ II・II′層出土底部の残存率と個数……36
表３ SD-01II・II′層出土土器観察表(1)……37
表４ SD-01II・II′層出土土器観察表(2)……38
表５ SD-01II・II′層出土土器観察表(3)……39
表６ SD-01II・II′層出土土器観察表(4)……40

図　版　目　次

巻頭図版１ SD-01II層遺物出土状況(東から)
巻頭図版２ SD-01II′層遺物出土状況(北から)
PL. I－１ 遺跡遠景(1)
PL. I－２ 遺跡遠景(2)
PL. II－１ 中世墓(西から)
PL. II－２ ３号土壙(東から)
PL. II－３ ２号土壙(東から)
PL. III－１ １号井戸状遺構(北から)
PL. III－２ ３号井戸状遺構(北から)
PL. III－３ SD-01発掘風景(北から)
PL. IV－１ 調査区全景(西から)
PL. IV－２ SD-01遺物出土状況(1)(東から)

PL. Ⅳ－３　SD-01遺物出土状況(2)(南から)
PL. Ⅴ－１　SD-01遺物出土状況(3)(北から)
PL. Ⅴ－２　SD-01遺物出土状況(4)(北から)
PL. Ⅴ－３　SD-01第３セクション(西から)
PL. Ⅵ　中世墓、１・３号井戸状遺構、SD-01出土土器(1)
PL. Ⅶ　SD-01出土土器(2)
PL. Ⅷ　SD-01出土土器(3)
PL. Ⅸ　SD-01出土土器(4)
PL. Ⅹ　SD-01出土土器(5)
PL. Ⅺ　SD-01出土土器(6)
PL. Ⅻ　SD-01出土石器・鉄器及び各遺構出土石器

I．はじめに

1．発掘調査に至る経緯

福岡市教育委員会施設課では、昭和59年度事業として今宿小学校の老朽化した木造校舎の改築工事を計画し、文化課に対して埋蔵文化財の有無の確認の依頼を行った。これを受けた文化課では、昭和59年7月3日に当該地の試掘調査を実施した。その結果、埋土下からは弥生時代後期の良好な遺物包含層が検出され、さらにその下層より、土壙、円形ピットなどが検出され、本調査が必要とされた。教育委員会施設課は新校舎の使用開始を昭和60年4月1日に計画しており、早急な対応が望まれた。さらに当該地が既設校舎内にあるため、授業などの関係から夏休み中の調査終了が最良とされ、協議を繰り返した結果、羽根戸遺跡調査班が急拠発掘調査にあたることとなり、一時期調査を併行する形で8月29日より調査を開始した。調査は9月25日をもって無事終了した。その間、児童の安全面にはとくに留意し、発掘区の周囲にはフェンスを巡らし、埋め戻し作業での重機の使用も放課後以降に行った。

この発掘調査の結果、試掘調査時には予想だにされえなかった弥生時代後期の環濠を発見した。その環濠内より多量の遺物が検出され、多大な成果をあげることができた。今後、周辺地域での発掘調査が期待される。

2．発掘調査の組織と構成

調査委託　福岡市教育委員会施設課
調査主体　福岡市教育委員会文化部文化課
調査総括　文化課長(前)　生田征生
　　埋蔵文化財第一係長(前)　柳田純孝
調査庶務　岡嶋洋一
調査担当　小畑弘己、小林義彦

発掘・整理作業員

池田礼子、猪口春代、岩田みさを、大庭友子、倉光三津子、倉光美代香、清水文代、杉村文子、多田映子、田中タヅ子、西嶋和子、西嶋タミエ、西嶋初子、西納テル子、平田政子、藤裕美子、真鍋チエ子、山下サノエ、吉岡員代、吉岡タヤ子、吉岡蓮枝、吉竹早苗、脇山美代子

なお調査・整理報告にあたっては、柳田純孝、山崎純男、常松幹雄氏の方々より指導・助言を受けた。さらに福岡市立今宿小学校校長の原正雄氏をはじめ諸先生方にはいろいろな御配慮をいただき、未報告資料も心よく提供していただいた。記して謝意を表したい。

II．遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置と周辺遺跡(Fig. 1)

今宿五郎江遺跡は、福岡市西区今宿五郎江に所在する。本遺跡は周知の今宿小学校遺跡[1]に相当する。

本遺跡一帯は糸島平野東部の海岸部にあたり、東を叶岳・長垂山、西を高祖山の山塊に囲まれた狭小な小平野を形成したところである。この小平野と周辺の丘陵地帯には数多くの遺跡が立地している。旧石器時代～縄文時代の遺跡は現在のところ知られていないが、今回の調査でその存在の可能性が示された。弥生時代に入ると著名な今山遺跡[2]をはじめとして遺跡の数は著しく増加する。この今山遺跡は今宿五郎江遺跡の北西約2kmのところに立地し、古くから弥生時代前～中期にかけての玄武岩製石斧の製作所として知られていた。この今山遺跡と西方の長垂山を結ぶ今宿の砂丘上には弥生時代前～中期の箱式石棺墓や甕棺墓が数多く発見されており、当該期の一大墓地群を形成していたと考えられる[1]。福岡市教育委員会による昭和51年度の調査[3]によると、今宿13・14地点では弥生時代中期の小児用甕棺や細形銅剣と勾玉を出土した土壙が、今山42・43地点では弥生時代前期初頭～中期中葉の玄武岩製石斧の製作址と古墳時代の製塩跡が発見されている。この他、弥生時代前期の鋤崎弥生遺跡、中期の三菱電機内遺跡、青木遺跡などの包含地が確認されている[1]。また、今宿五郎江遺跡の南約500mに所在する今宿高田遺跡では、福岡県教育委員会の調査で弥生時代後期後半の竪穴住居址が検出されている[4]。古墳時代になると当平野とその周辺部には、今宿大塚古墳[5]、丸隈山古墳[6]、若八幡宮古墳、鋤崎古墳[7]など古墳時代前～中期の前方後円墳が数多く造営されている。また、高祖山東麓の標高40～70mの丘陵地帯には新開古墳群、谷上古墳群、イヤゾノ古墳群など後期古墳を中心とした群集墳が築かれている[1][8]。古墳時代の生活址としては、先に述べた高田遺跡から前期及び後期の竪穴住居址群と各種の遺構が検出されている。歴史時代関係の遺跡・遺構は明確ではないが、高田遺跡で溝状遺構・土壙などが検出されている他、周辺の山麓部で製鉄関係の遺構が発見されている。

2．遺跡の立地と環境（Fig. 2）

本遺跡は高祖山(標高416m)から北へ延びる丘陵の末端部にあたる低台地上に立地している。高祖山と叶岳から延びる長垂山山塊は早良平野と糸島平野の境に位置し、海岸線まで張り出して両地域を遮っている。この一帯は両山塊に接した糸島平野の東部にあたり、古来より早良平野との交通の要衝の地であった。

現在本遺跡の立地する低台地は標高6mあまりで、海抜5mのラインが本遺跡を巡るように取囲み、東は三菱電機工場南部、西は今宿大塚古墳の北方100mのところを抜けている。また、本遺跡の南側はわずかに低くなっており、台地先端の微高地に営まれていた遺跡と考えられる。

今回の調査のメインをなすSD-01の営まれた時期は弥生時代後期初～中頃におさまると思わ

Fig. 1　今宿五郎江遺跡の位置と周辺主要遺跡（５万分の１）

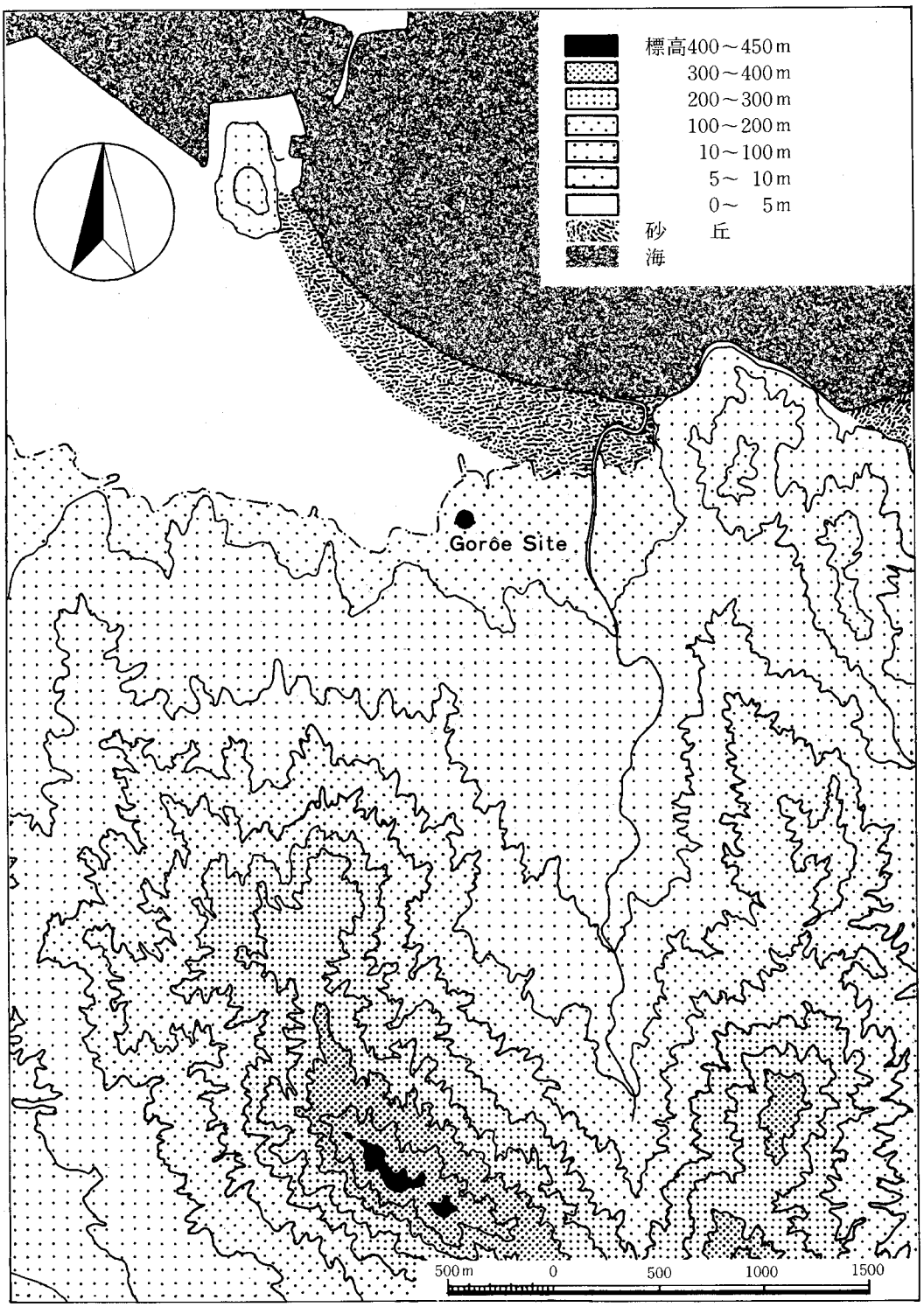


Fig. 2　遺跡周辺の地形図(31,250分の１)

れ、およそ1800年前にあたる。当時の地形環境は、縄文中期以郊の気候の冷涼化に伴う海水面低下(弥生海退)やそれに付随する沿岸洲や砂丘の発達、河口部の後背低地のラグーン及び湿地の形成など大きな変化を受けたことが知られている[9]。現在、遺跡の北方約2kmのところには今宿・横浜の砂丘が発達しているが、発掘調査の結果[3]から弥生時代前期(夜臼・板付Ⅰ式段階)にはすでに形成されていたものと考えられる。当時は後期完新世の海面変動(eustasy)による－2m程の海面低下が全国規模であったことが証明されており[10]、この砂丘もより海岸側へ発達していたものと思われる。また、瑞梅寺川河口部一帯は近世の大規模な干拓事業によって埋立てられたもので、当時の海岸線は現在とは大きく異なったものであった。現在、埋積浅谷などの存在は確認されていないが、この一帯には高祖山端部と今山、今宿の砂丘に囲まれた低湿地もしくはラグーン状の地形が形成されていた可能性がある。今宿駅付近から今宿小学校西部を通る道路工事に伴う調査の結果、遺跡の北方には低湿地の堆積物と考えられる泥炭層が確認されており、その北方200m程で砂層へと続いている。この砂層は、今宿・横浜の砂丘の南端部にあたるものと考えられる。よって、当時の海路は今宿・横浜の沿って西へ抜け、今山と浜崎山の狭い入江を通って今津湾を目指したものと推定される。本遺跡のこのような立地上の特色は、この集落が海上交通及び漁業に関して結びつきの強い性格を持っていたことを示唆している。

註

(1) 福岡市教育委員会『埋蔵文化財遺跡地名表』第1集　1969
(2) 中山平次郎『今山の石斧製作址』福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書第6集　1931
福岡市教育委員会『今山遺跡(1)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集　1968
下條信行『今山遺跡』福岡市歴史資料館調査研究報告1　1973
(3) 福岡市教育委員会『今山・今宿遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集　1981
(4) 福岡県教育委員会『今宿高田遺跡』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第10集　1984
(5) 福岡市歴史資料館『緊急発掘された遺跡と遺物』　1977
(6) 福岡市教育委員会『丸隈山古墳』福岡市埋蔵文化財報告書第10集　1970
(7) 福岡市教育委員会『鋤崎古墳』福岡市埋蔵文化財報告書第112集　1984
(8) 福岡県教育委員会『今宿古墳群』福岡県文化財調査報告書第38集　1968
(9) 畑中健一「北部九州の自然環境」『季刊考古学』第6号　1984
(10) 井関弘太郎『沖積平野』東京大学出版会　1983

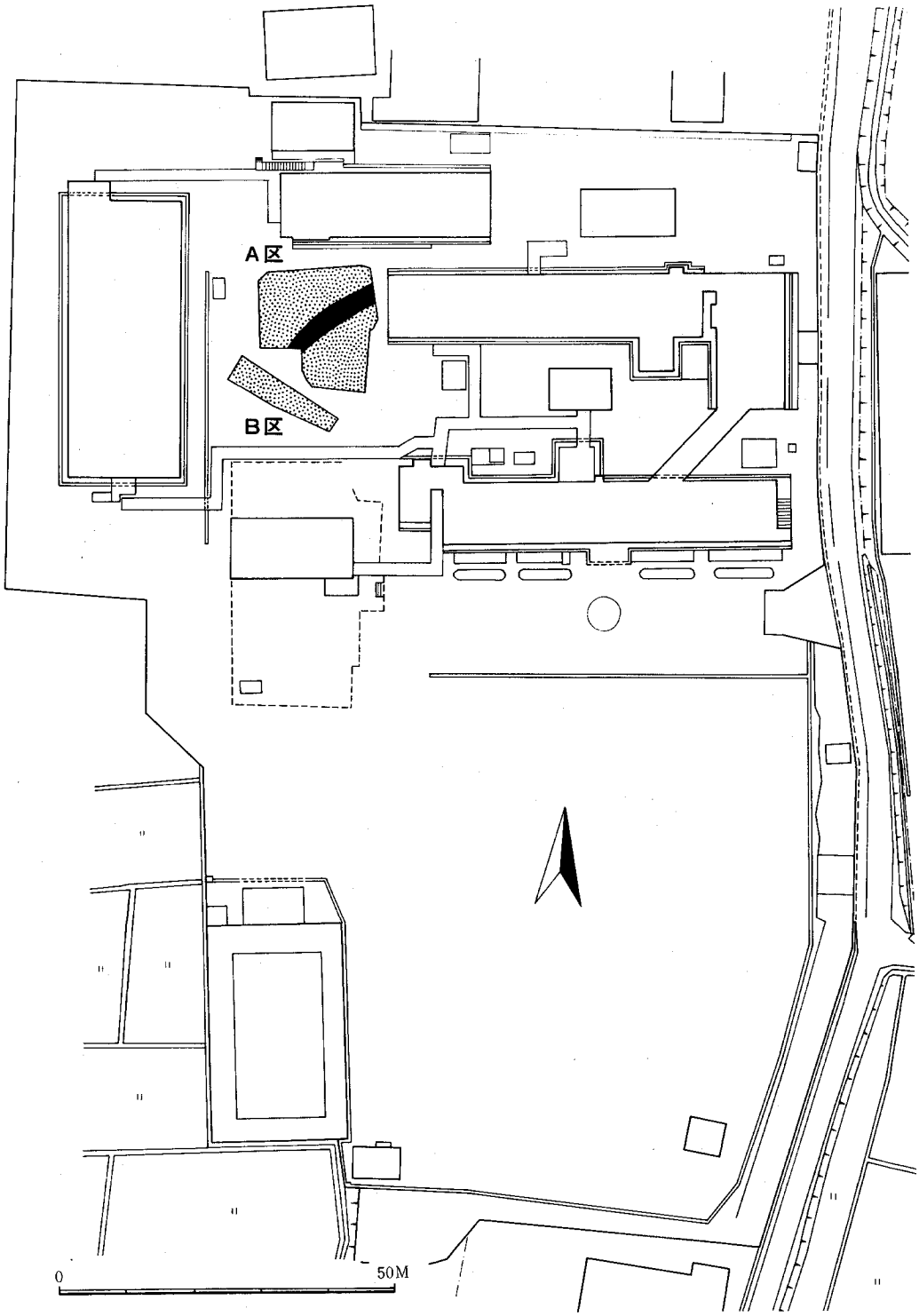


Fig. 3　調査区位置図(1000分の1)

Ⅲ．遺構と遺物

本調査の総面積は、Ａ区校舎改築部分約197㎡とＳＤ－01の延長部を確認するために掘開したＢ区64㎡の計約261㎡に及ぶ。Ａ区では、中世墓一基、中世の土壙一基、井戸状遺構一基、古墳

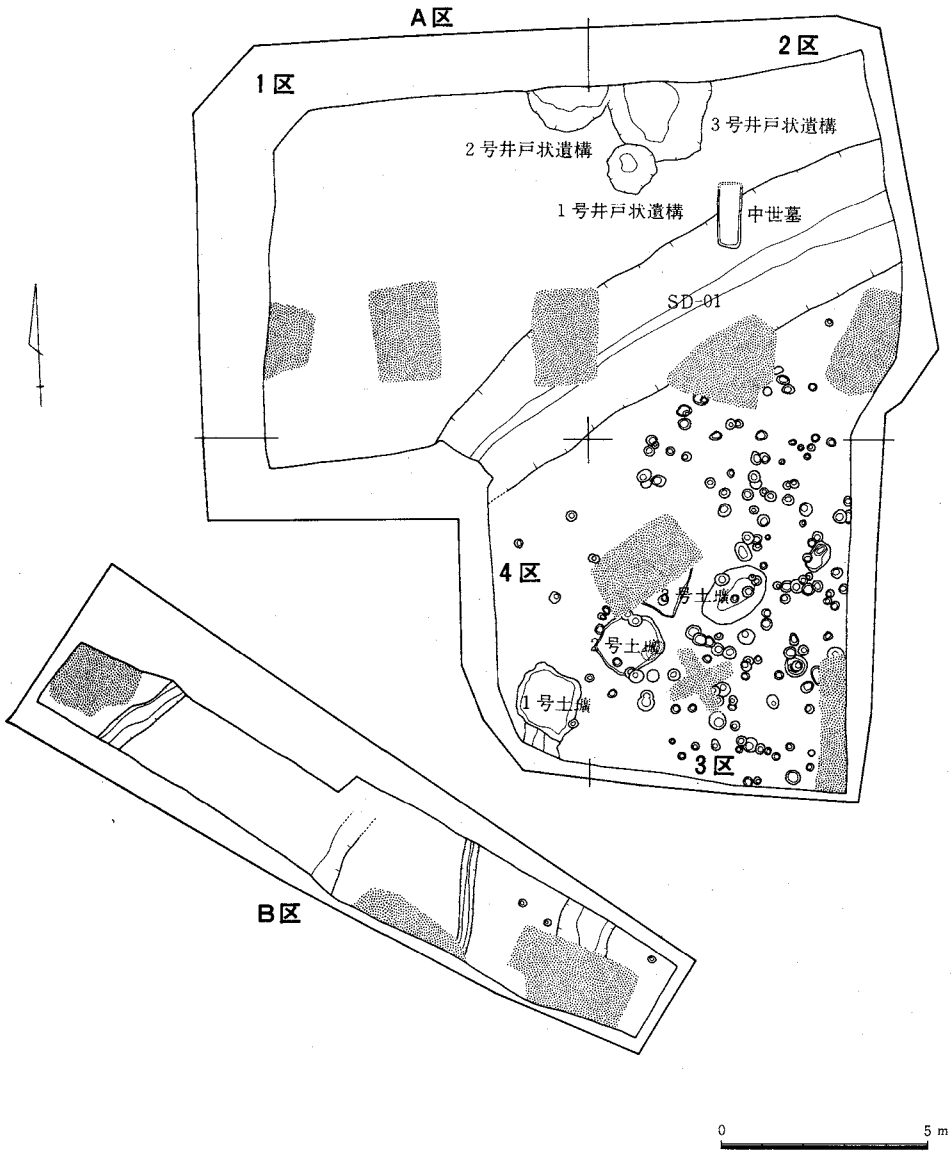


Fig. 4　調査区全体(185分の１)

時代の井戸状遺構二基、弥生時代の土壙二基、溝の一部を検出した。B区は削平が著しく、SD－01の延長部分を確認することはできなかった。なおA区の台地(SD-01の内側部分)では明らかに埋土の土質・色調の異なる柱穴を検出したが、調査区も狭いため一連の建物として認定し得なかった。A区は東を起点に時計回りに1～4の小区に分けた。

調査区の基本層序は、第1層—表土層、第2層—鮮赤色土層(埋土)、第3層—暗黒色土層(古代～中世遺物包含層)、第4層—暗茶褐色土層(弥生時代～古墳時代遺物包含層)、第5層—赤褐色ローム質土層(台地の基盤層)で、以下花崗岩風化土層となる。遺構はそのほとんどを第4層及び第5層面で検出した。

以下、A区で検出した各遺構とその出土遺物について述べる。

1．中世墓(Fig. 5 .PL. II-1)

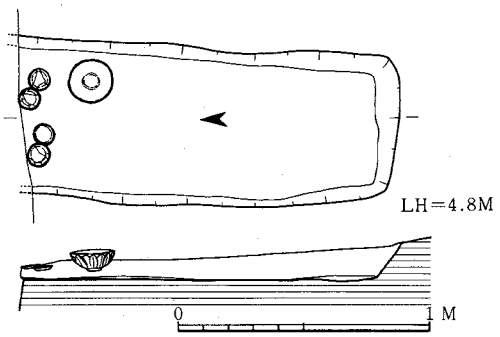


Fig. 5　中世墓(30分の1)

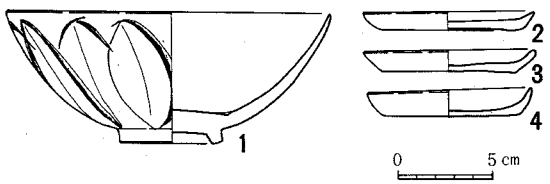


Fig. 6　中世墓出土遺物(4分の1)

調査区の北東部、SD-01の上面で検出した。古代～中世の遺物包含層である第3層中に掘り込まれたもので、北側の小口部分は近～現代の畑地造成によって削平されている。北側の小口部分に青磁碗一個、土師皿四個が副葬されていた。主軸はほぼ南北方向である。

〈出土遺物〉(Fig. 6 .PLⅣ-a･b)

1は龍泉窯系の青磁碗である。外面に鎬蓮弁の文様をもつ。釉調は淡いオリーブ色を呈する。器高7cm、口径17cm、高台径5.6cmを測る。碗Ⅰ－5 類に属する。2～4はいずれも糸切り底の土師皿である。2は口径9cm、器高1.1cm、3は口径9cm、器高1.2cm、4は口径8.7cm、器高1.5cmを測る。土師皿は全部で4点出土したが、うち1点は細片化し図化していない。

2．土　壙

(1)　1号土壙 (Fig. 7)

調査区の西南部に位置する不整形の土壙で、第3層と同じ覆土をもつ。現存部が長さ145cm、巾155cm、深さ22.5cmを測る。覆土中からは土師皿、青磁･白磁碗が出土したが、いずれも細片で図化したものは土師皿2点のみである。

〈出土遺物〉(Fig. 8)

1は底径5cmの小型の土師皿で、口縁部を欠く。暗茶褐色の胎土で、底部は糸切り底である。

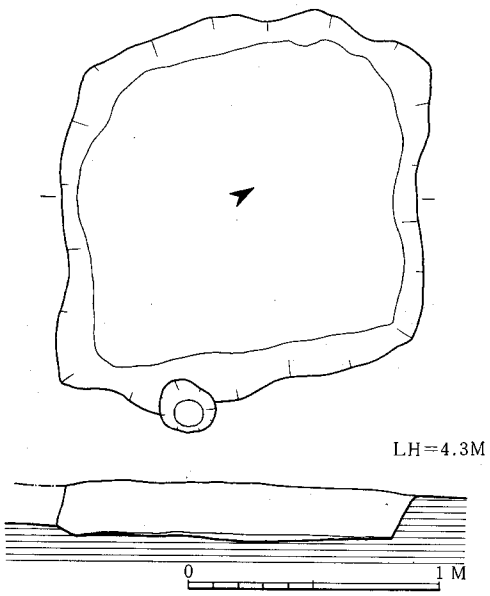


Fig. 7　1号土壙(30分の1)

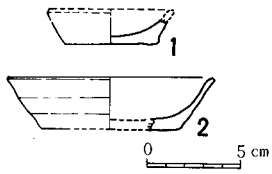


Fig. 8　1号土壙出土土器(4分の1)

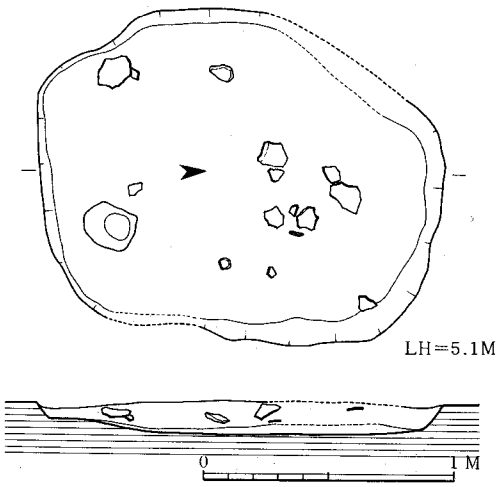


Fig. 9　2号土壙(30分の1)

2は口径11cm、器高2.8cmを測る中型の土師皿である。灰茶褐色を呈する。底部裏面は風化が著しく、判別不能。

(2)　2号土壙(Fig. 9. PL. II－3)

調査区の台地上の南部、3号土壙に隣接して検出した土壙である。平面形は隅丸の長方形。現存部で長さ162cm、巾132cm、深さ13cmを測る。出土遺物は、弥生式土器片多数と小礫がある。遺物は胴部片のみのため図化していない。

(3)　3号土壙(Fig. 10. PL. II－2)

台地のほぼ中央部で検出した。大部分を撹乱によって削られており、全体は不明である。残存する部分から方形のプランが考えられ、住居址とも考えられるが、もう一方の隅を検出できなかったことから、その可能性は少ない。残存する部分で長辺130cm、短辺83cm、深さ9cmを測る。隅に接して径22cm、深さ29cmの柱穴がある。その付近より土器片と高杯の杯部及び小礫が出土した。図化できた遺物は次の2点のみである。

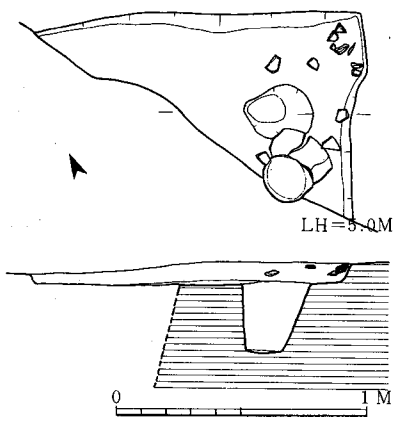


Fig. 10　3号土壙(30分の1)

〈出土遺物〉(Fig. 11)

1はラッパ状にひろがる口縁をもつ杯部の深い高杯で、

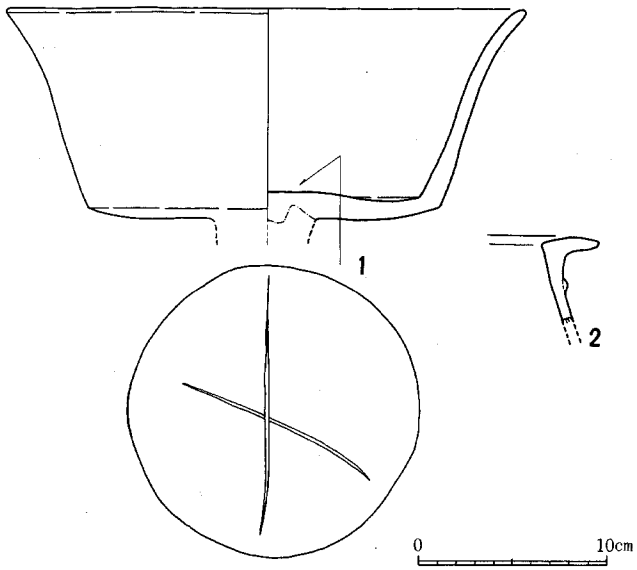


Fig. 11　3号土壙出土土器(4分の1)

内面のみこみ部分に「メ」の字形のヘラ記号がある。脚部は欠損している。鮮やかな赤褐色を呈する。焼成は脆弱である。2は口縁下に一条の断面三角形の凸帯を貼付した甕形土器の口縁部分である。暗赤褐色を呈する。焼成良。

3．井戸状遺構

(1)　1号井戸状遺構(Fig. 12. PL. Ⅲ－1)

調査区の北部、SD-01の外側に2・3号井戸状遺構と接して検出したもので、3号井戸状遺構を切っている。平面形は略円形で、断面形はロート状を呈する。覆土は上から暗茶褐色土層、明黄色土と暗茶褐色土の混土層、灰黄色粘土層で、掘り方は八女粘土層まで達している。

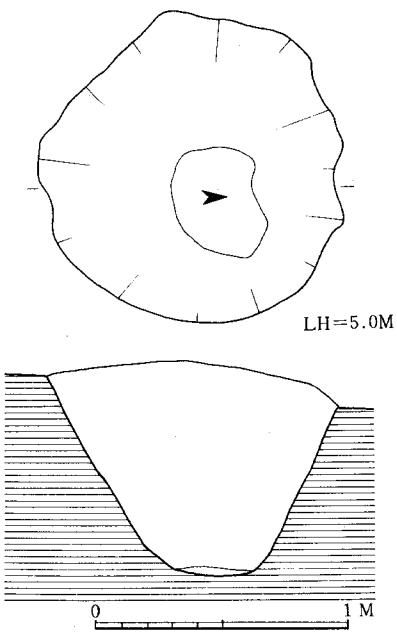


Fig. 12　1号井戸状遺構(30分の1)

〈出土遺物〉(Fig. 13, PL. Ⅵ; C)

1は内外面ともヘラ磨きを施した黒色土器で、約2分の1を残している。復元径16cm、器高6cmを測る。2はオリーブ色を呈する青磁水注の肩部の小破片である。破片左隅に瓜割の痕跡が認められる。釉調は薄い。越州窯青磁と思われる。図化した2点の他に弥生式土器の甕形土器の胴部片が小量出土した。

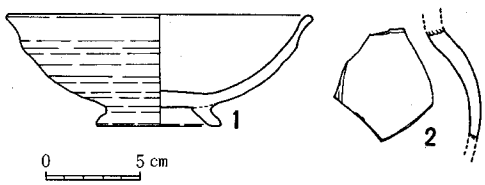


Fig. 13　1号井戸状遺構出土土器(4分の1)

(2)　2号井戸状遺構(Fig. 14)

3号井戸状遺構の西側に隣接して検出した。八女粘土層まで掘り込まれており、略円形を呈するが、北半は発掘区外へ延びる。径は207cm、深さ約50cmを測る。出土遺物は、覆土中からの須恵器の甕の胴部片、弥生式土器片がある。

(3)　3号井戸状遺構(Fig. 16; PL. Ⅲ-2)

不整な楕円形の平面プランをもつ大型の遺構で、基底部は八女粘土まで掘り込まれている。北半部は発掘区外へ延びる。短径262cm、長径192＋αcm、深さ75cmを測る。覆土は5層に分けられ、上から暗

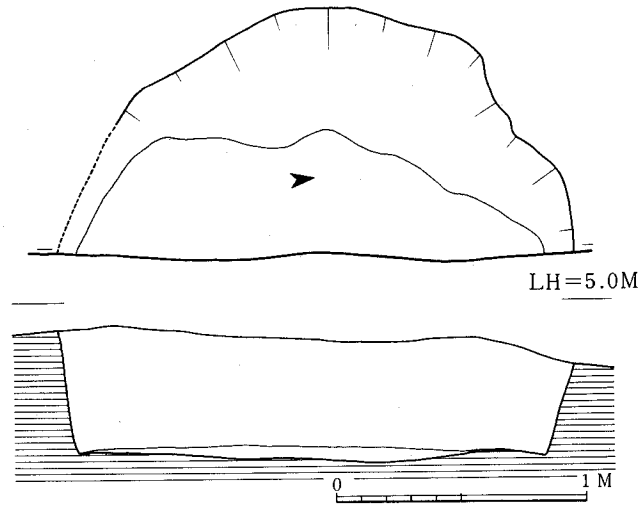


Fig. 14　2号井戸状遺構(30分の1)

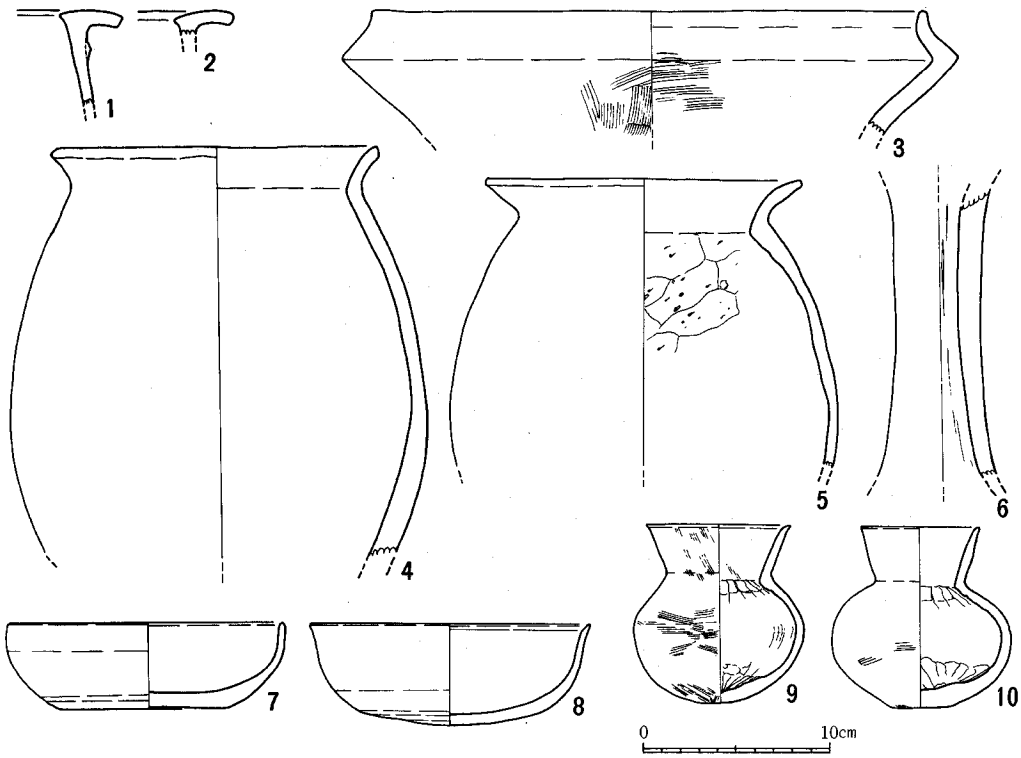


Fig. 15　3号井戸状遺構出土土器(4分の1)

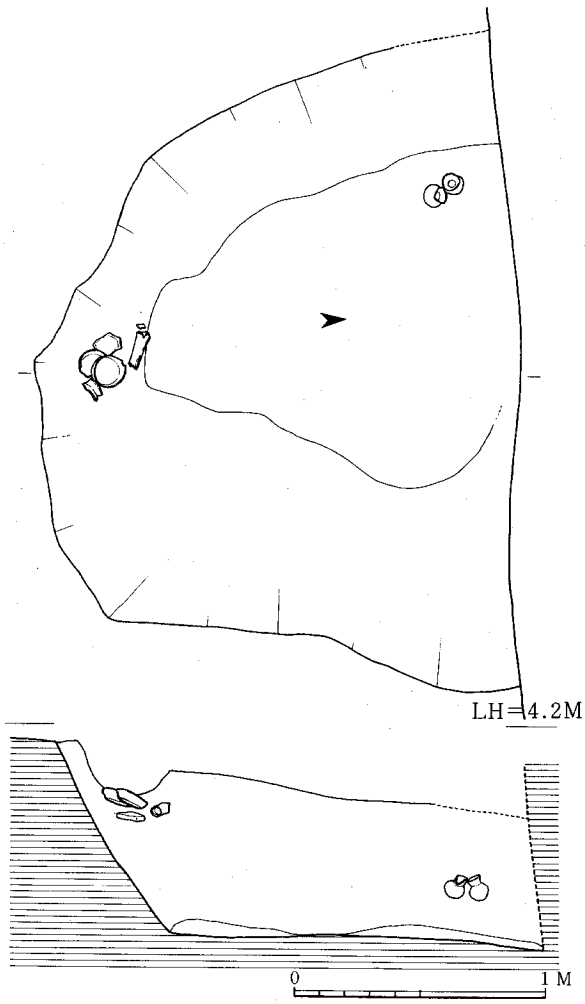


Fig. 16　3号井戸状遺構(30分の1)

茶灰褐色土層、暗茶褐色土層、暗茶褐色土層(粘性に富む)、暗灰黄褐色土層、灰褐色粘土質土層である。出土した遺物は、弥生式土器片、土師器片多数であるが、遺構の南部と北部からそれぞれ一括して出土した土師器の杯(2点)と小型丸底壺(2点)は完形で、しかも意図的に投げ込まれた状態で出土しており、おおよその遺構の年代と性格をあらわしているものと思われる。

〈出土遺物〉(Fig. 15, PL. Ⅵ; d～f)

1と2は逆L字形の口縁をもつ甕形土器で、1は口縁下の凸帯が残存している。3は二重口縁壺の口縁部片である。口縁端部は反り気味に立上がる。内外面とも刷毛目痕をとどめる。4は甕形土器で底部を欠失する。口縁内部は僅かに稜を残す。胴部最大径は中位より下にある。調整は不明。5は甕形土器で、内面はケズリが入る。口縁部は「く」の字形に外反し、中位でやや肥厚する。外面は刷毛目調整。6は高杯の脚部である。外面は淡橙色を呈する。7と8は土師器の杯で、7が完形、8が略半分の破片である。7は平底を呈し、やや内傾気味の口縁部をもつ。8は丸底気味の底部をもち、口縁部端部を若干つまみあげている。9と10はほぼ同型同大の小型丸底壺で、いずれも完形品である。外面は刷毛調整の後丁寧なナデによって磨り消している。10は僅かに底部を残している。

4. SD-01(Fig. 17・18, PL. Ⅳ－2・3, Ⅴ)

発掘区の北東部から北西部にかけて検出した。現存する部分で巾約3cm、最深部で深さ1.3mを測る。部分的に現代建物の基礎で破壊されているが、比較的残りは良い。両側の立上りは、近代の水田及び中世の削平によって削られており、本来の深さ・巾ともに大きなものであったと考えられる。断面形は基本的に「V」字形を呈するが、部分的に「U」字形をとるところも

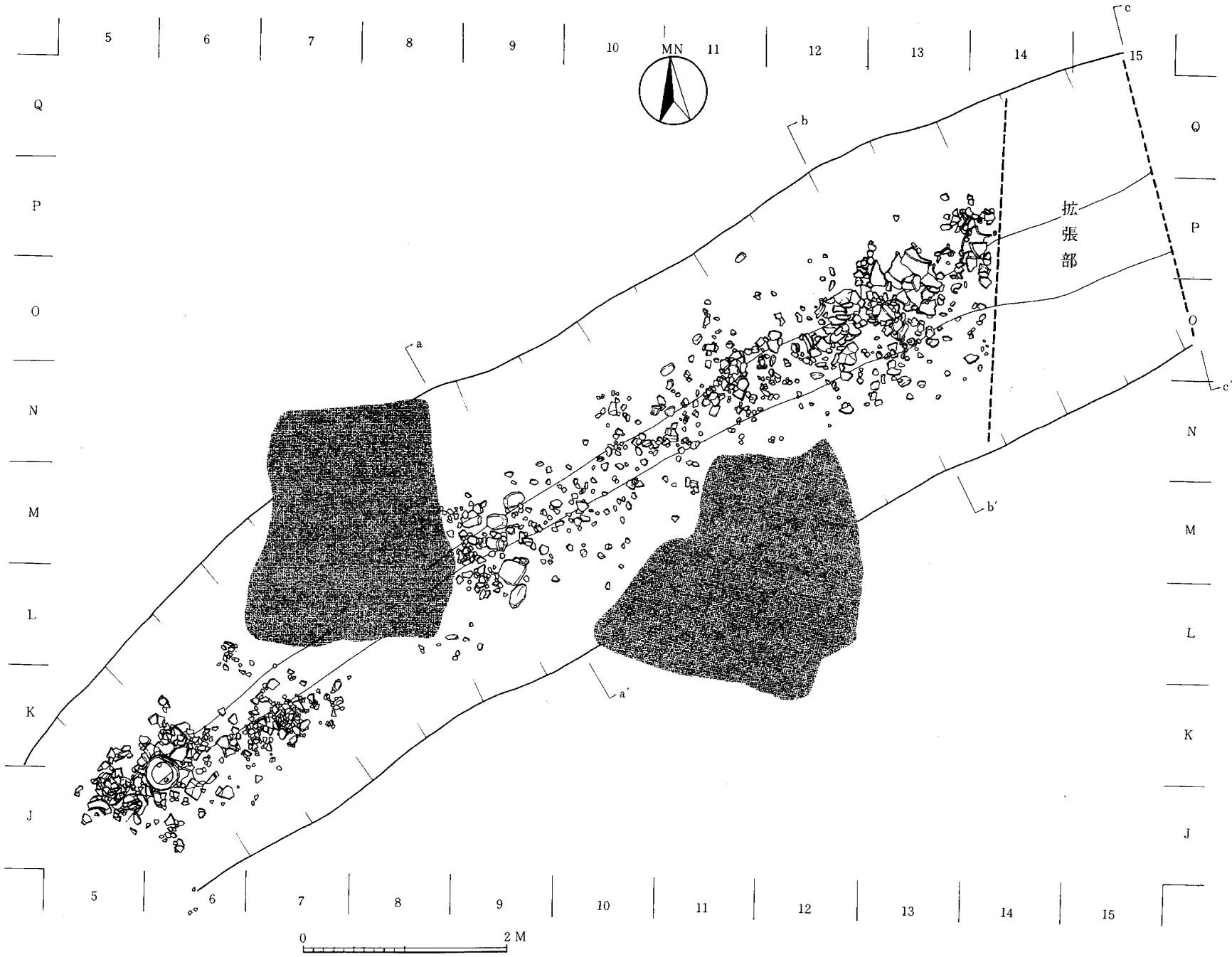
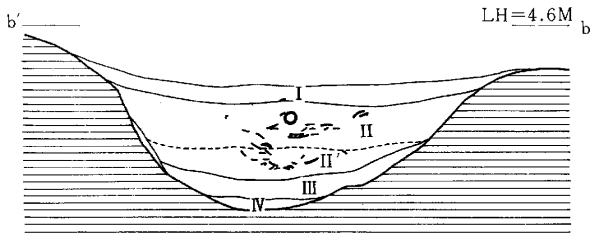
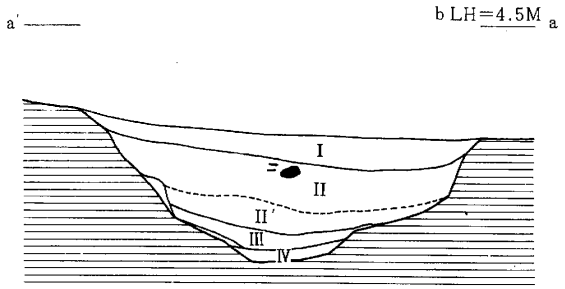


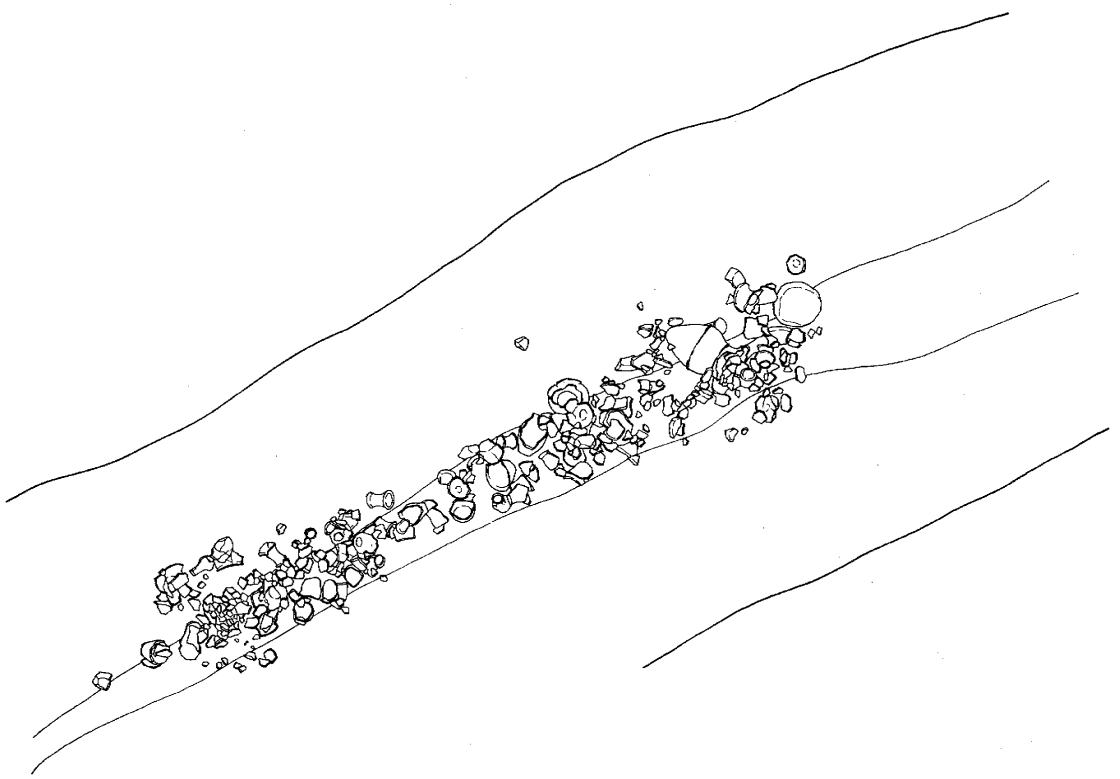
Fig. 17　SD-01II層遺物出土状況(約50分の１)



第２セクション



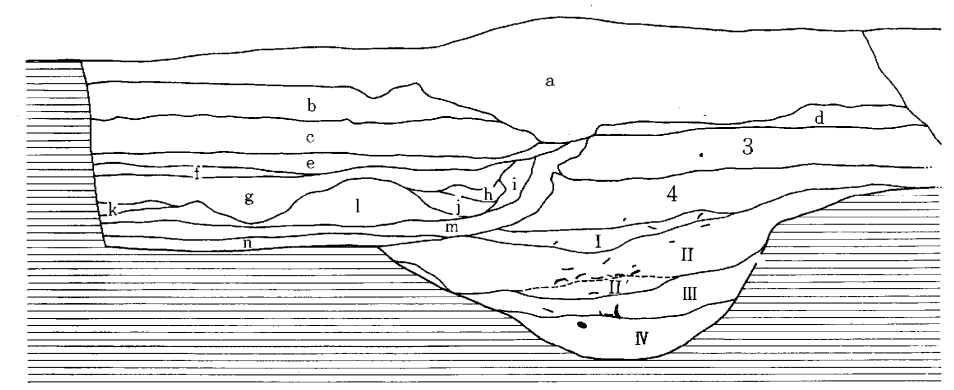
第１セクション



Ⅰ 層　暗灰色粘質土層
Ⅱ 層　暗褐色土層
Ⅱ′ 層　暗茶褐色土層
（黒味が強く、粘性がある）
Ⅲ 層　明茶褐色土層
Ⅳ 層　青灰色味を帯びた明赤色土層
（粘性が強い）

a 層　埋土層（赤褐色土層）
b 層　埋土層（砂質灰茶褐色土層）
c 層　埋土層（赤褐色土と砂の混層）
d 層　明茶褐色土層（耕作土）
e 層　砂質茶褐色土層（耕作土）
f 層　砂質灰茶褐色土層（旧水田土）
g 層　砂質茶褐色土層（旧水田土）
h 層　灰白色砂質土層（旧水田土）
i 層　灰色砂質土層（旧水田土）
j 層　暗茶褐色砂質土層（旧水田土）
k 層　灰褐色砂質土層（旧水田土）
l 層　灰白色粘質土層（旧水田土）
m 層　灰赤色粘質土層（旧水田土）
n 層　灰色土層
第3層　暗黒色土層
第4層　暗茶褐色土層

0　2 M



第３セクション

Fig. 18　SD-01　Ⅱ′層遺物出土状況及び断面図（約50分の１）

ある。なお、B区の北西隅でこのSD-01の続きの溝と考えられるものを検出したが、削平が著しく20cm程度のもので遺物も出土しないことから、確定することはできなかった。溝内の土砂の堆積は基本的に4層に分けることができる。Ⅰ層は暗灰色粘質土で、厚さ約15cm。Ⅱ層は暗茶褐色土層で、下部にいくにしたがい暗黒色を呈する粘土質に変化する。厚さは約40cm。Ⅲ層は明茶褐色土層で、部分的に灰色の粘質土を含む。厚さ約15cm。Ⅳ層は溝底に堆積した層で、青灰色味を帯びた明赤色土層である。かなり粘性が強い。遺物はⅠ層とⅡ層を中心に出土し、Ⅲ層面まで入り込んだものも若干ある。Ⅱ層は土器の出土状況から便宜的にⅡ層とⅡ′層に分けて記録をとったが、本来同一層であり遺物は一括して報告した。Ⅱ層に破片が、Ⅱ′層に完形品が多く出土した。土砂の堆積状況から、Ⅰ層・Ⅱ層の段階に堆積の遅い時期が存在したと考えられ、Ⅲ層・Ⅵ層は溝の掘削後早い時期しかも短時間に堆積したものと考えられる。Ⅱ′層の遺物は完形もしくはそれに近いものが多く、溝中に廃棄された状況が窺える。遺物の出土量はⅡ・Ⅱ′層が最も多く、コンテナに約60箱ある。

SD-01はそのカーヴの具合から、ほぼ長楕円のプランをもち、小学校内を巡るように掘開された環濠の可能性があり、その規模は100m×80m以上あったと推定される。

(1) Ⅰ層出土遺物(Fig. 19, PL.Ⅳ; Ⅰ－4, Ⅰ－7)

Ⅰ層は弥生時代後期から古墳時代中期の遺物を含む層で、約50個の土器片が出土しているが、

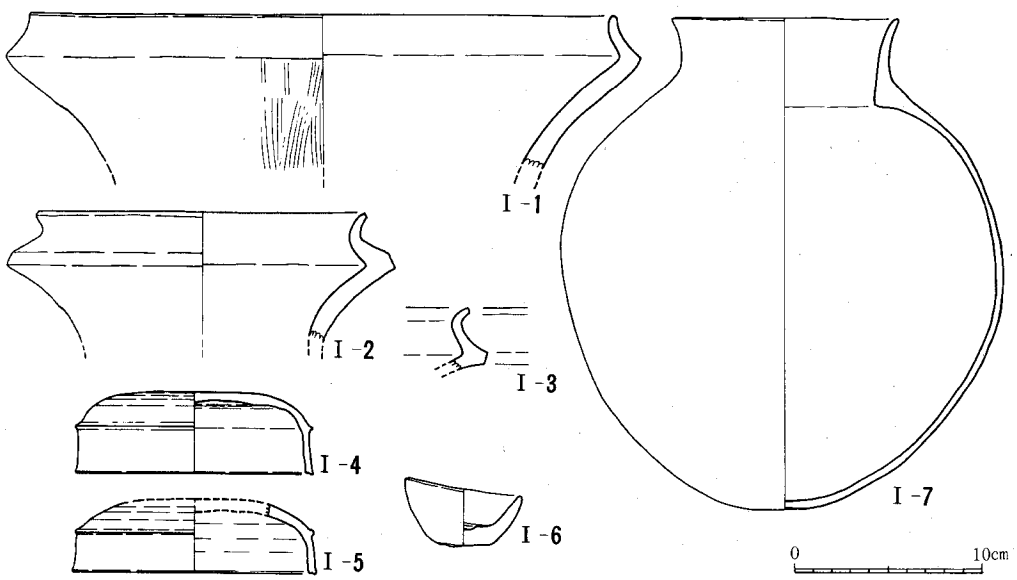


Fig. 19　Ⅰ層出土土器(4分の1)

このうち実測可能な土器７点を選び、図化した。

壺型土器(Fig. 19;　１～３)

いわゆる二重口縁をもつ壺型土器で、いずれも口縁部の破片である。１は口縁部が逆くの字形に屈曲するが、２・３はその度合いが強く、口縁端が外反気味に強く屈曲している。２と３の屈曲部は二本の稜をもっている。１の外面は刷毛目を残すが、２・３の調整は不明である。

須恵器(Fig. 19;　４・５)

４・５は須恵器の杯蓋である。４はほぼ全体形をとどめているが、一部を欠いている。天井部は平担で、僅かに凹んでいる。稜は断面三角形をなし鋭い。口縁部はほとんどまっすぐにやや開き気味に下方に下る。端部はやや稜をなしている。天井部外面の約５分の４が回転ヘラケズリで、他は回転ナデ調整である。胎土は細砂粒を含む、燃成は良好である。天井部外面に自然釉が認められる。５は全体の４分の１程の破片である。口縁部は内湾気味に下方へ下る。口縁端部はやや凹み稜をなす。稜は４と同じく断面三角形であるが、やや鋭さに欠けている。天井部が回転ヘラズリ、他が回転ナデ調整である。胎土は細砂粒を含み、焼成は良好である。陶邑Ⅰ－３段階に属すると思われる。

手捏土器(Fig. 19;　６)

径６cm程の杯形の手捏土器である。胎土に砂粒を多く含み、焼成はあまり良くない。

土師器壺(Fig. 19;　７)

口縁部が直口気味に外反する丸底の壺形土器である。胴張りのする球形の胴部をもち、口縁部との接合面である頸部内面に鋭い稜をなしているのが特徴である。外面はナデ調整で、胴部上半から中位にかけて煤が付着している。胴部内面はケズリ調整で、器壁は４mmと薄く仕上げられている。胎土は細砂粒を含み、焼成はやや良である。

(2)　Ⅱ・Ⅱ′層出土遺物

①土器(Fig. 20～35、PL. Ⅳ～Ⅺ)

本層から出土した土器はコンテナ箱に換算して約60個あり、SD-01中で最も量が多い。この中で完成品、完形に復元できるもの、図上復元できるものを中心に、小片でも特徴的なものを選んで極力図化に努めた。

器種は、壺型土器、甕形土器、鉢形土器、脚付き甕、高杯、器台、手捏土器とすべて出揃っており、各機種ごとにもヴァリエーションがある。全体量からいえば、甕形土器が最も多く壺形土器、器台、鉢形土器、高杯がこれに次いでいる。なお、底部片については一部を除いて図化を省略し、その個数を一括して表に示した。また、図化した個別の土器の観察結果についても表に示していま。

遺物は個体が識別できるものから番号を付け、レベルを測って取り上げた。細片や個体の識別できないものは調査区全体に設定した１×１ｍのグリッド別に層ごとに一括して取り上げた。

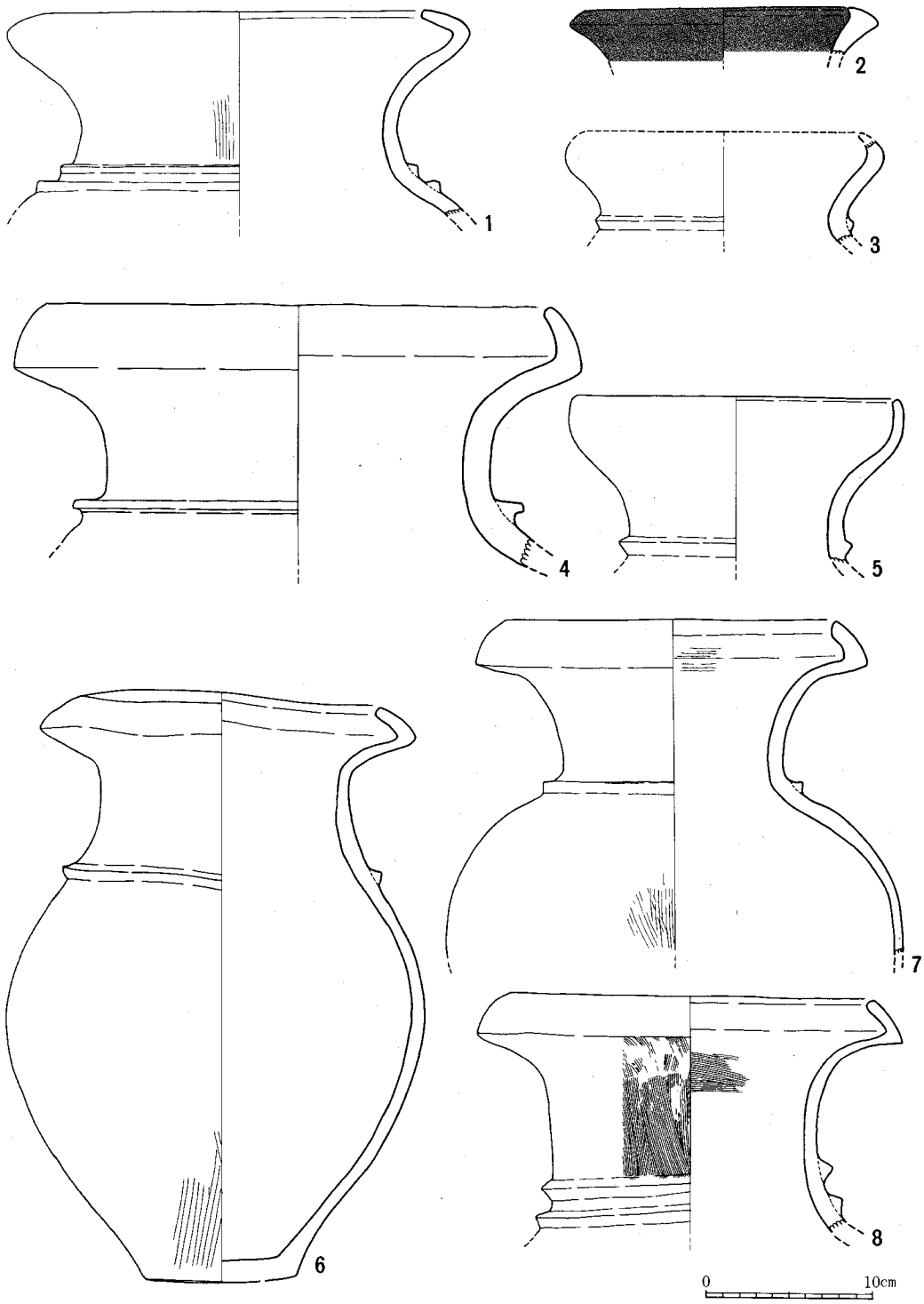


Fig. 20　II・II′層出土土器(1)(４分の１)

【壺形土器】

甕形土器に次いで量の多い器種であるが、その大きさ・プロポーションともに様々なものがある。Ⅰ～Ⅸ類に分類した。

Ⅰ類(Fig. 20; 2)

口縁端がつまみあげられたように内傾するもので、端部上面は丸みをもっている。全体形は窺い知ることはできない。内外面とも丹塗りである。

Ⅱ類(Fig. 20; 1, 3～8, 9～11)

中期以来の袋状口縁壺の系譜を引くもので、口縁部の特徴から2類に細分することが可能である。

Ⅱa類(Fig. 20; 1, 3, 5)

口縁部がキャリパー状に内湾するいわゆる袋状口縁をもつものである。その屈曲の度合いにはそれぞれ差がある。3、5はわずかに開き気味に立ち上がる口縁からゆるく内湾するもので、それぞれ肩部に一条の三角凸帯を貼付している。1は3、5に比べて外側への張り出しと口縁端部の内湾の度合いが大きいもので、肩部に二条の三角凸帯を貼付している。

Ⅱb類(Fig. 20; 4, 6～8, Fig. 21; 9～11)

口縁部の屈曲が内傾気味に強くなり、逆くの字形を呈するものである。屈曲部の内外面に明瞭な稜をもつ。屈曲の度合いがゆるく、口縁端部が立ち上がり気味なもの(4、10)、屈曲が著しく、内面にシャープな稜をもつもの(6～9、11)の二者がある。肩部にはそれぞれ三角凸帯を一条ないし二条貼付している。頸部から口縁部にかけての移行部が外反気味にカーヴを描くものと直線的に立ち上がるものがある。4は他に比べ大型で器壁も厚く、体部に比べて短い頸部が特徴的である。7～9は細かい刷毛目調整の後、丹を塗った痕跡が認められる。

Ⅲ類(Fig. 21; 12・13)

肩部に一条の三角凸帯をもち、そこから多反する短い頸部～口縁部をもつ壺形土器である。口縁部は直口縁である。13は12と比べ頸部も短く、口径も大きいことから、甕形土器の可能性もある。

Ⅵ類(Fig. 21; 20)

胴部から頸部にかけて断面M字凸帯を数条貼付する丹塗りの壺形土器である。頸部付近を図上復元したが、口縁部の形状は袋状か鋤先状か不明である。

Ⅴ類(Fig. 23; 27)

平担な口唇部に三本の平行沈線を描いた大型の壺形土器である。肩部に一条の三角凸帯を貼付し、そこから口縁部へ向けてラッパ状に広がる。口唇部は平行する四条の三角凸帯にも見える。口唇の上下の端部はつまみあげたように外側へ張り出している。

Ⅶ類(Fig. 23; 28、30～33、Fig. 24; 34～37)

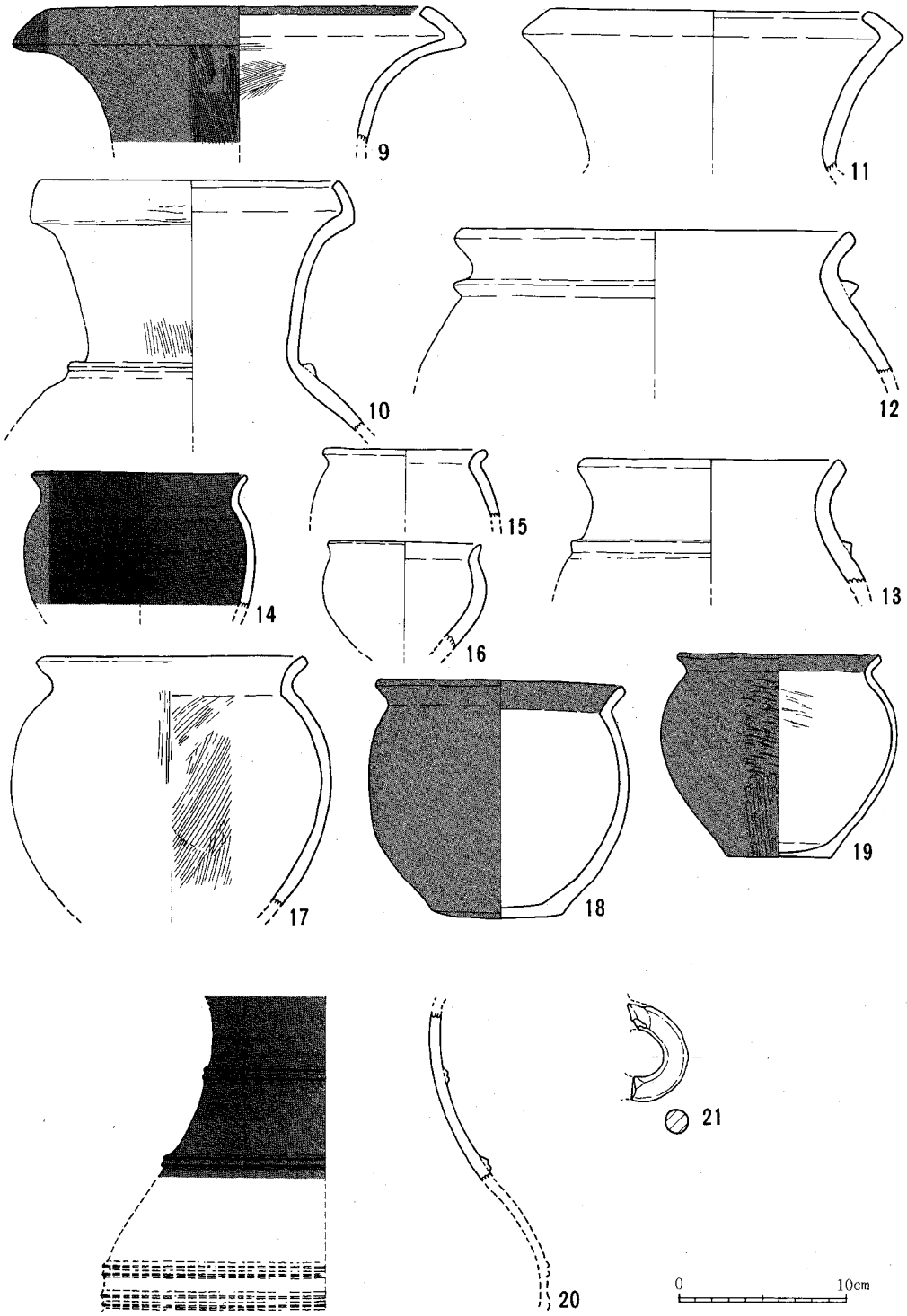


Fig. 21　II・II′層出土土器(2)(４分の１)

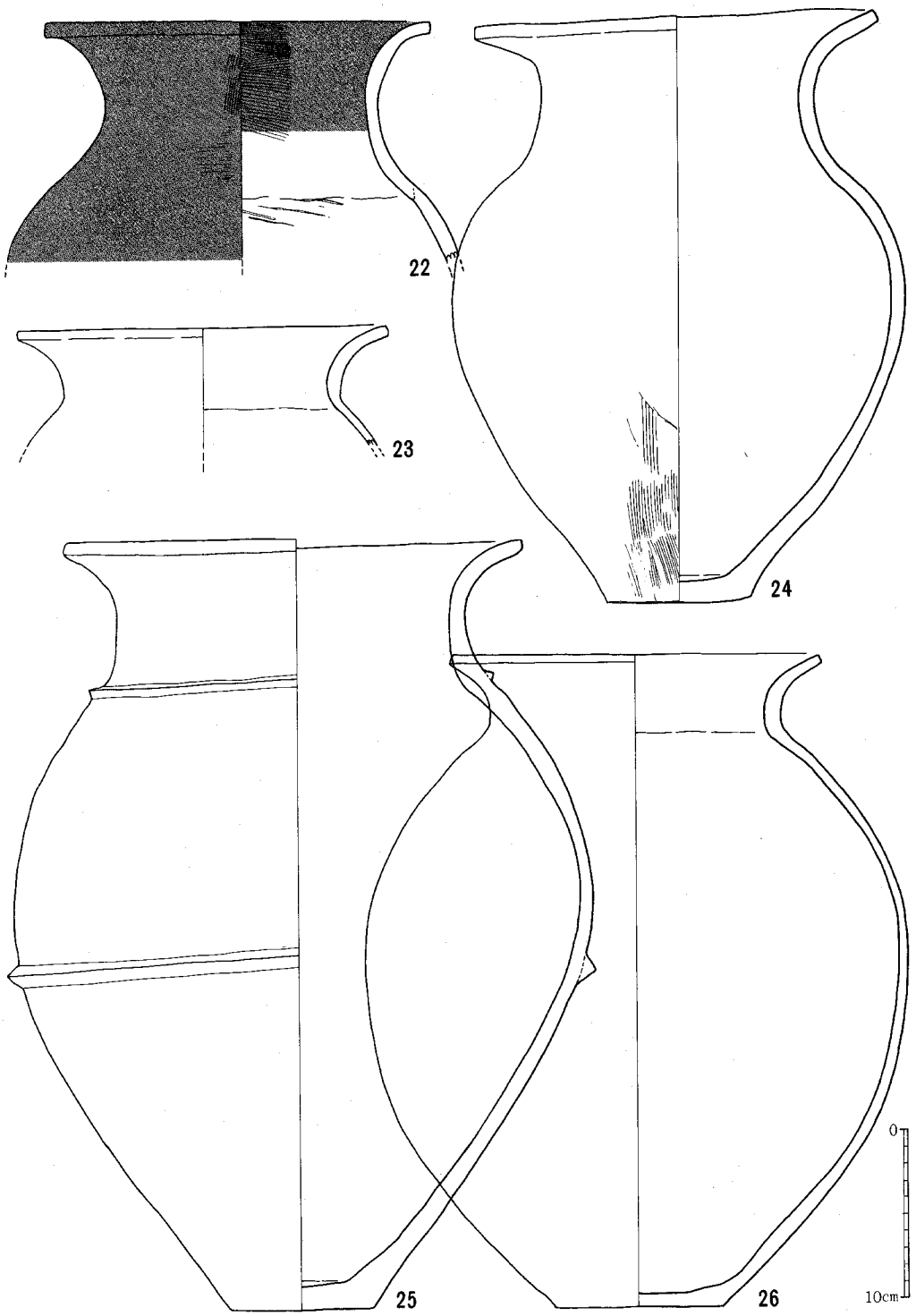


Fig. 22　II・II′層出土土器(3)(４分の１)

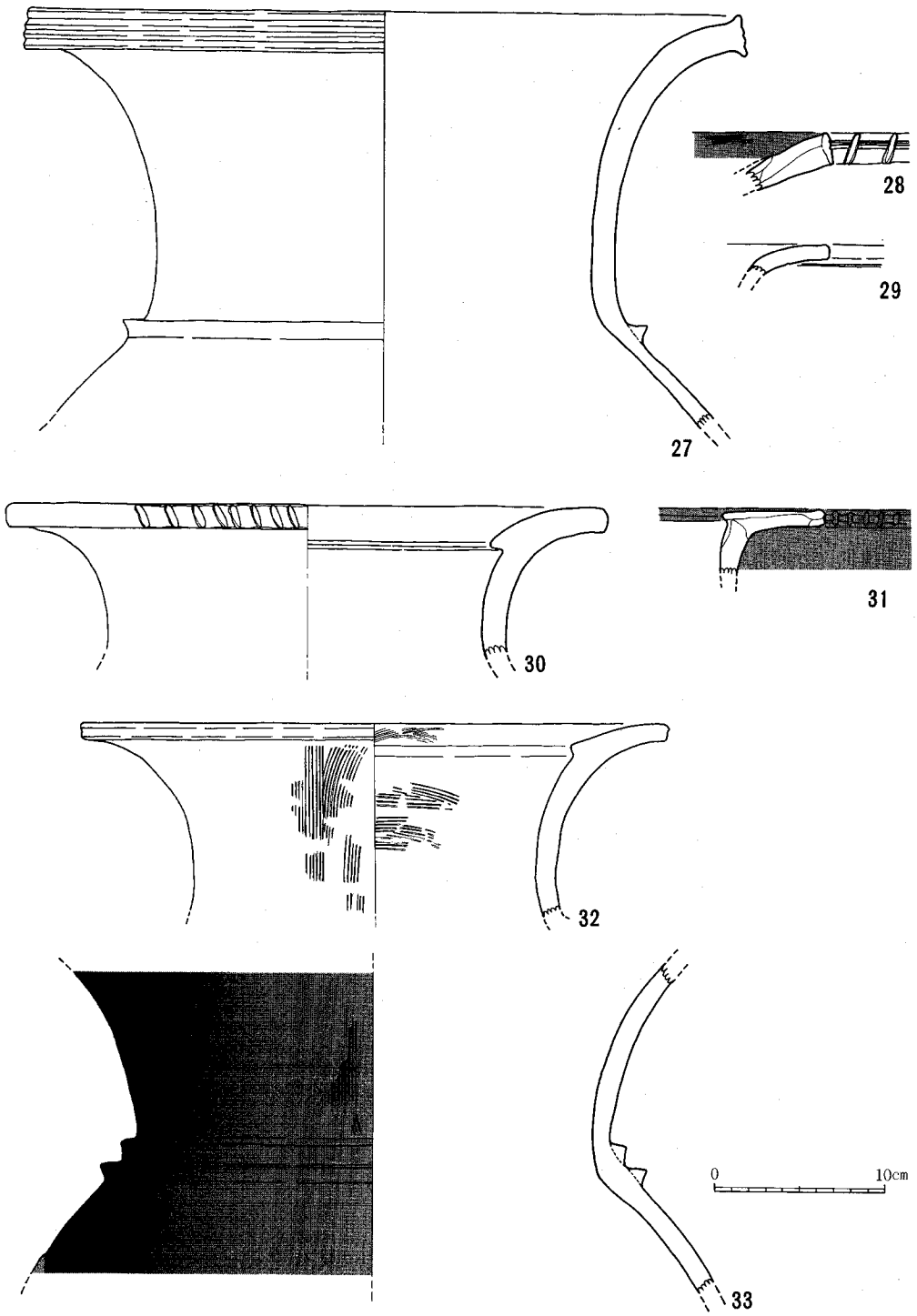


Fig. 23　II・II′層出土土器(4)(４分の１)

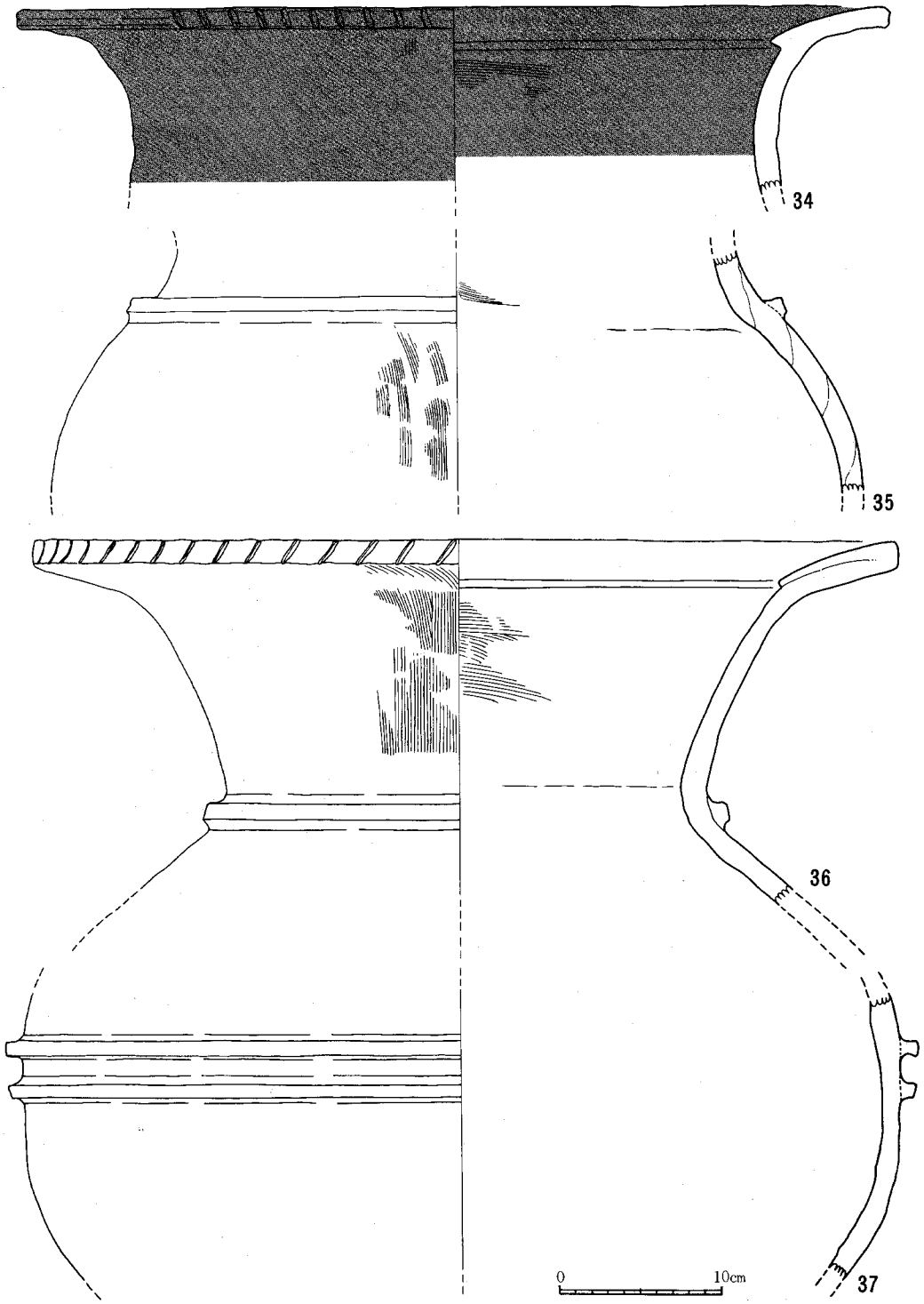


Fig. 24　II・II′層出土土器(5)(21分の５)

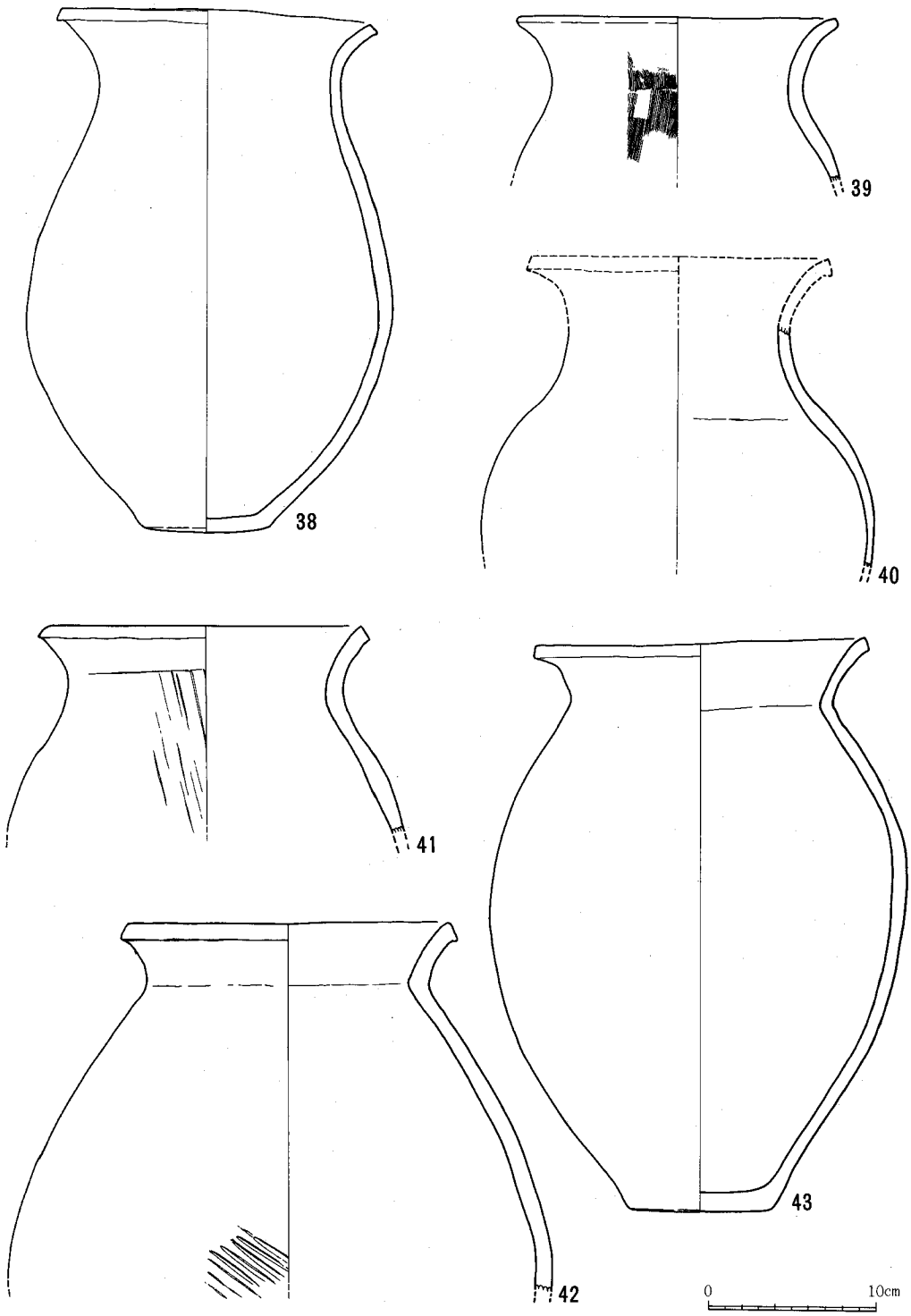


Fig. 25　II・II′層出土土器(6)(４分の１)

鋤先状口縁をもつ壺形土器である。口縁部の形状・調整法・胎土などの違いから2類に細分することができる。

Ⅵa類(Fig. 23; 31)

口縁部の上面が平坦で、シャープな口唇部を形成している。口縁部は水平である。口唇部外端には細かい刻目を施している。口縁部の平坦面から外面にかけては丹塗りである。

Ⅵb類(Fig. 23; 28、32～33、Fig. 24; 34～37)

退化した鋤先状口縁をもつ壺形土器で、口縁部の上面が凸面状に丸くなり、口縁部自体も内傾する。胎土には粗い砂を混えた黄褐色の粘土を用い、Ⅵa類に比べて粗い。器高・口径とも大型で、頸部と胴部に三角形もしくはコの字状の凸帯を一ないし二条貼付している。口唇部に斜め方向の刻目を施すのが一般的である。口縁内面の鋤先部はシャープさを欠き、36にいたっては低い段をなすのみになっている。34・35は外面に丹塗りの痕跡が認められる。頸部は内外とも粗い刷毛目を施している。

Ⅶ類(Fig. 22; 25)

胴部と肩部にそれぞれ一条の三角凸帯を貼付した壺形土器である。口縁部は直口縁である。頸部から外へ強く湾曲して広がる。胴部の凸帯は胴中位より下方にある。凸帯を除いた最大径は胴中位より少し上方にある。

Ⅷ類(Fig. 22; 22、24、Fig. 25; 38～40)

細く長い頸部と肩の張る胴部が特徴的な壺形土器である。口縁部から頸部はすぼまり、大きく外反する。22、24はその典型であるが、38～40は口縁部があまり外反しない。38は胴長で最大径が胴の中位より下方にある。22は頸部内外面をそれぞれ横と縦方向に刷毛目調整した後、丹を塗っている。肩部内面に粘土接ぎ目の僅かな段を有する。

Ⅺ類(Fig. 21; 14～19)

小型の壺形土器で、口径と器高の比が同じものを一括した。Fig.21の15と16は口径10cm以下で、ミニチュア土器の範疇に入る。口縁部の形状は湾曲気味に頸部から外反するものとほぼ直線的に口縁部に至るものがある。全体のプロポーション、調整手法から2つに分類できる。

Ⅸa類(Fig. 21; 19)

最大径が胴部上半にあり、底部へかけて僅かに内湾気味に移行し、底部へ至る。全体的に器壁が薄く底部も平底で、ごく僅かに凹んでいる。器面は底部を除く外面のすべてと内面の口縁部から頸部へかけて丹を塗っている。調整手法はヘラによるもので、口縁部から胴部上半が横方向、それより下は縦方向の研磨を施している。胎土は細砂を含み精良である。

Ⅸb類(Fig. 21; 14, 17・18)

最大径が胴部の中位にあるもので、Ⅸa類に比べ器壁も厚い。18を観察すると底部はやや丸味を帯びている。調整はすべて刷毛目とナデ調整ではあるが、18のみ丹塗りを施している。

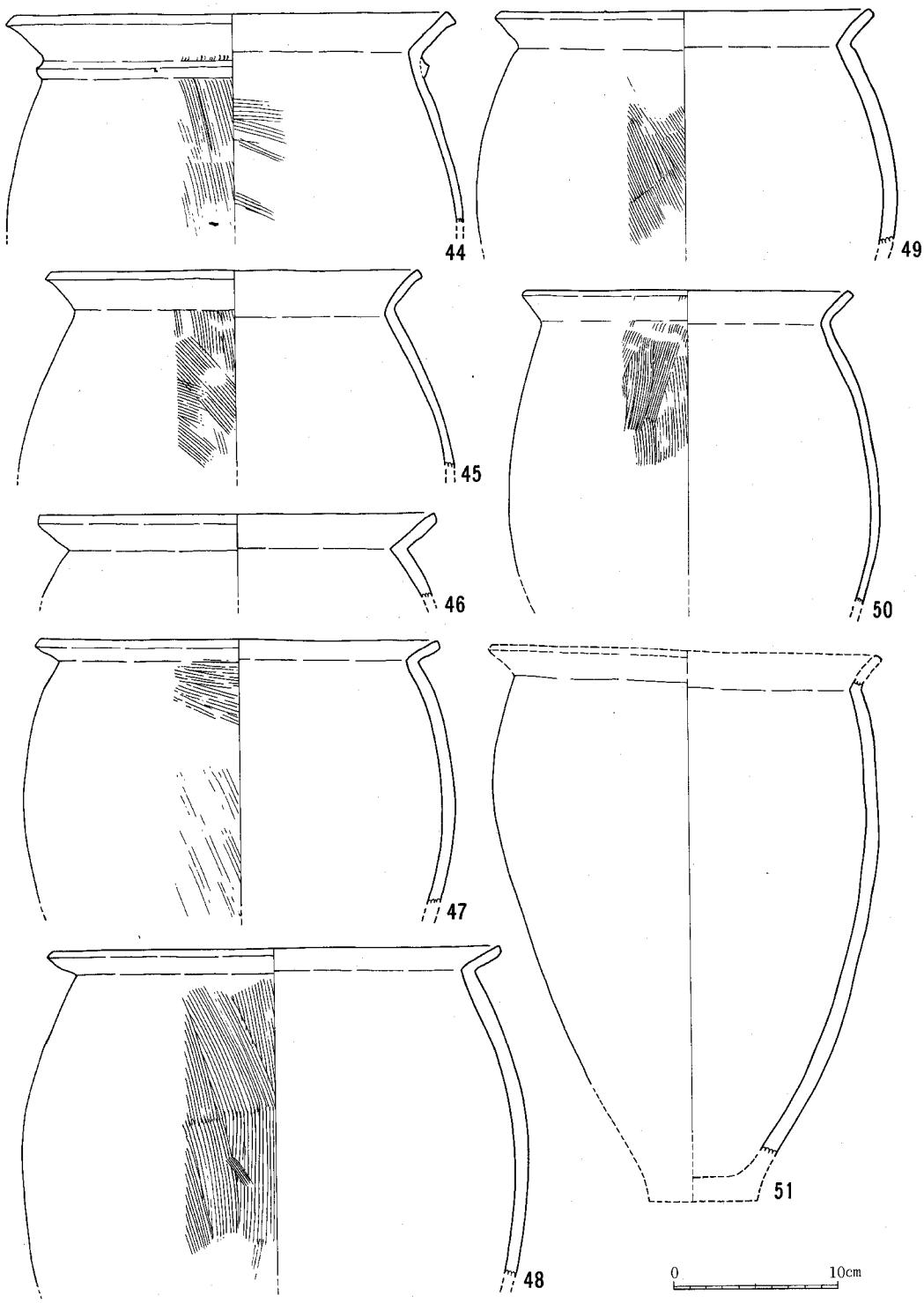


Fig. 26　II・II′層出土土器(7)(４分の１)

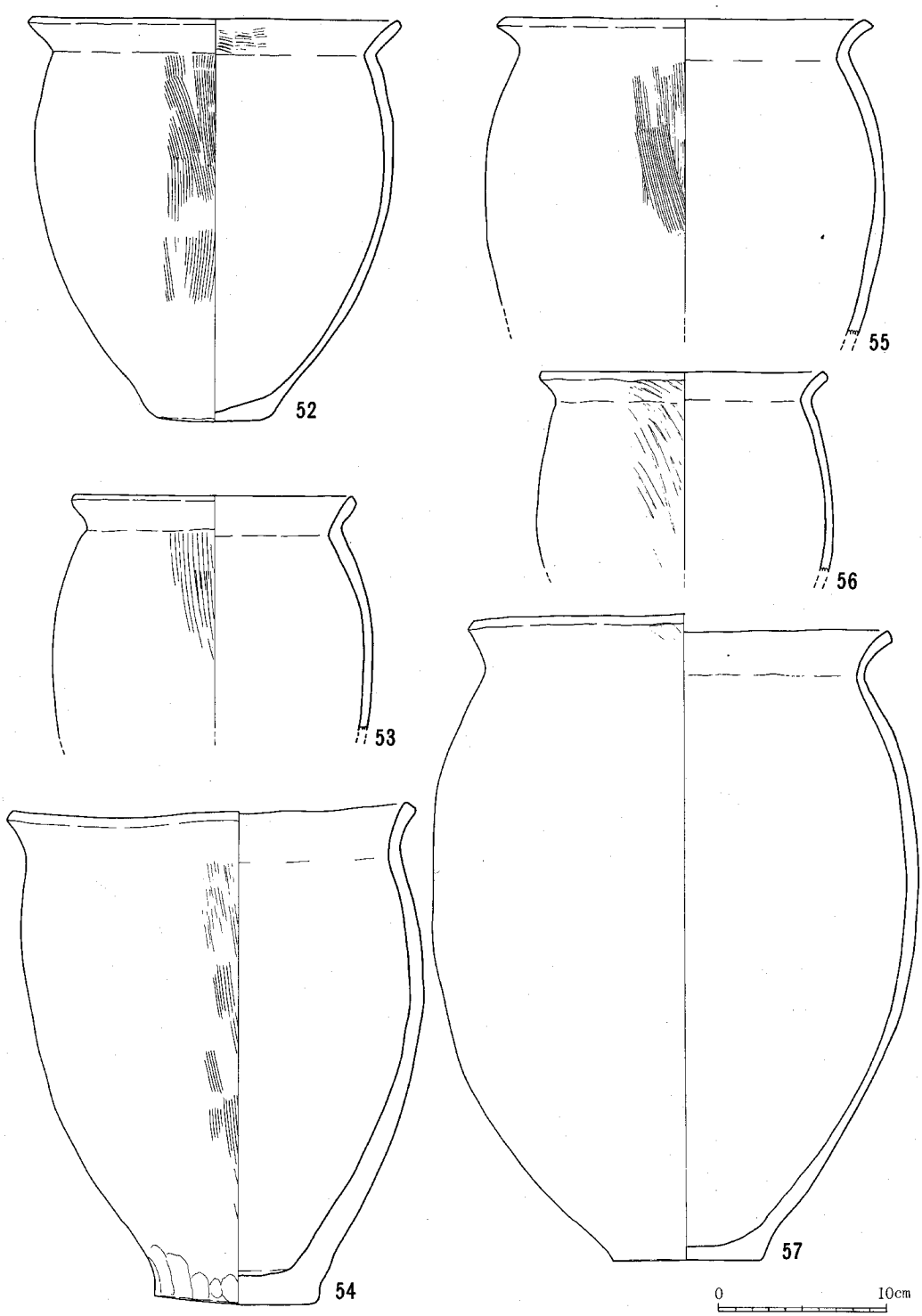


Fig. 27　II・II′層出土土器(8)(４分の１)

【甕形土器】

環濠のII・II′層から最も多く出土した器種であるが、完形もしくは全体形を知り得る資料はさほど多くなかった。よって口縁部の形状を中心に分類を行った。

I類(Fig. 29; 71、72)

口縁部が逆L字形を呈する甕形土器である。口縁部の内側への張り出しは弱く、上端ががやや丸味を帯びている。

II類(Fig. 29; 73)

口縁部がくの字形に外反するが、屈曲部が内湾し、肥厚する特徴をもつ。屈曲部から丸味をもって胴部へ至る。

III類

口縁部がくの字状に外反するもので、最も出土量が多い。口縁部の形状やプロポーションの違いからa～hの8類に分類した。

IIIa類(Fig. 26; 44・45)

くの字状口縁が明瞭な稜をなして外反するもので、口縁端部もシャープに作りあげている。44は頸部に一条の三角凸帯を貼付している。凸帯の有無を除けば両者は胎土・色調・調整法など共に良く似ている。細砂を含む精良な胎土を用い、細かい刷毛目調整を施し、内面はナデ消している。最大径は胴部の中位のやや上方にあると思われる。

IVb類(Fig. 26; 46～48)

大型の胴部とそれに比べて短い頸部をもつ甕形土器で、口縁部は頸部から直線的にかなり外反する。胴部は肩部で張り出し、中位より上方に最大径がある。

IIIc類(Fig. 26; 49～51、Fig. 27; 52・53)

口縁部が頸部内面に稜をなして外反するが、口縁部が立ち上がり気味で屈曲はさほど強くない。最大径が口縁部にあるもの(52)、最大径が肩部にあり、口縁部より僅かに大きく、長い胴部～底部をもつもの(51・53)、最大径が胴中位にあり、頸部が小さいもの(49)の三つのプロポーションがある。51はやや下ぶくれの胴部をもつ。

IIId類(Fig. 27; 55～57、Fig. 28; 59・60、62～64)

口縁内面の稜がほとんどなくなり口縁部が湾曲しながら外反するものである。このため頸部外面にも稜が認められない。55～57は内面に僅かに稜を有している。口唇部はまだシャープである。最大径はすべて胴部にあるが、ほとんどが中位よりさがり、だれ気味である。62はやや肩の張るプロポーションをもっている。56、59は口径・器高ともにやや小型である。56と64の外面調整は粗い刷毛目によるもので、胎土・焼成・色調とも良く似ている。

IIIe類(Fig. 27; 54、Fig. 28; 58、Fig. 29; 65、66)

口縁内面に稜をもたず湾曲気味に外反するが、口縁部がほとんど立ち上がり気味になるもので

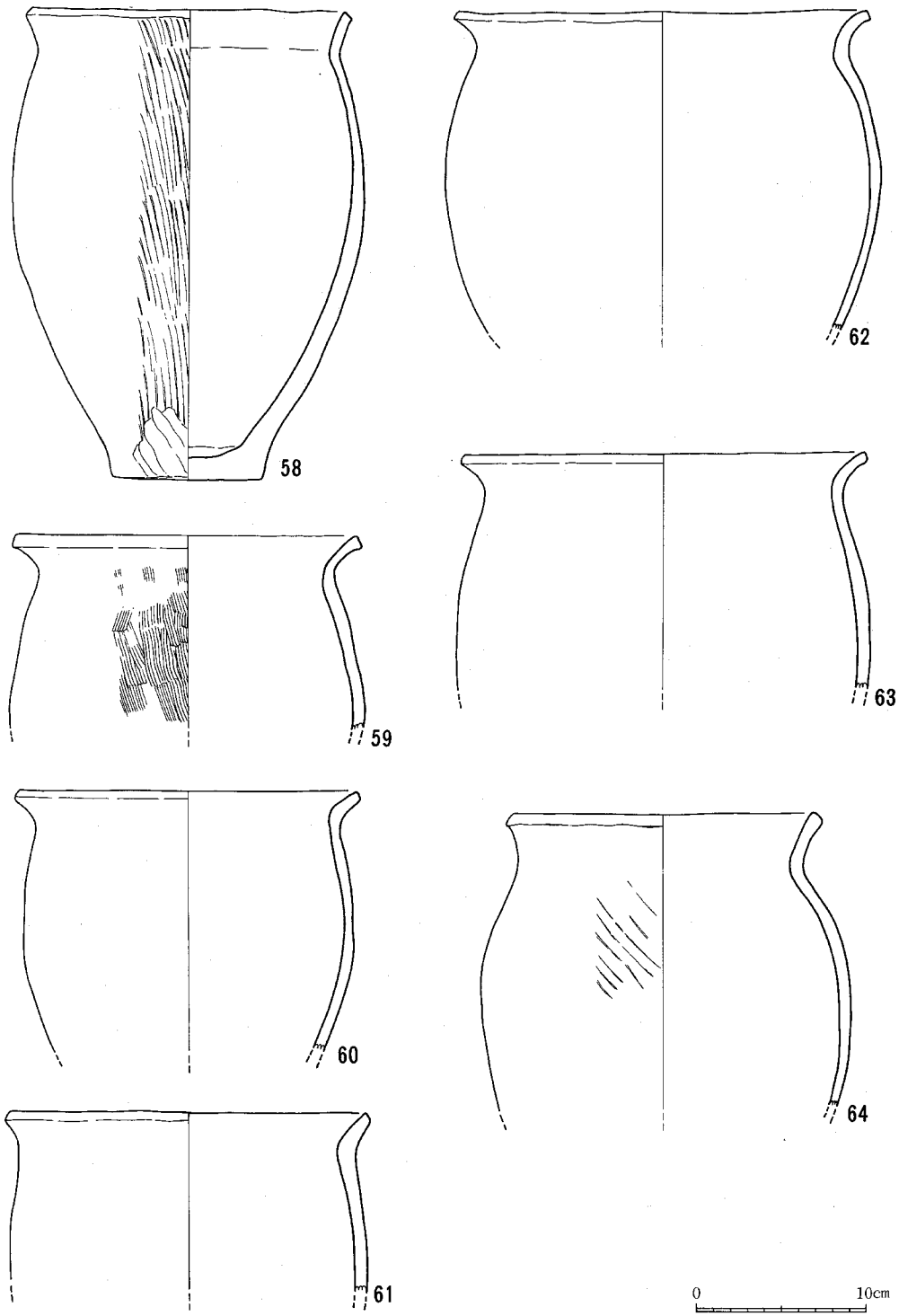


Fig. 28　II・II′層出土土器(9)(4分の1)

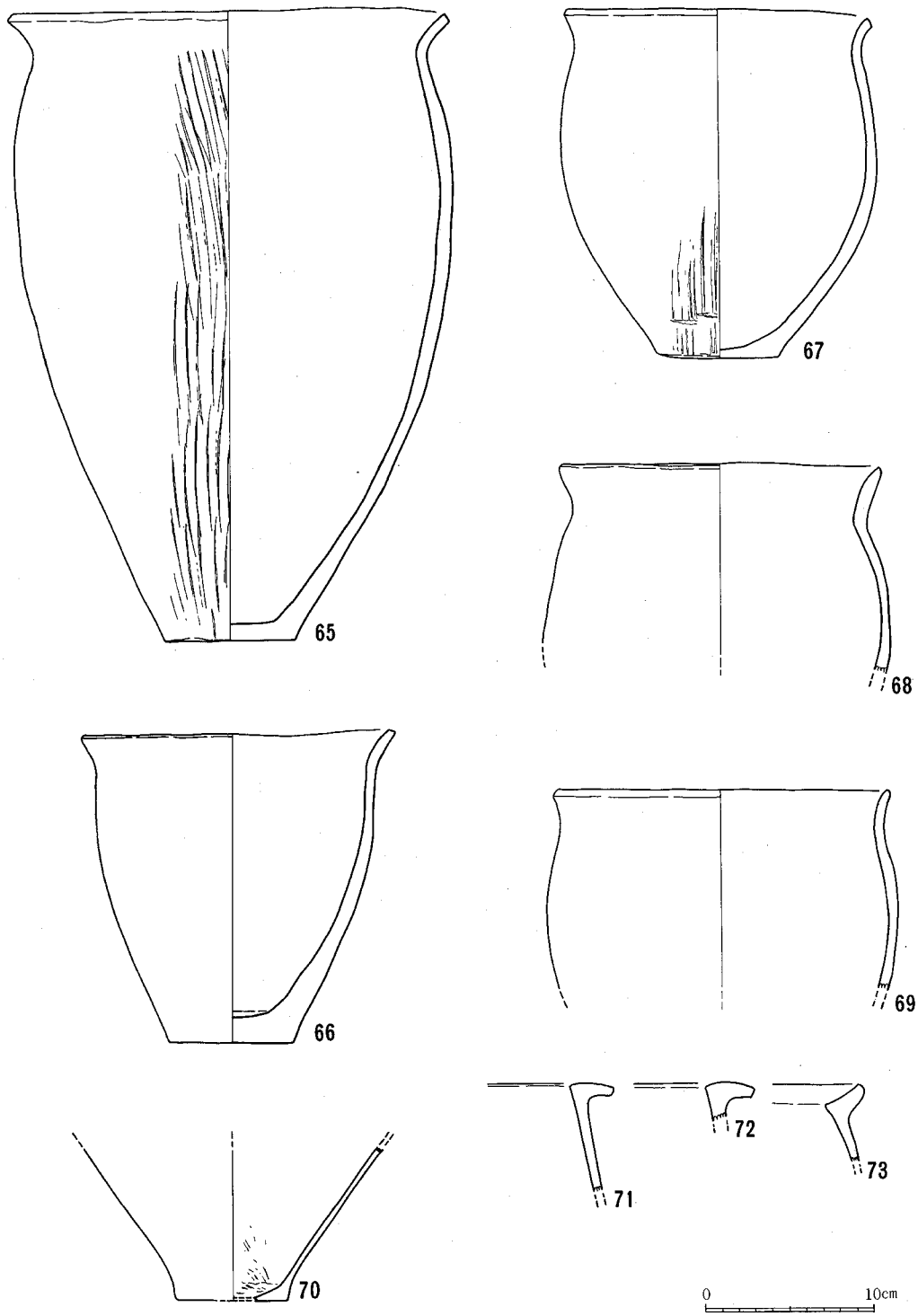


Fig. 29　II・II′層出土土器(10)(４分の１)

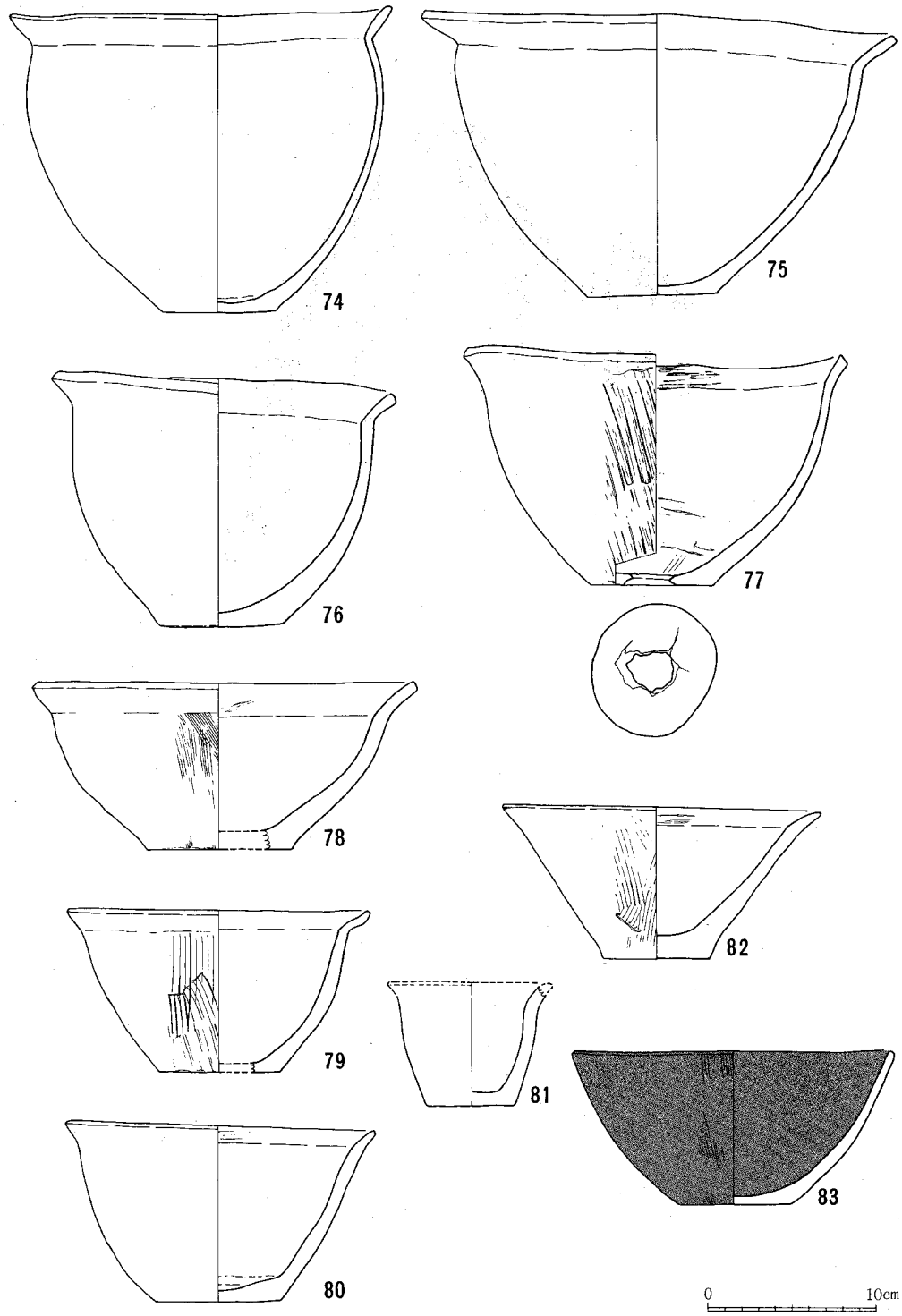


Fig. 30　II・II′層出土土器(11)(４分の１)

ある。全体的にあまり肩の張らないプロポーションが特徴的である。口縁径と胴部径があまり変わらない。58は口径がやや小さい。54・58・66は厚い底部から次第に厚味を減じながら口縁部に至り、全体的に器壁が厚く、重量があるという共通点をもつ。調整法は刷毛目であるが、58と65は特に粗い刷毛目である。54と58は底部にしぼりによる指頭痕が認められる。

Ⅲf類(Fig. 28; 61、Fig. 29; 67・68・69)

口縁部の内面の稜がなくなり、口縁部の外反がほとんどなくなるものである。口縁部はわずかに湾曲しながら上方へ立ち上がるのみである。このため外面にも明瞭な頚部の屈曲が認められない。胴部の張りもほとんどないプロポーションである。67は完形品であるが、やや凸面の底部をもち、粗い刷毛目を施している。

Ⅲg類(Fig. 25; 41～43)

Ⅲd類に似た口縁部～頚部の特徴をもつが、器壁が厚く、口縁端部がやや肥厚している点が異なっている。口縁部外面は平坦に仕上げられ、下方に粘土が張り出している。全体に大型で重量がある。淡橙色の色調をしたもので胎土・焼成の具合とも良く似ている。41・42がK－6グリッド、43がJ－5・6グリッドから出土しており、かなり近接した位置からまとまって出土している。

Ⅲh類(Fig. 22; 23・26)

大きくU字形に外反する口縁部と長球形の大きな胴部が特徴の甕形土器である。26は完成品であるが、底部は平坦で球の一部を裁断したような形態的特徴をもつ。頚部内面に稜が僅かに認められ、そこより器壁が薄くなる。

口縁部から頚部にかけての特徴から分類したが、法量の大小を問わず似た形態をとるようである。口径が15cm以下の小型品と20cm以上の大型品がある。

【鉢形土器】

器形の違いから二類に分類した。

Ⅰ類(Fig. 30; 74～77)

器高と口径の比が小さい身の深い鉢形土器である。丸味を帯びた胴部が特徴的である。75・76は74・77に比べてやや口径が大きく、器高が低いタイプである。外面は刷毛目調整であるが、77のそれは粗い。また底部に焼成後の穿孔が認められる。

Ⅱ類(Fig. 30; 78～81, 82)

器高と口径の比が大きいいわゆる浅鉢に類する鉢形土器である。80・82は78・79に比べ口縁部が屈曲せず、ストレートにしかも僅かに外反するもので、口縁内面に僅かに稜が認められる。84は椀形の丹塗りの鉢形土器である。

【高杯】

完形まで復元できたもの4点、脚の一部を欠くもの2点、脚部のみのもの9点を図化した。

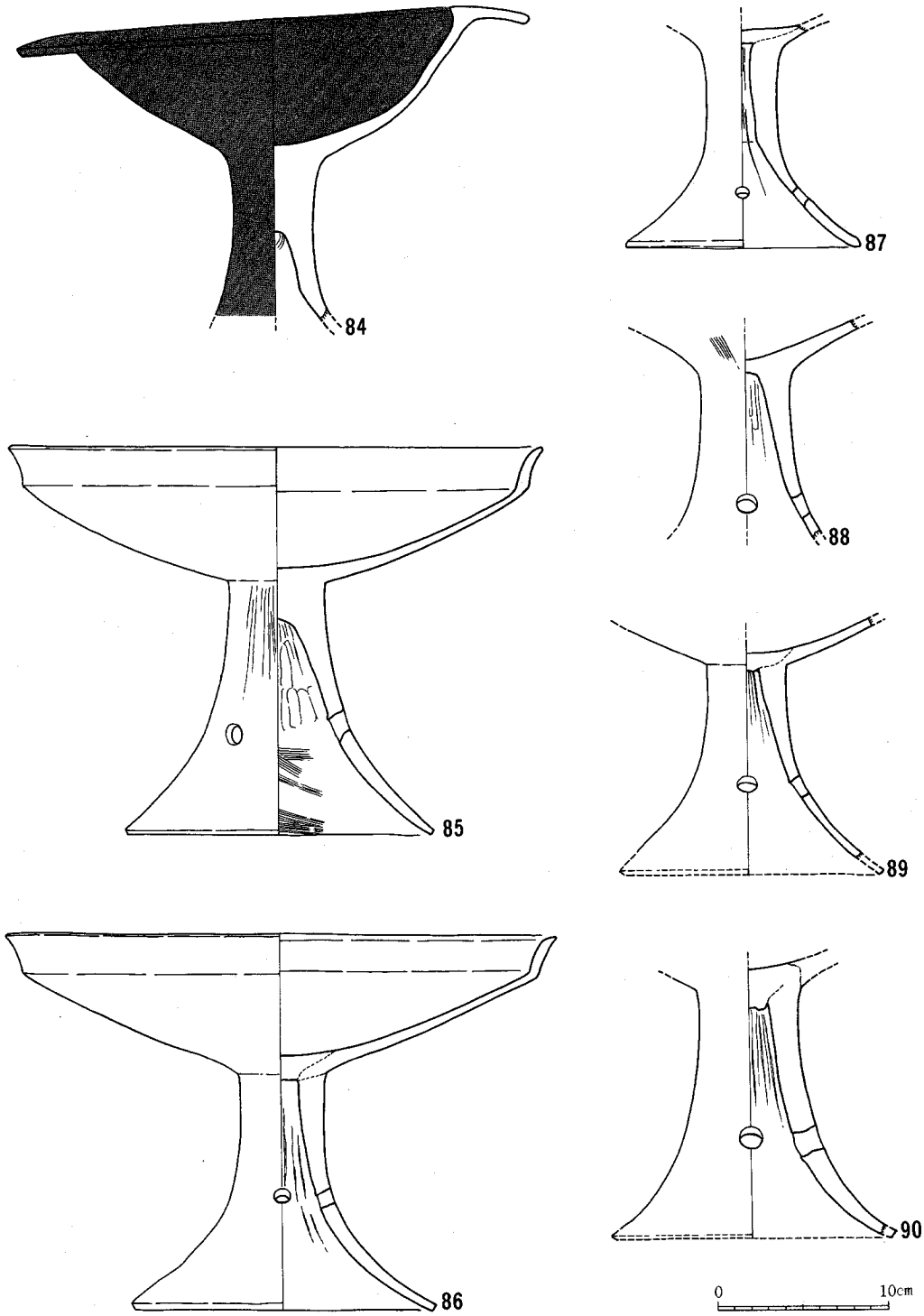


Fig. 31　II・II′層出土土器(12)(４分の１)

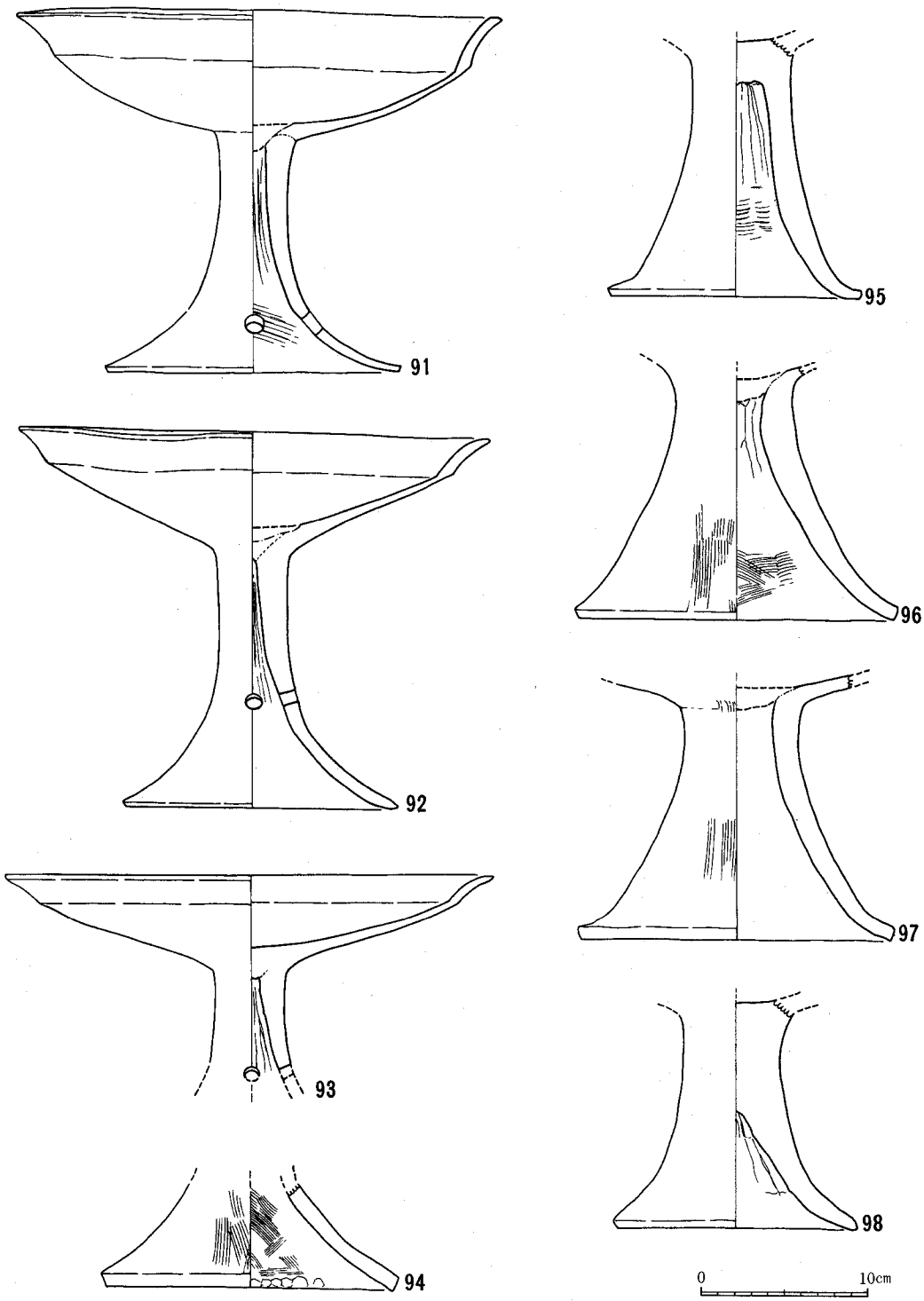


Fig. 32　II・II′層出土土器(13)(４分の１)

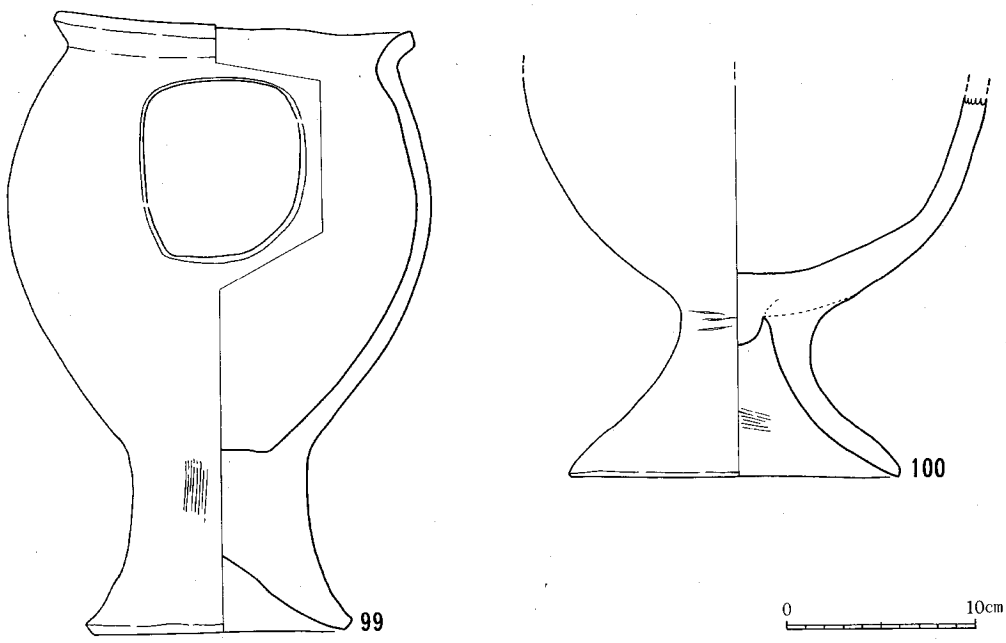


Fig. 33　II・II′層出土土器(14)(4分の1)

その形態的特徴から四類に分類した。

I類(Fig. 31; 84)

鋤先状の口縁部をもつ高杯で、脚部裏面を残してすべて丹を施している。口縁端部はやや丸味を帯びており、下方にさがり気味である。脚部内面は厚く粘土を充塡している。脚部裾を欠損する。

II類(Fig. 31; 85～90、Fig. 32; 91～93)

杯部の口縁部が段をなしてラッパ状にひろがるもので、外反部がさほど開かないもの(86・87・88・92)、外反の度合いがおおきく杯部が浅いもの(93・94)に分けられる。いずれも胴部の孔は3個である。杯部の底は接合の後、粘土の円盤を充塡している。調整は刷毛目の後、丁寧なナデを施している。

III類(Fig. 32; 94～98)

脚部のみの資料は87～90がII類のものと考えられ、それ以外は器壁が厚く大型で、垂直もしくはやや内傾する口縁部と直線的な杯部をもつと考えられる。鋤先状の口縁部の可能性もある。ただし、98については後述する脚付甕形土器の脚とも考えられる。

IV類(Fig. 35; 121)

脚部のみしか復元できなかったが、上部はおそらくII類の杯部に似た形態をもつと考えられる。脚の裾部から段をなして外へ開く二重の裾をもち、その屈曲部に断面四角形の凸帯を巡らし、6ヶ所に一単位6個の刻目を施している。円形の孔(透かし)は二段で、下段が2個単位で

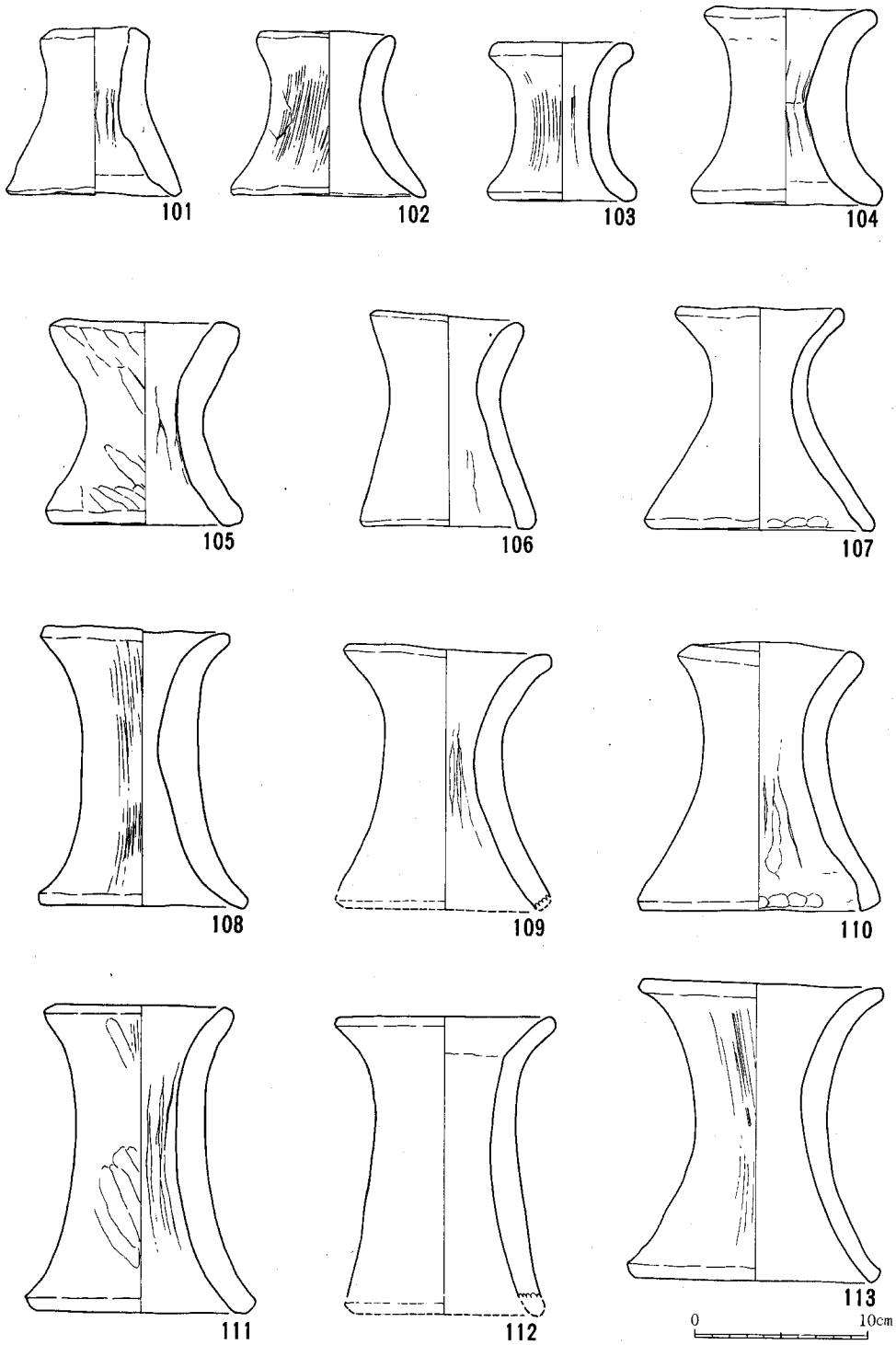


Fig. 34　II・II′層出土土器(15)(４分の１)

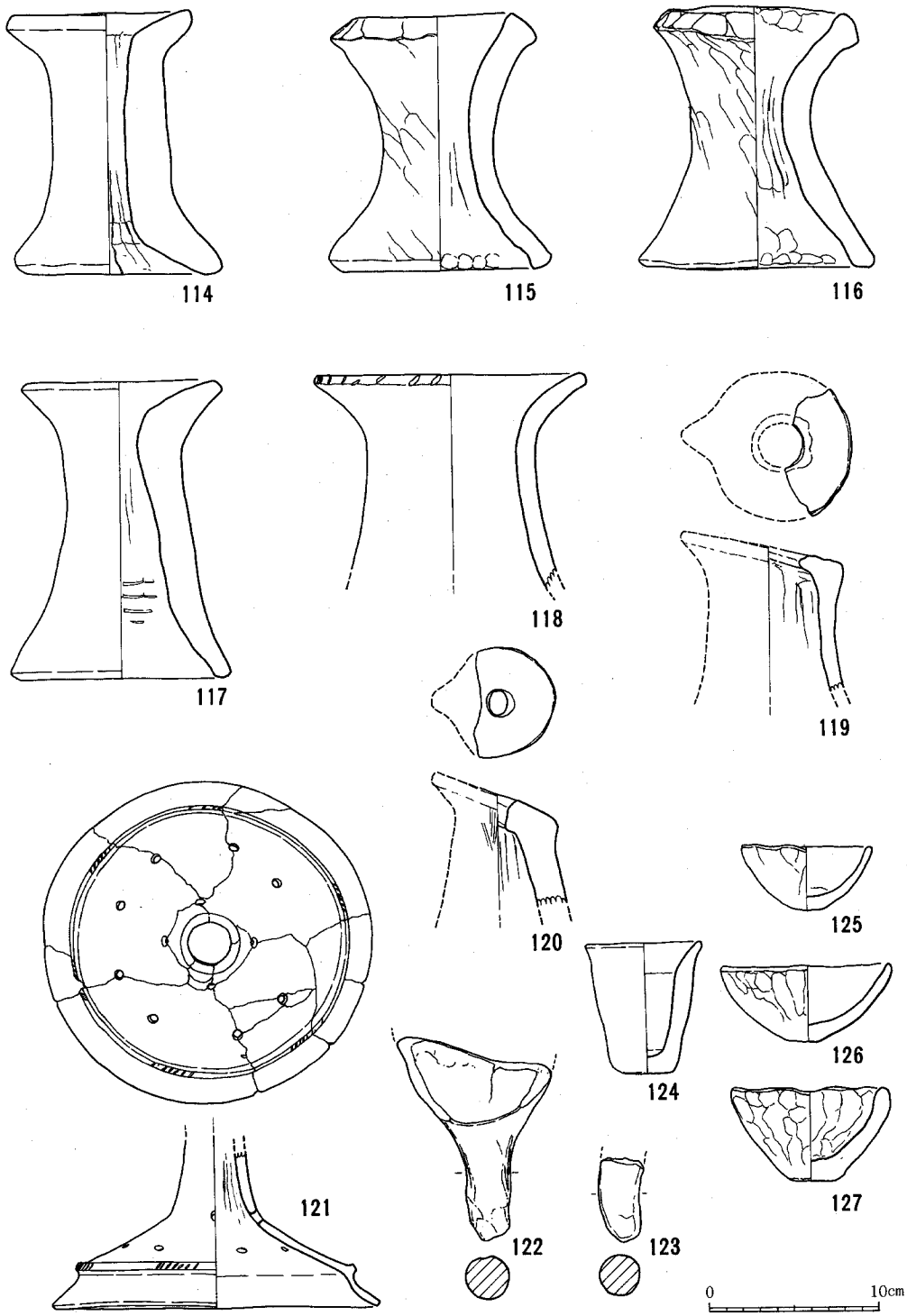


Fig. 35　II・II′層出土土器⑯(４分の１)

4ヶ所の計8個、上段がその間を埋めるように1個単位で4ヶ所の計4個である。砂粒をあまり含まない精選された胎土で、他の土器と区別される。

【脚付甕形土器】(Fig. 33; 99・100)

短く器壁の厚い脚をもつ甕形土器である。99は胴部上方に隅丸方形の穴がある。胴張りのする短頸の甕形土器をのせる。100は口縁部から胴部上半を欠き、その形状は不明である。脚は裾が広く外方に張り出している。上部の甕形土器の器壁も厚い。上部と脚部の接合はソケット状の凸部を脚部に挿入している。

【器台】

器台は最も安定した器形で、完形品も多い。その形状から大きく2つに分類した。

I類(Fig. 34; 101～113、Fig. 35; 114～118)

筒形の器台である。大きさや器形に様々なものがある。外面の調整は刷毛目を基本とするがほとんど判別できないものが多い。ほぼ上部の径が小さく、下部はややそれより大きいものが大勢を占めている。中位よりやや上ですぼまる例が多いなかで103は上下がシンメトリックでやや特異な存在である。115と116はその大きさや器表面上に指頭痕が顕著につくなど、形状・製作手法が良く似ている。118は他に比べて大型で、身受部が大きく外反し、その端部に刻目をもっている。

II類(Fig. 35; 119・120)

いわゆる「沓形器台」と呼ばれるものである。119は120に比べやや大型であるが器壁が薄い。いずれも脚端部を欠損している。

【ミニチュア土器】(Fig. 21; 15・16、Fig. 30; 81、Fig. 35; 124)

器高・口径とも10cm以下の土器であり、壺形土器(15・16)、甕形土器(81・124)に分けられる。器面の調整は丁寧なナデによるもので、手捏土器と区別される。

【手捏土器】(Fig. 35; 125～127)

内外面に指頭痕を残す浅い鉢形の土器である。器面全体を手によるつまみあげで整形したもので、僅かに平底状の底部をもつ。

【土製品】(Fig. 35; 122・123)

122は柄杓形の土製品と思われる。8cmほどの柄をつけ、径10cm、深さ5cm前後の受け部をもつ。123はその柄の部分の破片と考えられるが、支脚土器の脚部の可能性もある。他の遺構(包含層)から同様のものが2点出土している(Fig. 41; 21・22)。

②底部(表1・2、Fig. 36)

SD-01内から出土した底部の数はかなりの量に昇るが、その形態から便宜的に5つのタイプに分類した。a－底面が平坦で胴部から内湾気味に移行するもの。b－平坦な底面をもつもので、胴部から内湾気味に移行する。しかしその度合いはaに比べ小さい。c－底面が平坦で、

タイプ＼底径(cm)	3～4	4～5	5～6	6～7	7～8	8～9	9～10	10～11	11～12	12～13	13～14	14～15	合計
a					1								1
b		2	2	8	27	24	7	1	1	1	2		75
c		2	2	7	13	8	6	4	2				44
d			2	8	13	21	2	5	1				52
e		1	3	2	2	5	4	1	1	1			20
合　計		5	9	25	56	58	19	11	5	2	2		192

表１　II・II′層出土底部のタイプ別個数

残存率＼底径(cm)	3～4	4～5	5～6	6～7	7～8	8～9	9～10	10～11	11～12	12～13	13～14
$\frac{1}{1}$ (100%)		200	200	900	1300	1500	500				
$\frac{4}{5}$ (80%)		80									
$\frac{3}{4}$ (75%)				75	75						
$\frac{2}{3}$ (65%)				130	130	130					
$\frac{1}{2}$ (50%)			250	150	50	100					
$\frac{1}{2}$ (33%)	66		33	99	363	132	132	66			
$\frac{1}{4}$ (25%)	25	75	75	350	225	125				25	
$\frac{1}{5}$ (20%)	20	20	100	160	200	60	20	20			
その他(10%)		20	30	140	100	60	60	40	20	10	
合　計	111	395	688	1954	2453	2082	711	126	20	35	0

表２　II・II′層出土底部の残存率と個数

胴部への立ち上がりが外反気味で直線的に広がる。 d－底面が僅かに凸面をなし、 胴部への立ち上がりはもしくはややふくらむもの。e－dと同じく底面が凸面をなすが、胴部への立ち上がりが外方へ広がるもの。この５タイプの底部の底径の大きさと層位ごとの出土状況を示したのが第１表である。この表を見ると、底径の大きさは６～10cmが一番多く大勢を占めている。ａタイプは１点のみで、II・II′層の主体を占めるものではない。これに対し、ｂタイプは85点と最もその数が多い。これに次ぐのがｄ・ｃタイプで、ｅタイプが20点と一番少ない。平底と凸面の底部の比は、b＋c：d＋e＝127：72で、およそ２倍に近い比率を示している。これは本層が、丸底化へ移行する要素を含みながらも依然として平底が主体を占める時期であることを示

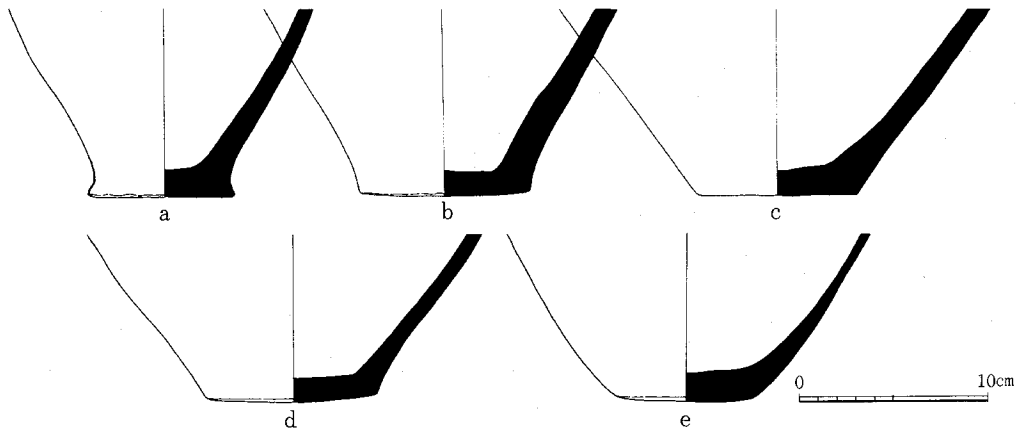


Fig. 36　底部分類(a～e)（４分の１）

挿図番号	番号	器種	型式分類	調整 外面	調整 内面	焼成	色調	胎土	残存率	出土位置
20	1	壺	IIa	ナデ 頸部にハケ目が残る	ナデ	良	明橙色	石英砂含む	1/4残	拡II
	2	壺	I	ナデ+丹塗	ナデ+丹塗	良	淡赤色	石英砂含む	1/8残	拡II
	3	壺	II a	ナデ	ナデ	良	(内)灰橙色 (外)暗橙色	石英砂含む	1/8残	拡II
	4	壺	II b	ナデ	ナデ	良	(内)暗黄褐色 (外)明赤褐色	細粗砂多く含む	口縁～頸部残	No.7
	5	壺	II a	ナデ	ナデ	良	灰茶褐色	石英砂含む	1/8残	No.73
	6	壺	II b	ナデ。底部付近にハケ目が残る	ナデ	良	淡赤褐色	砂粒多く含む	ほぼ完成	No.147 No.152 M-11II' N-11II'(3) O-12II(3)
	7	壺	II b	ナデ。胴部中位にハケ目が残る	ナデ	良	淡赤褐色	石英砂多量に含む	3/8残	O-12II'(4) O-13II'(2) O-14II'(2)
	8	壺	II b	口縁・肩部・ナデ・頸部細かいハケ(縦)	ナデ。頸部に横方向のハケ目が残る	良	淡橙色	砂粒多く含む	3/8残	P-14II(2) P-14II' No.92
21	9	壺	II b	口縁部 ナデ 頸部 ハケ(縦)	ナデ。頸部に横方向のハケ目が残る	良	(内)灰茶褐色 (外)暗褐色	石英砂含む	1/8残	No.84 O-12II'(2) 拡II
	10	壺	II b	ハケ+ナデ	ナデ	良	淡赤褐色	石英砂含む	胴～底部欠	No.171
	11	壺	II b	ナデ	ナデ	良	(内)暗赤褐色 (外)黄橙色	石英砂多く含む	1/8残	No.167(2)
	12	壺	III	ナデ	ナデ	やや良	淡橙色	石英砂含む	1/4残	P-13II
	13	壺	III	ナデ	ナデ	やや良	白橙色	細砂含む	1/4残	O-12II'
	14	壺	IX b	ナデ+丹塗	ナデ+丹塗	良	明橙色	砂粒含む	1/8残	拡II'
	15	壺	ミニチュア土器	ナデ	ナデ	良	白橙色	砂粒含む	1/8残	拡II'
	16	壺	ミニチュア土器	ナデ	ナデ	良	白橙色	石英砂含む	1/8残	II
	17	壺	IX b	口縁～頸部 ナデ 胴部 ハケ(縦)	口縁～頸部、ナデ 胴部 ハケ(縦)	良	灰白色	砂粒多く含む	1/8残	No.144
	18	壺	IX b	ナデ+丹塗	ナデ	やや良	灰赤色	石英砂含む	完形	No.116 No.115
	19	壺	IX a	口縁～頸部 ナデ 胴～底部丹塗磨研	ナデ	良	淡赤褐色	細砂含む	1/4欠	No.150
	20	壺	IV	丹塗	ナデ	良	(内)淡橙色 (外)淡赤褐色	細砂少量含む	図上復元	M-10II(2) M-9II K-7II'
	21	不明	把手	ナデ	ナデ	良	白茶褐色	細砂含む	把手のみ	II
22	22	壺	VIII	ハケ(縦)+丹塗	ハケ(横)+丹塗	良	赤橙色	石英砂含む	胴部代下を欠く	O-12II'(4) No.160(5)
	23	壺	III h	ナデ	ナデ	良	白橙色	砂粒多く含む	約1/3残	No.36
	24	壺	VIII	ハケ(縦)	ナデ	良	赤橙色	砂粒多く含む	1/8欠く	M-9II' No.156 M-10II'(2) N-10II(2)
	25	壺	VII	不明	ナデ	良	橙色	粗砂含む	完形	No.181
	26	壺	IV h	不明	ナデ	良	淡茶褐色	砂粒多く含む	1/3残	O-12II No.76 O-13II No.82
23	27	壺	V	不明	ナデ	良	(内)淡赤褐色 (外)明橙色	粗砂含む	胴部以下を欠く	No.91 拡II
	28	壺	VI b	ハケ(縦)	ハケ(横)+丹塗	良	(内)赤橙色 (外)白茶褐色	砂粒多く含む	口縁部のみ	II
	29	壺	不明	ナデ	ナデ	良	(内)淡黄白色 (多)赤橙色	細砂粒含む	口縁部のみ	拡II
	30	壺	VI b	ナデ	ナデ	良	淡橙色	砂粒多く含む (赤褐色粘土粒)	1/4残	No.187
	31	壺	VI a	ナデ+丹塗	ナデ	良	赤茶褐色	砂粒多く含む	口縁部のみ	N-11・12III
	32	壺	VI b	不明	ナデ	良	淡赤褐色	砂粒多く含む	1/4残	NO25 M-9II'
	33	壺	VI b	ナデ+丹塗	ナデ	良	(内)淡黄褐色 (外)赤橙色	石英砂含む (赤褐色粘土粒)	1/4残	O-13II' 拡II

表3 SD-01II・II'層出土土器観察表(1)

挿図番号	番号	器種	型式分類	調整 外面	調整 内面	焼成	色調	胎土	残存率	出土位置
24	34	壺	Ⅳb	ナデ＋丹塗	ナデ＋丹塗	良	明赤褐色	砂粒多く含む	1/2残	N－11Ⅱ
	35	壺	Ⅳb	ハケ(縦)	一部ハケ(横)ナデ	良	(内)淡橙色 (外)淡黄褐色	砂粒多く含む	1/2残	N－10Ⅱ′
	36	壺	Ⅳb	ハケ(縦)	ハケ(横)・ナデ	良	淡褐色	砂粒多く含む (赤褐色粘土質)	胴部以下を欠く	No.93・P－14Ⅱ N-11Ⅱ N-12Ⅱ
	37	壺	Ⅳb	不明	ナデ	良	(内)淡灰色 (外)淡黄色	石英砂含む (赤褐色粘土質)	1/2残	O－13Ⅱ′
25	38	壺	Ⅷ	不明	ナデ	良	赤橙色	砂粒多く含む	ほぼ完成	No.4 J－5Ⅱ No.5
	39	壺	Ⅷ	ハケ(縦)	ナデ	良	(内)灰橙色 (外)鮮橙色	石英砂含む	1/2残	No.185
	40	壺	Ⅷ	不明	ナデ	良	暗橙色	石英砂含む	口縁・底部欠	M－9Ⅱ′ No.113
	41	甕	Ⅲg	口縁～頸部 ナデ 胴部 粗いハケ(縦)	ナデ	良	(内)黒褐色 (外)淡橙色	石英砂含む	1/3残	No.8
	42	甕	Ⅲg	ナデ。胴部の一部にタタキ痕(？)	ナデ	良	赤橙色	石英砂含む	底部欠	No.6(4) Ⅱ(2) K－6Ⅱ(2) No.12
	43	甕	Ⅲg	ハケ(縦)	ナデ	良	赤橙色	砂粒多く含む	ほぼ完形	No.5 No.6 No.3 J－5Ⅱ J－6Ⅱ
26	44	甕	Ⅲa	口縁～頸部、ナデ 胴部 ハケ(縦)	口縁～頸部 ナデ 胴部 ハケ(縦)	良	淡茶褐色	細砂わずかに含む	口縁1/2残	No.106 No.81 O－13Ⅱ′
	45	甕	Ⅲa	口縁～頸部、ナデ 胴部 ハケ(縦)	ナデ	良	茶褐色	細砂わずかに含む	口縁1/2残	No.104(2)
	46	甕	Ⅲb	ナデ	ナデ	良	(内)暗褐色 (外)暗橙色	石英砂多量に含む	口縁1/4残	Ⅱ(2)
	47	甕	Ⅲb	口縁～頸部ナデ 胴上部ヘラ状の横ナデ 胴上半ハケ(縦)	ナデ	良	(内)鮮橙色 (外)茶褐色	石英砂含む	3/4残	No.139 No.46(2) N－11′(3)
	48	甕	Ⅲb	口縁～頸部 ナデ 胴部 ハケ(縦)	ナデ	良	(内)橙 色 (外)暗赤褐色	石英砂含む	底部欠	M－9Ⅱ′(10) M－9Ⅱ(6)
	49	甕	Ⅲc	口縁～頸部 ナデ 胴部 ハケ(縦)	ナデ	良	(内)赤褐色 (外)暗茶褐色	石英砂含む	底部欠	No.125(3) N-10Ⅱ′ M-9Ⅱ′(4) Ⅱ′
	50	甕	Ⅲc	口縁～頸部 ナデ 胴部 ハケ(縦)	ナデ	良	(内)黒橙色 (外)暗橙色	石英砂含む	1/2残	No.56(4) N-11Ⅱ N-11(2) P-11Ⅱ
	51	甕	Ⅲc	ハケ(縦)	ナデ	良	(内)灰茶褐色 (外)暗茶褐色	石英砂含む	口縁・底部欠	No.179(3) No.185(5) O-15Ⅱ′ O-13Ⅱ′(2)
27	52	甕	Ⅲc	口縁～頸部 ナデ 胴部 ハケ(縦)	口縁～胴部上半ハケ＋ナデ 胴部下半 ナデ	良	(内)灰茶褐色 (外)暗茶褐色	石英砂含む	図上復元	No.105 O-13Ⅱ′(3) No.80 O-12Ⅱ′(3) O－12Ⅱ
	53	甕	Ⅲc	口縁～頸部 ナデ 胴部 ハケ(縦)	ナデ	良	暗茶褐色	石英砂含む	1/2残	N－11Ⅱ(2) N－11Ⅱ′(4) N－10Ⅱ′(2)
	54	甕	Ⅲe	口縁～頸部 ナデ 胴部以下 ハケ(縦)	ナデ	良	(内)灰褐色 (外)茶褐色	石英砂多く含む	1/4残	P－13Ⅱ′(6) No.181 No.191 No.193
	55	甕	Ⅲd	口縁～頸部 ナデ 胴部 ハケ(縦)	ナデ	良	(内)暗茶褐色 (外)明茶褐色	石英砂含む	1/2残	O－13Ⅱ′ 拡Ⅱ′(5) 拡Ⅱ
	56	甕	Ⅲd	口縁部 ナデ 頸～胴部粗いハケ(縦)	ナデ	良	灰橙色	石英砂含む	底部欠	No.114 M－9Ⅱ′(2)
	57	甕	Ⅲd	口縁～頸部 ナデ 頸～底部粗いハケ(縦)	ナデ	やや良	明茶褐色	砂粒多く含む	ほぼ完成	No.5(2) No.6 Ⅱ
28	58	甕	Ⅲe	口縁部 ナデ 頸～底部粗いハケ(縦)	ナデ	やや良	淡赤褐色	砂粒多く含む	完成	No.156 O-13Ⅱ No.157 O－12Ⅱ′
	59	甕	Ⅲd	口縁～頸部 ナデ 胴部 ハケ(縦)	ナデ	良	(内)暗灰色 (外)暗茶褐色	石英砂わずかに含む	胴～底部欠	No.154
	60	甕	Ⅲd	口縁～頸部 ナデ 胴部 ナデ(？)	ナデ	やや良	(内)淡茶褐色 (外)暗橙色	石英砂含む	1/4残	O－12Ⅱ′(2)
	61	甕	Ⅲf	不明	不明	やや良	(内)暗茶褐色 (外)茶褐色	石英砂含む	1/2残	No.122(4) N－10Ⅱ′(2)
	62	甕	Ⅲd	不明	ナデ	やや良	(内)橙 色 (外)暗褐色	砂粒多く含む	底部欠	K－6(2) J－6(7) Ⅱ(2)
	63	甕	Ⅲd	口縁～頸部 ナデ 胴部 ハケ(縦)	ナデ	良	(内)淡橙色 (外)暗橙色	石英砂含む	1/4残	N－10Ⅱ′(2)
	64	甕	Ⅲd	口縁～頸部 ナデ 胴部 粗いハケ(縦)	ナデ	やや良	(内)淡茶褐色 (外)暗橙色	石英砂多く含む	底部欠	拡Ⅱ′(21) O－13Ⅱ
29	65	甕	Ⅲe	口縁～頸部 ナデ 胴～底部粗いハケ(縦)	ナデ	良	赤橙色	砂粒多く含む	完形	拡Ⅱ
	66	甕	Ⅲe	ナデ(？)	ナデ	良	灰橙色	砂粒含む	1/2残	No.156(2) No.－11Ⅱ

表4　SD-01Ⅱ・Ⅱ′層出土土器観察表(2)

挿図番号	番号	品種	型式分類	調整 外面	調整 内面	焼成	色調	胎土	残存率	出土位置
29	67	甕	Ⅲf	口縁～胴部上半 ナデ 胴部下半粗いハケ(縦)	ナデ	良	灰橙色	砂粒多く含む	ほぼ完形	拡Ⅱ′
	68	甕	Ⅲf	口縁～頸部 ナデ 胴部 ハケ(縦)	ナデ	良	灰橙色	石英砂含む	底部欠	M－10Ⅱ′(2) No.144 N-11Ⅱ′
	69	甕	Ⅲf	口縁～頸部 ナデ 胴部 粗いハケ(縦)	ナデ	良	灰赤褐色	石英砂含む	1/8残	Ⅱ
	70	甕	底部	ハケ(縦)	ケズリ状の粗いナデ(?)	良	(内)黒褐色 (外)暗茶褐色	細砂含む	底部のみ	0-12Ⅱ′ 拡Ⅱ(2)拡Ⅱ′ K-7Ⅱ(4) M-9Ⅱ(2) K-6Ⅱ
	71	甕	Ⅰ	ハケ(縦)	ナデ	良	(内)黄橙色 (外)暗橙色	砂粒多く含む	口縁部のみ	0－12Ⅱ′
	72	甕	Ⅰ	ナデ	ナデ	良	黄茶褐色	細砂粒含む	口縁部のみ	K·L－5·6Ⅱ′
	73	甕	Ⅱ	ナデ	ナデ	良	橙紫色	石英砂多く含む	口縁部のみ	No.59
30	74	鉢	Ⅰ	口縁～頸部 ナデ 胴～底部 ハケ(縦)	ナデ	良	淡黄橙色	石英砂多く含み	1/8残	No.181(3) No.187(4) 0－13Ⅱ′(6)
	75	鉢	Ⅰ	不明	ナデ	不良	淡茶褐色	細砂含む	1/8残	拡Ⅱ 拡Ⅱ′
	76	鉢	Ⅰ	口縁～頸部 ナデ 胴～底部 ハケ(縦)	ナデ	良	(内)橙色 (外)淡赤褐色	石英砂多量に含む	口縁の一部除きほぼ完形	No.98(3) J－6Ⅱ
	77	鉢	Ⅰ	口縁部 ナデ 頸～底部粗いハケ(縦)	ナデ	良	淡黄褐色	砂粒含む	完形	No.151 N-11Ⅱ′
	78	鉢	Ⅱ	口縁～頸部 ナデ 胴～底部ハケ(縦)	口縁～頸部ハケ目残る ナデ	不良	白橙色	砂粒僅かに含む	1/8残	0－11Ⅱ′
	79	鉢	Ⅱ	口縁～頸部 ナデ 胴～底部粗いハケ(縦)	ナデ	良	(内)橙色 (外)赤褐色	砂粒含む	1/8残	No.140
	80	鉢	Ⅱ	不明	口縁～頸部ハケ目残る ナデ	良	(内)灰黒色 (外)灰橙色	石英砂含む	1/8残	0－13Ⅱ′ No.161
	81	鉢	ミニチュア土器	ナデ	口縁～頸部ハケ目残る ナデ	良	淡黄褐色	石英砂含む	1/8残	No.49(2)
	82	鉢	Ⅱ	ハケ(縦)	口縁～頸部ハケ目残る ナデ	良	淡赤褐色	石英砂含む	1/8残	No.124
	83	鉢	Ⅱ	ハケ(縦)＋丹塗	ナデ＋丹塗	良	淡赤褐色	石英砂含む	完形	P-13Ⅱ′ No.181内 No.174
31	84	高杯	Ⅰ	丹塗・磨研	丹塗・磨研	良	暗赤色	石英砂多く含む	脚部欠	N-10Ⅱ′ M-9Ⅱ′ N-11Ⅱ′(3) No.134 N-9Ⅱ′ (3) O-12Ⅱ′
	85	高杯	Ⅱ	ナデ	ナデ 脚部ヨコ方向のハケ目残る	やや良	淡茶褐色	細砂含む	杯部の3/4欠	N-11Ⅱ No.47(4) N－10(2) M-9 No.94 No.66
	86	高杯	Ⅱ	ナデ	ナデ	やや良	黄褐色	細砂含む	1/2残 脚部の一部欠	P-13Ⅱ′ O 12Ⅱ′(2) O-13Ⅱ′(3) P－14Ⅱ′
	87	高杯	Ⅱ	ナデ	ナデ	良	暗黄褐色	石英砂含む	杯部欠	No.99
	88	高杯	Ⅱ	ナデ	ナデ	良	淡橙色	石英砂多量に含む	杯部・脚すそ欠	拡Ⅱ
	89	高杯	Ⅱ	ナデ	ナデ	良	淡橙色	砂粒僅かに含む	杯部・脚すそ欠	拡Ⅱ(2)
	90	高杯	Ⅱ	ナデ	ナデ	良	灰茶褐色	石英砂多量に含み	杯部・脚すそ欠	No.72
32	91	高杯	Ⅱ	ナデ	ナデ 脚部横方向のハケ目残る	良	明茶褐色	細砂多量に含む	脚部すそ欠	No.68(3) No.51 No.64 No.63(脚) O-12Ⅱ No.57 O-12
	92	高杯	Ⅱ	ナデ	ナデ	良	明茶褐色	砂粒多く含む	脚部すそ欠	P－14 N－12 No.83
	93	高杯	Ⅱ	ナデ	ナデ	良	赤橙色	わずかに砂含む	脚部すそ欠	No.42 Ⅱ(6) N-11Ⅱ O-12Ⅱ M-10Ⅱ(2) No.42
	94	高杯	Ⅲ	ハケ目(縦)	ハケ目(斜)	良	(内)灰橙色 (外)暗褐色	石英砂多く含む	脚部すそのみ	No.86(6) 0－12Ⅱ(2)
	95	高杯	Ⅲ	ハケ＋ナデ	ハケ＋ナデ	良	赤褐色	石英砂含む	杯部欠	No.144
	96	高杯	Ⅲ	ハケ(縦)	ナデ 脚部横方向のハケ目が残る	良	白橙色	石英砂多く含む	杯部欠	No.96
	97	高杯	Ⅲ	ハケ(縦)	ナデ	良	灰橙色	石英砂多量に含む	杯部欠	0－13Ⅱ(2) No.95
	98	高杯	Ⅲ	ナデ	ナデ	良	赤橙色	石英砂多量に含む	杯部欠	拡Ⅱ′
33	99	脚付甕		ナデ 胸部に横方向のハケ目残る	ナデ	良	赤褐色	砂粒多く含む	口縁一部欠	K－6 J－6 No.151(脚部)

表5 SD-01Ⅱ・Ⅱ′層出土土器観察表(3)

挿図番号	番号	器種	型式分類	調整 外面	調整 内面	焼成	色調	胎土	残存率	出土位置
33	100	脚付甕		ナデ	ナデ 脚部横方向のハケ目が残る	良	暗橙色	砂粒多く含む	口縁～胴部欠	拡II(4) 拡II′(2)
34	101	器台	I	ナデ	ナデ	良	淡赤褐色	砂粒多く含む	完形	No.9
	102	器台	I	ハケ(縦)	ナデ	良	淡赤褐色	砂粒多く含む	完形	No.175
	103	器台	I	ハケ(縦)	ナデ	良	淡赤褐色	砂粒多く含む	完形	No.170
	104	器台	I	ナデ	ナデ	良	淡赤褐色	砂粒多く含む	完形	No.153
	105	器台	I	ナデ 指圧痕残る	ナデ	良	淡赤褐色	細砂多く含む	完形	No.149 II′
	106	器台	I	ナデ	ナデ	良	明橙色	砂粒含む	½残	拡II(3)
	107	器台	I	ナデ	ナデ	良	淡赤褐色	砂粒多く含む	½残	No.155
	108	器台	I	ハケ(縦)	ナデ	良	淡赤褐色	砂粒多く含む	完形	No.127
	109	器台	I	ナデ	ナデ	良	暗灰橙色	砂粒多く含む	½欠	拡II N－10II(2)
	110	器台	I	ナデ	ナデ	良	淡赤橙色	砂粒多く含む	完形	No.176
	111	器台	I	ナデ 指圧痕残る	ナデ	良	淡赤褐色	砂粒多く含む	完形	No.18
	112	器台	I	ナデ	ナデ	良	灰橙色	砂粒多く含む	一部欠	0－14II P－15II 0－13II 0－12II
	113	器台	I	粗いハケ(縦)	ナデ	良	淡赤褐色	砂粒多く含む	完形	No.178
35	114	器台	I	ナデ	ナデ	良	赤褐色	砂粒多く含む	ほぼ完形	No.182
	115	器台	I	ナデ 指圧痕残る	ナデ	良	暗赤橙色	砂粒多く含む	完形	No.141
	116	器台	I	ナデ 指圧痕残る	ナデ	良	淡赤褐色	砂粒多く含む	完形	No.107
	117	器台	I	ナデ	ナデ	良	淡赤橙色	砂粒多く含む	完形	No.26(4) II
	118	器台	I	ナデ	ナデ	良	(内)橙色 (外)灰橙色	細砂含む	½残	拡II′
	119	器台	II	ハケ＋ナデ	ナデ	良	暗橙色	砂粒僅かに含む	½残 下半部欠	II
	120	器台	II	ハケ＋ナデ	ナデ	良	赤褐色	砂粒多く含む	½残 下半部欠	II
	121	飾り高杯	IV	ナデ	ナデ	良	赤橙色	細砂含む	上半部欠	0-12II No.74 No.60 N－12II(2) II(3) No.61
	122	土製品		手捏ね	手捏ね	良	赤橙色	砂粒多く含む	略½残	0－13II
	123	土製品		手捏ね	手捏ね	良	灰橙色	細砂含む	脚(把手)のみ	II
	124	ミニチュア土器		ナデ	ナデ	良	灰橙色	石英砂含む	ほぼ完形	拡II′
	125	手捏土器		手捏ね	手捏ね	良	灰橙色	石英砂含む	ほぼ完形	No.126
	126	手捏土器		手捏ね	手捏ね	良	赤橙色	石英砂含む	ほぼ完形	N-11II′(3)
	127	手捏土器		手捏ね	手捏ね	良	赤褐色	石英砂含む	ほぼ完形	No.137

表6　SD-01II・II′層出土土器観察表(4)

している。

それでは、底部の数からこの溝中に廃棄された土器(甕形土器、壺形土器、鉢形土器)の実数について推測してみよう。第2表は底部の残存率とその大きさごとの個数を調べたものである。この表には図化した土器もすべて入れてある。残存率は100%を一個体とし、分数はそれぞれ百分率で表してある。この合計が概算の個体数を示す。端数はすべて切り上げてある。合計91個であるが、個体数の実数はこの1.5～2倍はあると考えられる。

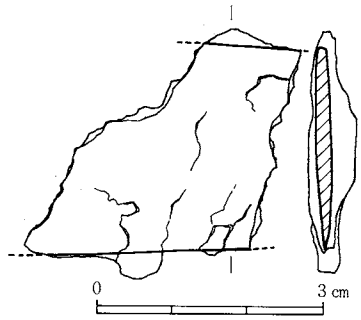


Fig. 37　II層出土鉄器(1分の1)

③鉄器(Fig. 37; PL. XII; 10)

溝中M－9グリッドのII層より出土した。3×3cmの略三角形の破片である。右側が僅かに狭く、左方に向けて広くなる。断面を観察すると下方に刃部がある。おそらくその形態的特徴から鉄鎌の破片かと思われる。現存部分で、長さ3.5cm、幅2.7cm、厚さ0.2cmを測る。

5．各遺構出土石器(Fig. 38・39、PL. XII)

ここでは、各遺構及び包含層から出土した石器を一括し図示した。

剥片石器・剥片(Fig. 38; 1～5、PL. XII; 5～9)

1は漆黒色黒曜石の石刃状剥片を素材に用いた彫器である。左側辺をブランティングで加工し、その先端部からフルーティングを施している。下半を折損しており、その折れ面からも刃部側に2～3回の加撃を行っている。本来はナイフ形石器であったと思われる。長さ25mm、幅11mm、厚さ5mmを測る。先端部の彫刻面の幅は3mmである。1区4層より出土した。2は縞模様の節理の入る黒曜石製剥片を素材とした両面加工の三角形鏃である。その加工は、裏面側から両側辺の背面にかけて形を整えた後、基部側から先端まで達するような押圧剥離を施している。裏面左側に素材となった剥片の主要剥離面を残している。両側端と先端部を欠損している。現存部で、長さ25mm、幅21mm、厚さ4.5mmを測る。2区4層より出土した。3は漆黒色黒曜石製の不定形剥片を素材とし、打面側裏面と左側辺に背面から剥離を施した削器である。柱穴の覆土中より出土した。長さ20mm、幅12mm、厚さ5mmを測る。4は縞入りの黒曜石製の石刃状剥片を素材とした削器である。両側辺にブランティング状の加工を施しており、台形石器に似るが、右側辺裏面に平担剥離がある点、底辺部に加工(使用痕？)の痕跡がある点などから削器とした。2区の4層から出土した。長さ13mm、幅15mm、厚さ3mmを測る。5は黒曜石の角礫素材から最初に剥離されたもので、背面に原材の外表面を残している。長さ39mm、幅32mm、厚さ9mmを測る。1号井戸状遺構から出土した。

剥片石器はいずれも黒曜石を素材としている。1の彫器は旧石器時代、他はすべて縄文時代以降の所産である。なお、彫器の存在から、発掘終了後旧石器時代の包含層の有無を確かめめ

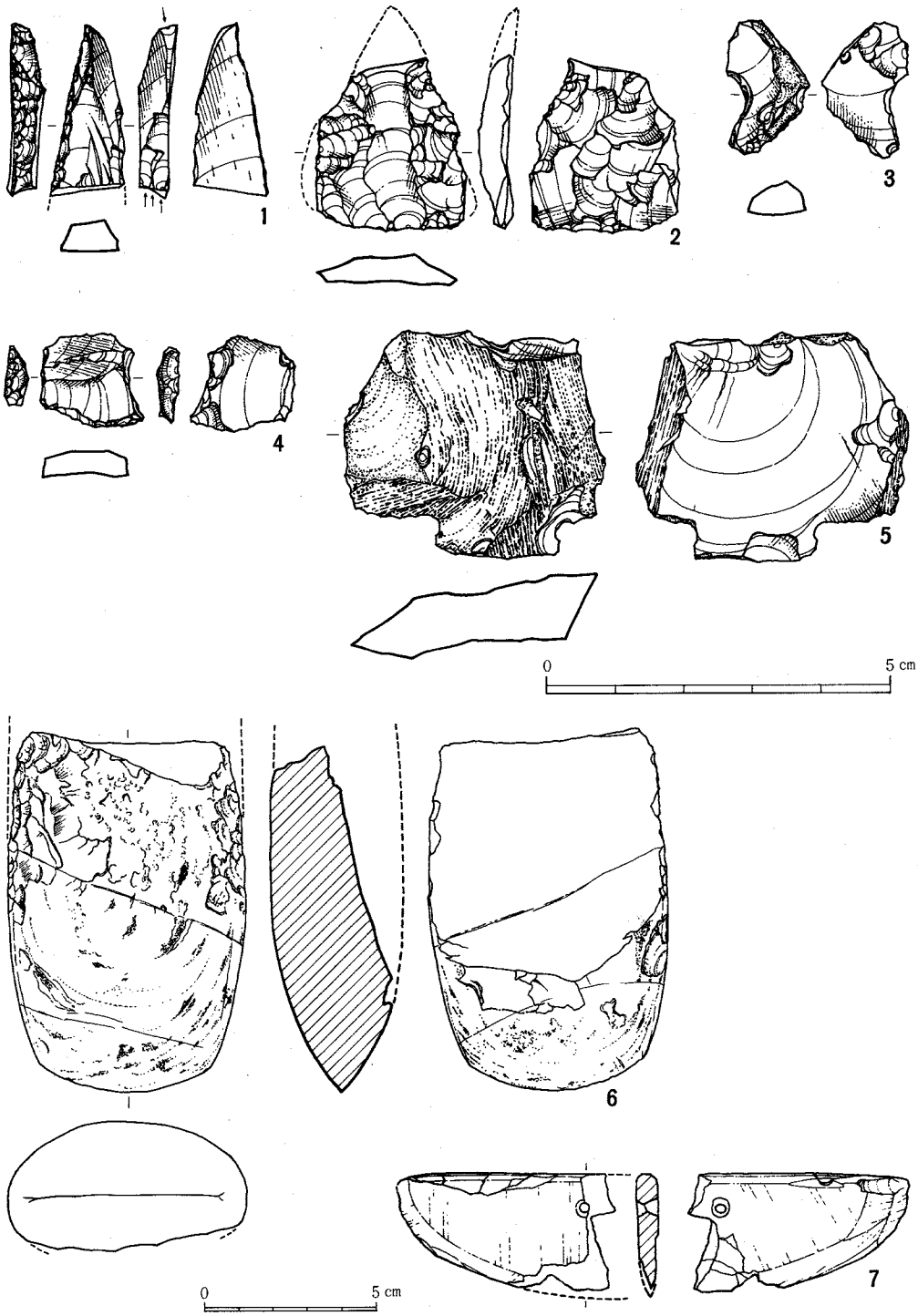


Fig. 38　各遺構出土石器(1)(１分の１・２分の１)

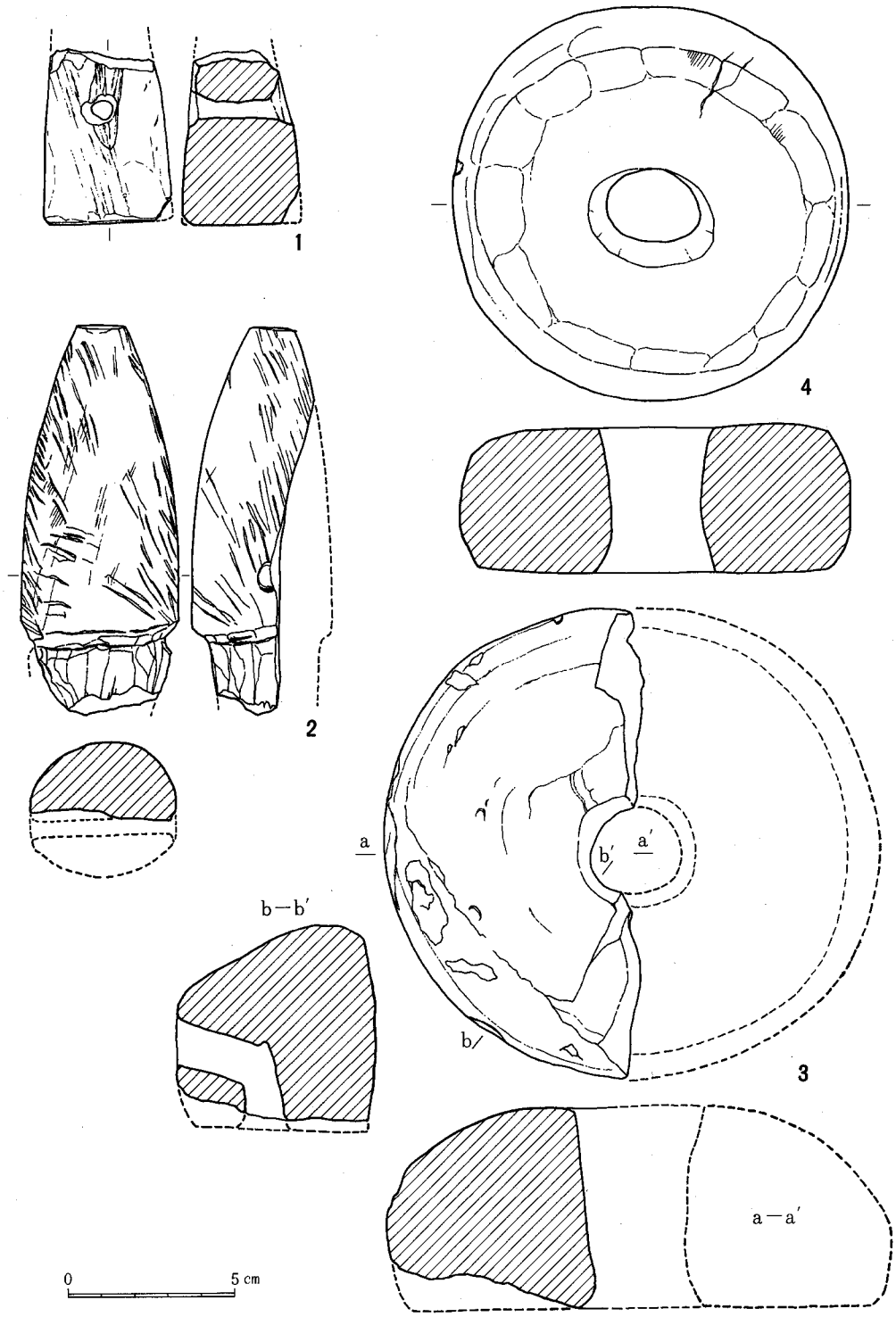


Fig. 39　各遺構出土石器(2)(2 分の 1)

るため台地上を深掘したが、何も検出することはできなかった。

磨製石器(Fig. 38; 5・6、PL. XII; 2・4)

6は安山岩製の蛤刃石斧の刃部破片である。側辺の中位に粗整形のための剥離痕を留め、その中央部には敲打痕が認められる。刃部及び側辺は丁寧な研磨が施されている。現存長10.5cm、幅6.9cm、厚さ3.1cm+αを測る。環濠のII層より出土した。7は淡緑色を呈する凝灰岩ホルンフェルス製の石庖丁の半欠品である。刃部の砥ぎだしは両側より行われている。現存長6.2cm、幅3.3cm、厚さ0.6cmを測る。環濠のI層中より出土した。

滑石製石錘(Fig. 39; 1～4、PL. XII; 1・3、11・12)

1は灰色を呈する滑石製の分銅型の石錘で、上半部を欠失している。中位に一個の孔が穿たれている。凹線が縦方向に孔の部分まで延びている。全面研磨による仕上げを行っている。現存する部分で、長さ5.2cm、幅3.9cm、厚さ3.6cm、重さ110gを測る。糸島湾型に属する。環濠のII層より出土した。2は淡緑色の滑石製の分銅型石錘で、ほぼ縦半分を欠失する。全体形は砲弾形に整えられているが、先端部がカットされ平坦に仕上られている。整形はノミ状工具の削痕を留めたままで、研磨されていない。孔の下の部分に一本の凹線が巡っている。現存する部分で長さ11.5cm、幅4.6cm、厚さ2.9+αcm、重さ220gを測る。環濠のII層より出土した。3は滑石製の環状を呈する大型石錘であるが、ほぼ半分を欠失している。断面形は平坦な台形状をなす。側面と底面の両方から穿たれた断面鍵形をした孔が一つあり、紐通し孔と思われる。径14.2cm、厚さ6cmを測る。孔の径は2.5cm。重量は現存で840gであり、完形品の重量はおよそこの二倍になると思われる。環濠のII層より出土した。4は今宿小学校内の鶏舎建設の際出土したもので、同校長原正雄先生によって保管されている資料である。径11.8cm、厚さ4.4cm、重さ1050gを測る。孔径は2.1cm×2.8cmである。

これらの石斧・石庖丁・石錘の類はいずれも環濠から出土しており、おおよそ弥生時代後期初～中頃に属すると考えられる。

6. 柱穴及び包含層出土遺物

ここでは柱穴及び各包含層より出土した遺物について説明を加える。

青白磁(Fig. 40; 1・2)

1は外面に鎬蓮弁の文様をもつ龍泉窯系の青磁碗である。口縁部のみの破片であるが、口縁内面に重ね焼きの目跡が認められる。胎土は灰白色で、釉調は水色味を帯びている。2区の4層上面から出土した。2は白磁碗の高台部分である釉はほとんど高台部まではかかっていない。胎土は灰白色を呈する。復元高台径は6.4cmを測る。4区3層から出土した。

瓦質土器(Fig. 40; 3・9・10)

3は瓦器碗である。内外面とも黒褐色を呈し、全面回転ナデを施している。全体の4分の1ほどの破片であるが、復元口径14cm、器高5.8cmを測る。9は瓦質の鼎の杯部の破片である。内

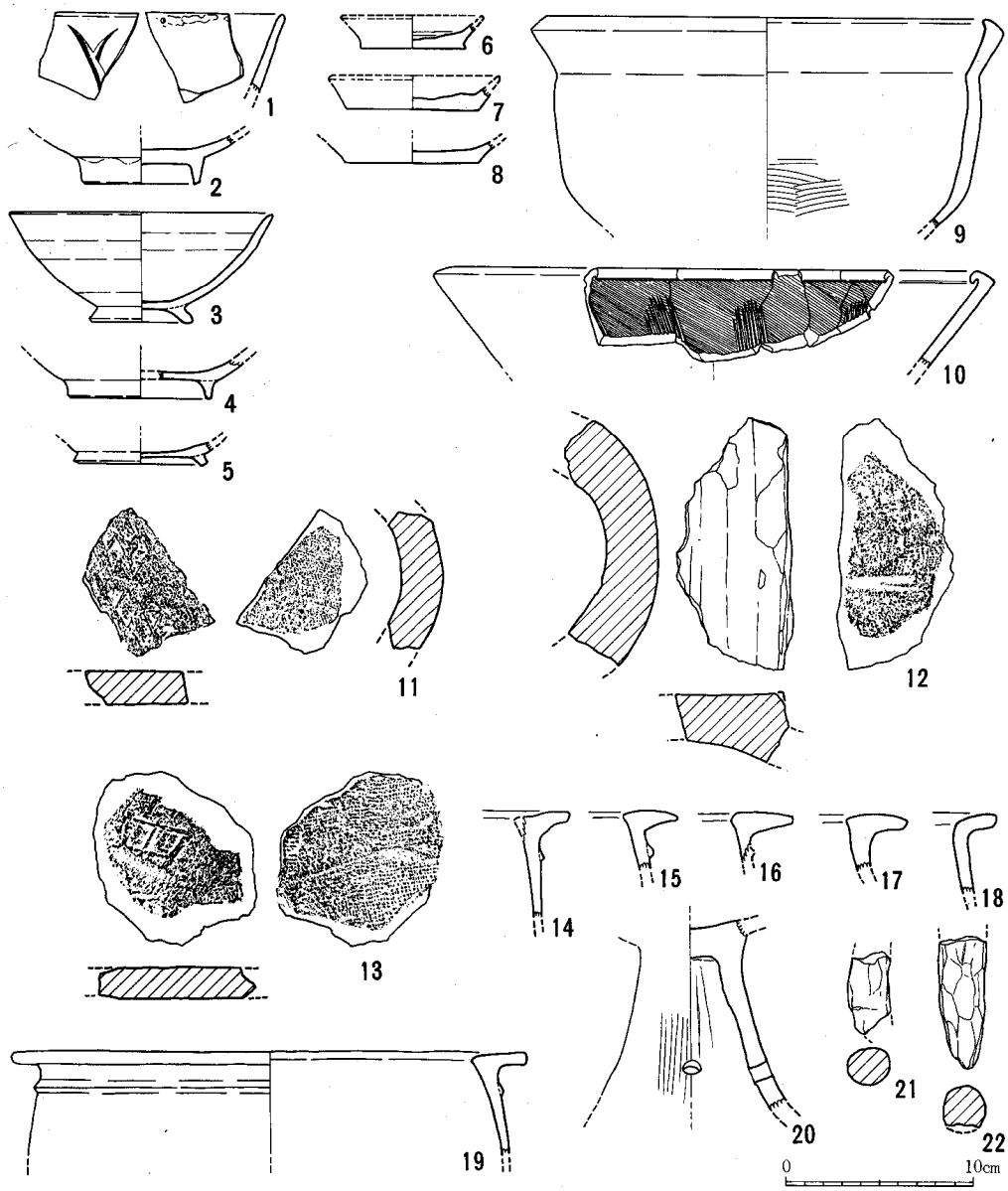


Fig. 40　柱穴及び包含層出土遺物(４分の１)

面は刷毛目調整を施し、外面は全体をナデている。外面にはススが付着している。暗灰色を呈する。柱穴(P-24、P-37)と3区3層から出土したものである。全体の６分の１ほどの破片である。10は瓦質の摺鉢である。全体の４分の１ほどの破片で、胴～底部を欠いている。内面は丁寧な刷毛目を斜めに施し、現存するところで４ヶ所に９本単位の筋目を入れている。全体に暗

灰色を呈する。復元口径は28cmである。1区3層から出土した

土師器(Fig. 40; 4・5)

4は内黒土器(黒色土器A類)の底部の破片である。摩耗して調整法は不明である。2区の3層から出土した。5は土師器の碗の底部片である。コの字形の低く外方へ張り出した高台をもつ。内面に赤褐色の部分があるが、断面を観察すると内黒土器の可能性がある。2区の4層から出土した。6は底径5.6cmの土師皿であるが、底部端がつまみあげられたように外側へ張り出している。 胎土は灰橙色を呈する。全面に粘土質の付着物があり、調整法は不明であるが、おそらく糸切底であろう。1区は4層より出土した。7は底形7cmの土師皿である。口縁部を欠いている。胎土の色調は灰茶褐色を呈する。6と同じく付着物が多く、調整法は不明である。1区4層より出土した。8は底径7cmの土師皿である。口縁部を欠く。色調は白茶褐色で、焼成は良い。糸切底である。1区の4層より出土した。

瓦(Fig. 40; 11～13)

11は青灰色を呈する須恵質の丸瓦の破片である。外面は格子目タタキの後ナデ消している。内面には布目を残している。厚さは2.2cmを測る。12は灰茶褐色を呈する軒丸瓦である。瓦頭を欠き形式は不明である。外面はヘラによる横方向へのナデを施している。内面に布痕が認められる。胎土には径1～2mm大の砂粒を多く含み粗い。焼成は良である。厚さは中心部で2.7cmを測る。13は灰茶褐色を呈する平耳である。外面は格子目タタキで一部をナデ消している。内面に布痕をとどめている。胎土には径1～2mm大の砂粒を多量に含み、焼成は良である。厚さは1.7cmを測る。12は1区3層、11と13はともに2区の4層から出土した。

弥生式土器(Fig. 40; 14～22)

14～19は甕形土器の口縁部片である。19のみ復元径を出した。28cmである。14～17・19はいずれも鋤先状口縁で、14・15・19は口縁下に一条の三角凸帯が認められる。18は逆L字形を呈する口縁で、内面への張り出しが認められない。20は高杯の脚部である。透かしの孔は3個である。外面は刷毛目調整である。暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。21と22は環濠のII・II′層から出土した支脚土器(Fig. 35; 121、122)と同タイプのものである。14・15・18・19が1区4層、22が2区3層、17、21が2区4層、16・20が3区4層から出土した。

これら柱穴及び包含層の遺物は弥生式土器が中期末～後期初、その他の遺物が11世紀中～13世紀中頃までに比定されよう。遺物からみてその中心は12C～13Cと考えられる。

Ⅳ．考　察

SD-01出土の土器について

SD-01Ⅱ・Ⅱ′層からは、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、脚付甕形土器、高杯、器台、ミニチュア土器、手捏土器など各種の土器が多量に出土した。この土器群の評価は、この溝とそれに付随すると思われる集落(生活址)の造営と存続期間を決めるうえでの鍵となるものである。調査では直接的に溝と関連する生活遺構を検出するには至らなかった。このため、SD-01の造営と埋没されるまでの時間を知ることで推測するしかない。

SD-01の遺物の出土層準はⅠ・Ⅱ・Ⅱ′層(若干Ⅲ層へ入るものもある。)の三層で捉えられる。Ⅱ層とⅡ′層は冒頭で述べたように本来同一と考えられるが、土器群に時間幅があるため、人為的な廃棄時期と堆積の時間幅について考え直してみる必要がある。

〈出土状況について〉

Ⅱ層(暗茶褐色土層)は遺物の出土状況の記録のため便宜的に二層に分けⅡ層、Ⅱ′層と呼称しているが、土質自体には粘性の強弱はあるものの明確な違いはなにも見あたらない。Ⅱ層及びⅡ′層の出土状況(Fig. 17･18)を見ると、Ⅱ層に破片(細片)が多く、Ⅱ′層に大型破片もしくは完形に近いものが多い。この状況はおおまかな傾向として認められるが、記録化のため記録以前に取り上げた細片もあり、これがすべてではない。また、Fig. 18で見られるようにJ・K－5～7グリッドではⅡ′層からは一見遺物が出土していないように見える。しかし、これも見かけ上の差といえる。遺物の出土レベルを調べてみると、このJ・K～7グリッドⅡ層の遺物群は標高4～4.3mまでに出土している。これに対し、O・P－13グリッドⅡ′層の遺物群は標高3.9～3.6mの間から出土している。この間のレベル差は大きいが、Ⅱ′層自体の堆積レベルを比較してみると、Ⅱ′層の最下面は第1セクションで3.5m、第3セクションで3.3mと東へ向かうにつれて低く傾斜していることがわかる(Fig. 41)。これは、溝の基底面も3.4mから3.0mと西から東へ傾斜していることに起因していると思われる。先の現象は傾斜する包含層を水平に掘開したために起こるみかけ上の差と言うことができる。よってJ・K－5～7グリッドⅡ層出土遺物は包含層の傾斜にしたがえば、O・P－13グリッドⅡ′層出土遺物とほぼ同レベルと考えることができる。このⅡ層とⅡ′層が同一層であることの証明は出土土器自体からも言える。Ⅱ層とⅡ′層の出土土器は、壺形土器8、9、32などのように応々にして接合する例がある。また両層間の接合関係のみでなく、古い型式の土器がⅡ層からも出土しており、層位的に年代差がある

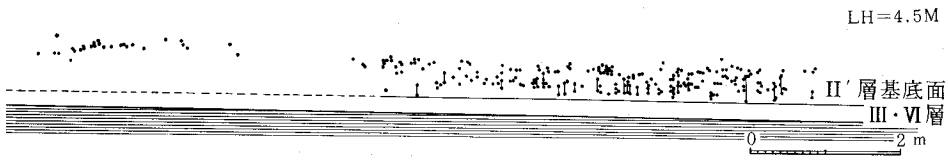


Fig. 41　SD-01Ⅱ・Ⅱ′層遺物出土状況ドット図(100分の1)

とは思われない。むしろ、同一層(自然堆積)中で、長い時間幅の人工遺物の廃棄が数回にわたって行なわれたと考えるのが自然であろう。

それでは平面的な分布状況から一つの群的なまとまりを把握できるであろうか。II層とII′層を重ねた土器の分布状況は、視覚的なまとまりとしてJ・K－5～7グリッドの一群とL～Q－9～14グリッドの一群に大別される。また、後者は東西の二群に分かれて密集した感がある。これを土器の接合関係から分析してみると、一個体の土器のちらばりはこの群内を越えるもので、この各群を一つの単位として分割することはできない(Fig. 42)。L～Q－9～14グリッドはほぼ接合の範囲として一つとみなすことができるし、J・K－5～7グリッドの土器とも接合している。この分布状況からすれば細かい単位に分割することは不可能で、一時期の土器群を抽出することは困難である。しかしこの中でも個別型式の土器が近接して出土する例がある。例えば、壺形土器VI類はO・P－12～14グリッドに集中し、拡張部より東側へその分布

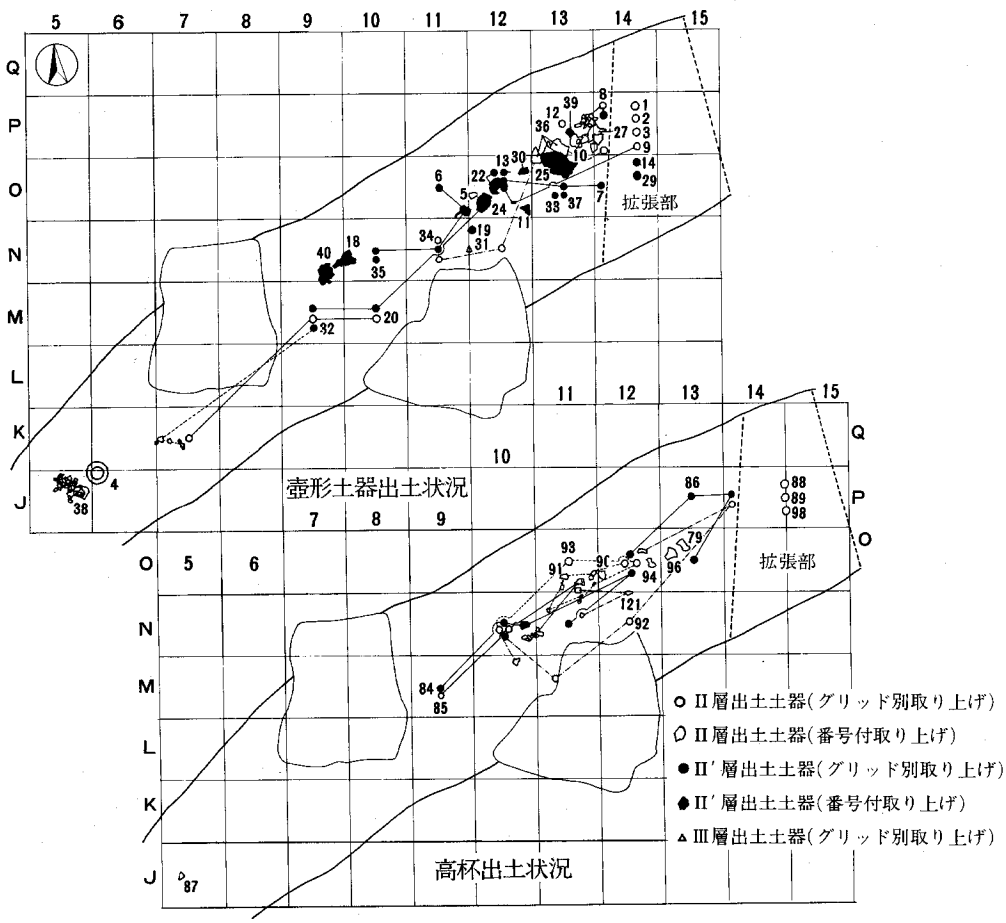


Fig. 42　壺形土器・高杯出土状況模式図(120分の1)

域をひろげている。また甕形土器Ⅲｈ類はＪ・Ｋ～５・６グリッドに集中している。これは環濠へ廃棄される土器の中でも一つの最小単位として把握できそうである。以上より、出土状況から各型式をまとめる様式を捉えることは難しく、型式的な分類、操作にたよらなければならない。

〈SD-01出土土器の編年と時期〉

Ⅱ・Ⅱ′層から出土した土器で型式的に古い様相をもつ一群を抽出する。壺形土器ではⅠ類(Fig. 20; 2)、Ⅳ類(Fig. 21; 20)、Ⅵa類(Fig. 23; 31)、甕形土器ではⅠ類(Fig. 29; 71・72)、Ⅱ類(Fig. 29; 73)である。これらは、すべて丹塗り土器で、中期の後半でも終末に近い時期に位置づけられるものである。これをⅠ式とする。

Ⅱ式の資料はこれらⅠ式を除く資料のすべてを一括している。ただし、このⅠ式とⅡ式の間に位置するようなⅡ式の中でも古い様相を示す資料がある。壺形土器Ⅸa類(Fig. 21; 19)、高杯Ⅰ類(Fig. 32; 84)、Ⅲ類(Fig. 33; 95～98)がそれである。19は丹塗りの小型壺であり、ヘラ磨きの調整も胴上半が横方向、それ以下が縦方向で、胎土も精選されており、他のものとは異なっている。これは中期後半の丹塗り壺とよく似た特徴をもつが、口縁部が反り気味に立ち上っており、新しい様相とみなすことができる。84の高杯は鋤先状口縁をもち、丹を施す点は中期後半の高杯と似ている。しかし、口縁端部が丸味を帯び、シャープさに欠けており、一段階新しいものと考えられる。95～98の高杯の脚には、逆くの字か鋤先状の口縁がつくものと思われ、Ⅱ類の高杯にはみられない厚い器壁と大ぶりで大きく外へ張り出す裾が特徴的である。84の高杯は後期の前半まで残るものとして理解されており、その位置づけが問題である。

Ⅱ式とした一群は器種とともに型式的にも多様である。壺形土器Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵb・Ⅶ・Ⅲ・Ⅸｂ類、甕形土器Ⅲ類、鉢形土器Ⅰ・Ⅱ類、脚付甕形土器、高杯Ⅱ・Ⅳ類、器台Ⅰ・Ⅱ類などを含む。支脚土器(土製品)、ミニチュア土器、手捏土器はⅠ式に入るものもあると考えられるが、決定できないためⅡ式の範疇で捉えておく。このⅡ式の土器群は後期の前半～中頃に位置づけられる。個別の土器を福岡平野、早良平野、糸島平野の弥生時代後期の諸遺跡のものと比較すると、壺形土器Ⅶ類は小笹Ａ溝出土土器[1]に類似する。また壺形土器Ⅵb 類は大型土器で、36は三雲遺跡番上Ⅱ－５の３層出土品[2]に類似するが、肩部の凸帯の数が異なっている。このⅥｂ類に含めた他の30、32、34の壺形土器は、鋤先状口縁の内側の端部がまだ尖り、シャープさをもっており、36に比べて型式的に古い要素をもっている。しかし、凸帯が２cm程の幅で、平担なものも出土しており、年代幅がある可能性がある。高杯をみると、外反する口縁と長い脚、広い裾が特徴的であるが、三雲遺跡仲田17号住居址[2]、野方中原遺跡Ａ溝[3]出土品と形態が良く似ている。ただし、本遺跡のものは脚から裾部にかけての段がなく、湾曲しながら広がるもので、若干の違いが認められる。85、90のように杯部の底面が下方へふくらみ気味になっており、中頃でも新しい要素をもっている。壺形土器には口縁部の外面に稜をもたない袋状口縁壺(Ⅱａ類)

と明確な稜をもつ逆くの字状の口縁をもつ壺形土器(II b 類)の二者が含まれている。後者の壺形土器は、三雲遺跡群の後土器溜り[2]、イフ7地区大溝中層[2]、仲田第17号住居址、板付F-5c第3号井戸[4]などの出土品と共通の特徴をもっている。

近年、北九州の弥生時代後期の土器編年が相次いで出されているので、SD-01出土土器がどのような時期にあたるかを検討してみたい。特に問題となるII式土器の時期であるが、高倉編年[5]ではでは第II期末～第III期に、常松編年[6]ではII～IV式の時期に、柳田編年[7]では後期後半b期に相当する。I式とII式の間に位置づけられた高杯I類に類する三雲遺跡群の後土器溜出土品は、高倉編年III期初、常松編年I・II様式の時期に位置づけられている。いずれも後期初～中頃に比定されているが、この高杯の取り扱い方によって溝の使用年代に問題が生じてくる。ところでいずれの編年においても後期初頭の土器群として、鹿部東町遺跡土器溜[8]、小笹遺跡祭祀遺構などがあげられている。ここで出現する袋状口縁壺は、袋部の直下で強くしまる頸部をもつもので、高倉編年のI期の前半、常松編年のI式に含まれている。このような袋状口縁壺をもつ1群が本遺跡のI式とII式の間に入り、後期の初頭に位置づけられることが予想される。よって高杯I類も柳田康雄氏が指摘するように後期の前半まで残るものと理解されていることから[7]、II式の範疇に含め、SD-01の造営された年代に後期前半～中頃をあてることができよう。この点から、I式とII式の間にはある程度の時間幅があり、I式の資料がSD-01の型式年代を示すものか疑わしい。I式の資料は数点で、しかも細片が多い。隣接する井戸状遺構や台地上の包含層からも該期の細片化した土器片が出土しており、溝の掘開以前の生活址のものである可能性が高い。SD-01の中心は後期前半～中頃であり、少なくとも5世紀中頃までは、凹地として存在していたと考えられる。

II・II′層出土土器の中には、他地域の影響を受けた土器が入り込んでいる。壺形土器V類と高杯IV類である。壺形土器V類(Fig. 23; 27)は、口縁部以下は在地の大型壺形土器の形状をもつが、口縁部に吉備地方の上東式土器に特徴的な平行沈線文を描いている。口縁部の形態からみれば、中期後葉～後期前半で、上東・鬼川市0～II式[9]に入ると思われるが、厳密な時期は決定しがたい。高杯IV類(Fig. 35; 121)は、現在までのところ福岡平野、糸島平野では新知見と思われる。類例としてはやはり岡山県岡山市雄町遺跡[10]、百間川原尾島遺跡[11]出土の飾り高杯があげられる。ただし本遺跡例は裾部からなだらかにすぼまり、エンタシス状の脚部を形成しない。これは、II類の高杯の脚部と同じで、裾部のみを意識して模倣した可能性が高い。これと最も良く似た例が、福岡県行橋市下稗田遺跡[12]F地区の23号住居址から出土している。底径25cmをはかり、裾の屈曲部のすぐ上に円孔の透かしがある。裾の張り出しは本遺跡例に比べてあまり顕著でない。凸帯は明確に表現されていないが、断面図を観察した限りでは、屈曲部に台形の凸帯が認められるようである。重孤文をもつ免田式の長頸壺とともに出土している。百間川原尾島遺跡では、丸田地区の井戸－17、土壙148・158、溝39・40から内様の飾り高杯が出土してお

後期全般を通じて存在している。ただし、時期を経ると大型化、装飾化が進む。本遺跡例は時期的に最も古い例・井戸－17出土品(百間川後期＝上東・鬼川市Ⅰ)に似た特徴をもっている。

このようにSD-01出土の土器の編年的位置は、後期でも前半～中頃に比定できよう。これは福岡平野などの北九州地方の在地系の遺物群と時期的な対比を行なっただけでなく、該期の外来系の土器の年代からも裏付けされる。ただし、SD-01のⅡ・Ⅱ′層の土器群は若干の時間幅をもち、時間的にいくつかの段階に細分化される可能性をもっている。しかし、よほどの好条件を備えない限り、溝の遺物群を細分することは不可能であり、この問題は今後台地上の生活遺構が調査されれば、解消されるにちがいない。

註

(1) 柳田純孝他 『小笹遺跡調査報告書』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集 1973
飛高憲雄・二宮忠司 『小笹遺跡第２次発掘調査報告書』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第34集 1975
(2) 柳田康雄・小池史哲他 『三雲遺跡Ⅰ～Ⅳ』 福岡県文化財調査報告書58・60・65集 1980～1983
(3) 柳田純孝他 『野方中原遺跡調査概報』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集 1974
柳田純孝 『野方中原遺跡の遺物(1) Ａ溝出土の土器』 福岡市立歴史資料館研究報告書第２集 1978
(4) 山崎純男 『板付遺跡調査概要』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集 1979
(5) 高倉洋彰 「原ノ辻上層式土器の再検討」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982
(6) 常松幹雄 『浦志遺跡Ａ地点』 前原町文化財調査報告書第15集 1984
(7) 柳田康雄 「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982
(8) 高倉洋彰 『鹿部山遺跡』 日本住宅公団鹿部山遺跡調査会 1973
(9) 柳瀬昭彦他 『川入・上東』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 1977
(10) 正岡睦夫他 『雄町遺跡』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 1972
(11) 正岡睦夫他 『百間川原尾島遺跡２』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 56 1984
(12) 長嶺正秀他 『下稗田遺跡調査概報Ⅲ』 行橋市文化財調査報告書第11集 1982

Ⅴ．まとめ

今回の調査は狭い面積ながら多大な成果を得ることができた。とくにSD-01の検出は、これまで弥生時代の散布地として把握されてきた学校内遺跡において弥生時代後期を中心ととする集落の存在を決定づけたという意義がある。狭い面積のため全容を把握することはできなかったが、この溝は小学校の立地する低台地上を巡る環濠である可能性が高い。北部九州においてもこの時期になると環濠及び環濠集落の造営が盛んになるが、このSD-01が環濠の一部であればその例を増すことになる。環濠及びその性格づけにはまだ情報量が小ないため、最終的な決定は台地上の調査による生活址の検出を待たねばならない。いずれにせよこの集落が糸島平野と早良平野を結ぶポイントともいうべき重要な地理的環境にあり、しかも海岸部に近い立地上の特性をもつことは、交通の要衝の拠点集落であった可能性が高い。とくに瀬戸内の影響を受けた土器や漁撈用の石錘などの存在は、この集落が海洋的性格を有していたことを暗示している。

今後の課題として、１．SD-01の形成年代が中期末まで遡るか否か。２．台地上の生活関連遺構の検出による溝を含めた集落の性格づけ。３．SD-01がどのような形状を示し、環濠となるか否かの検証などがあげられる。

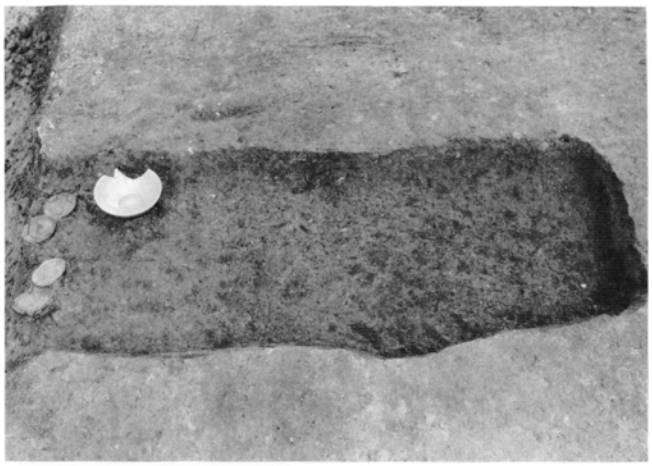
弥生時代関係以外では、13世紀中頃の中世墓をはじめ11世紀中～12世紀前半にかけての柱穴群、井戸状遺構を検出しており、平安時代末から鎌倉時代にかけての集落の存在が予想される。またSD-01の北側、１・２区においては削平された台地の基礎層の上に旧水田がのっており、中世墓を切るため近世以降のものと判断したが、下方の粘質土はさらに時代の遡る水田の可能性がある。

PLATE

1．遺跡遠景（1）

2．遺跡遠景（2）

1．中世墓(西から)



2．第3号土壙(東から)

3．第2号土壙(東から)

1．1号井戸状遺構(北から)

3号井戸状遺構(北から)

3．SD-01発掘風景(北から)

PL.Ⅳ

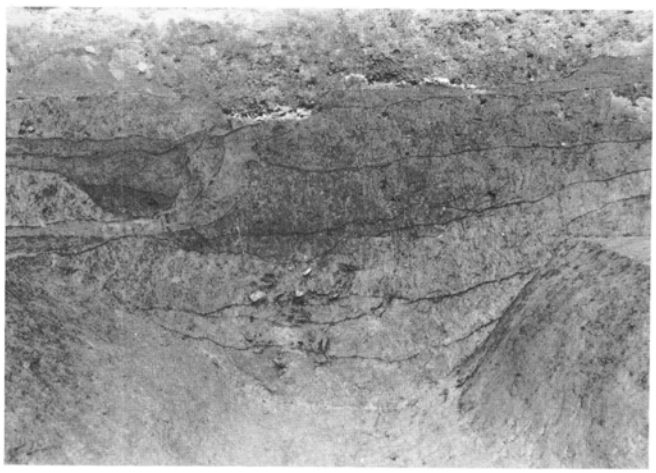
1．調査区全景(西から)

2．SD-01遺物出土状況(1)(東から)

3．SD-01遺物出土状況(2)(南から)

1．SD-01遺物出土状況(3)(北から)

2．SD-01遺物出土状況(4)(北から)



3．SD-01第3セクション(西から)

a

b

c

d

e

f

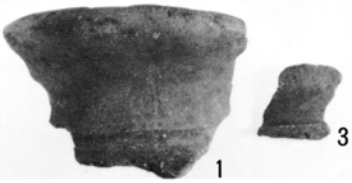
a・b 中世墓出土土器
c 1号井戸状遺構出土土器
d～f 3号井戸状遺構出土土器

I－4

I－7

20

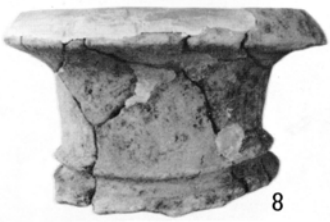
13 12 2


1 3

6

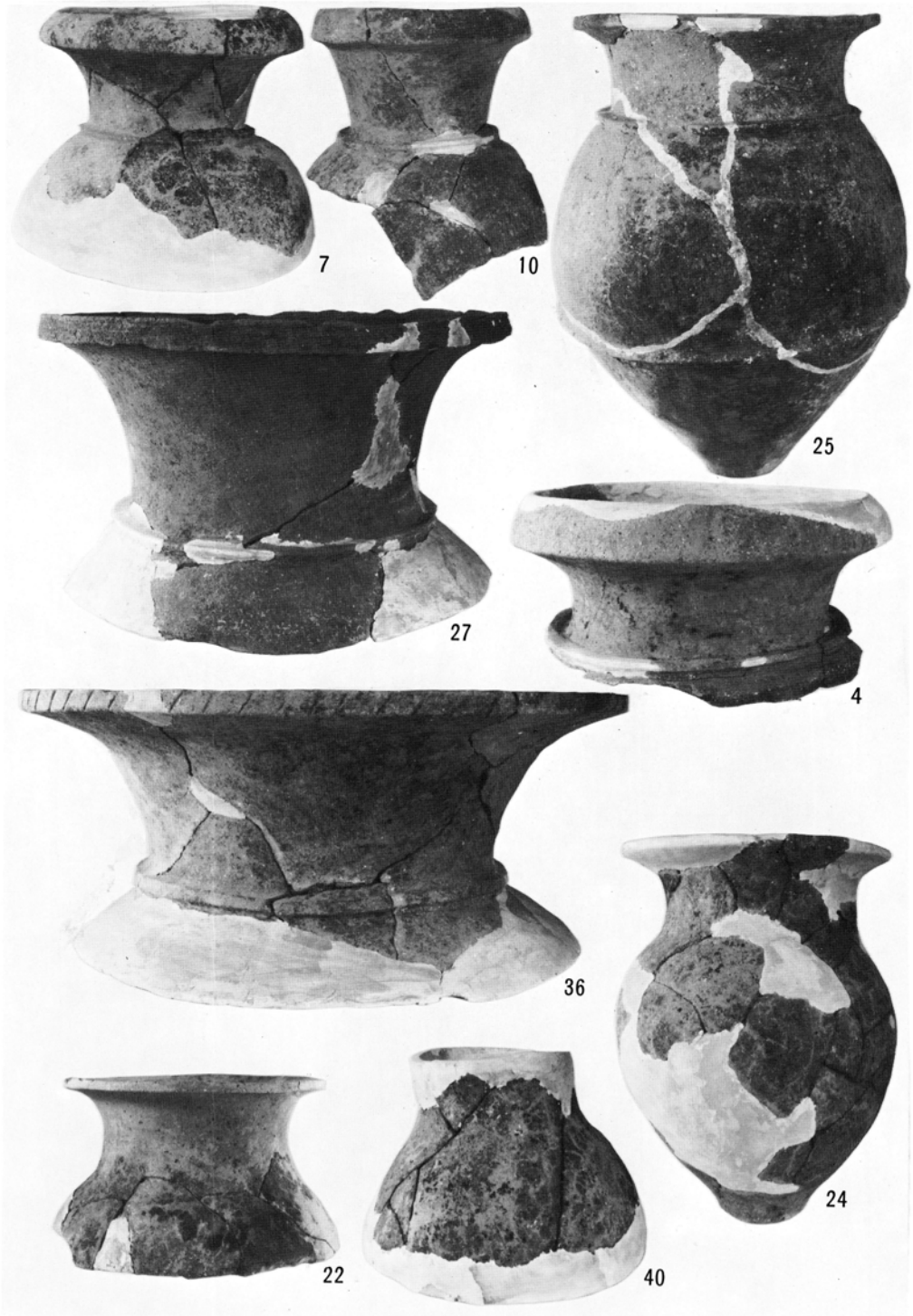
19

18


8

17

中世墓、1・3号井戸状遺構、SD-01出土土器(1)



SD-01出土土器(2)

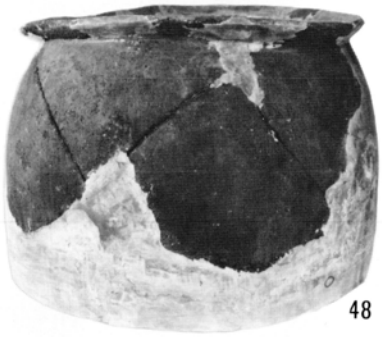
38

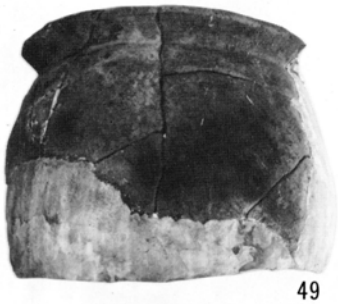
43

42

26

44

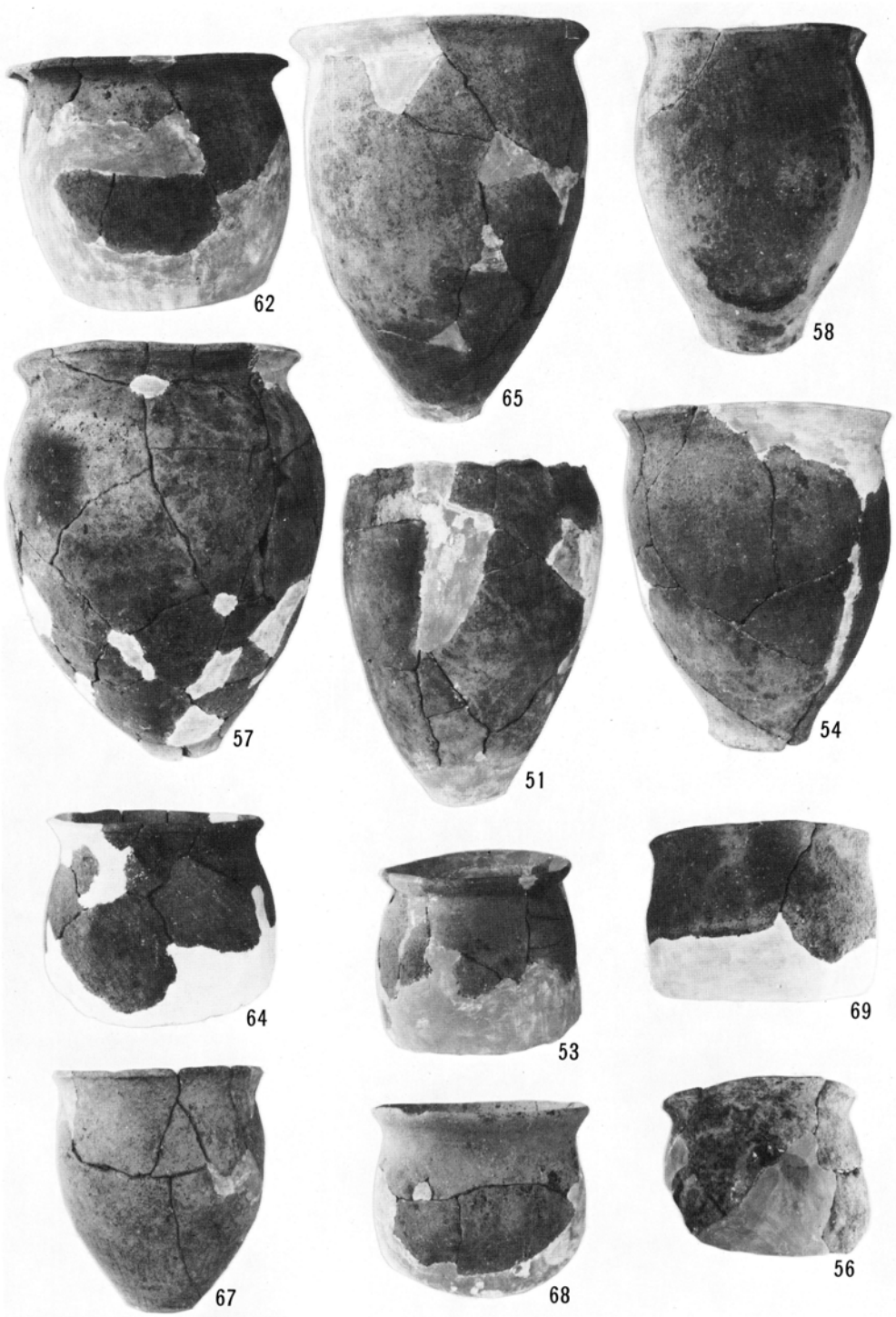

48


49

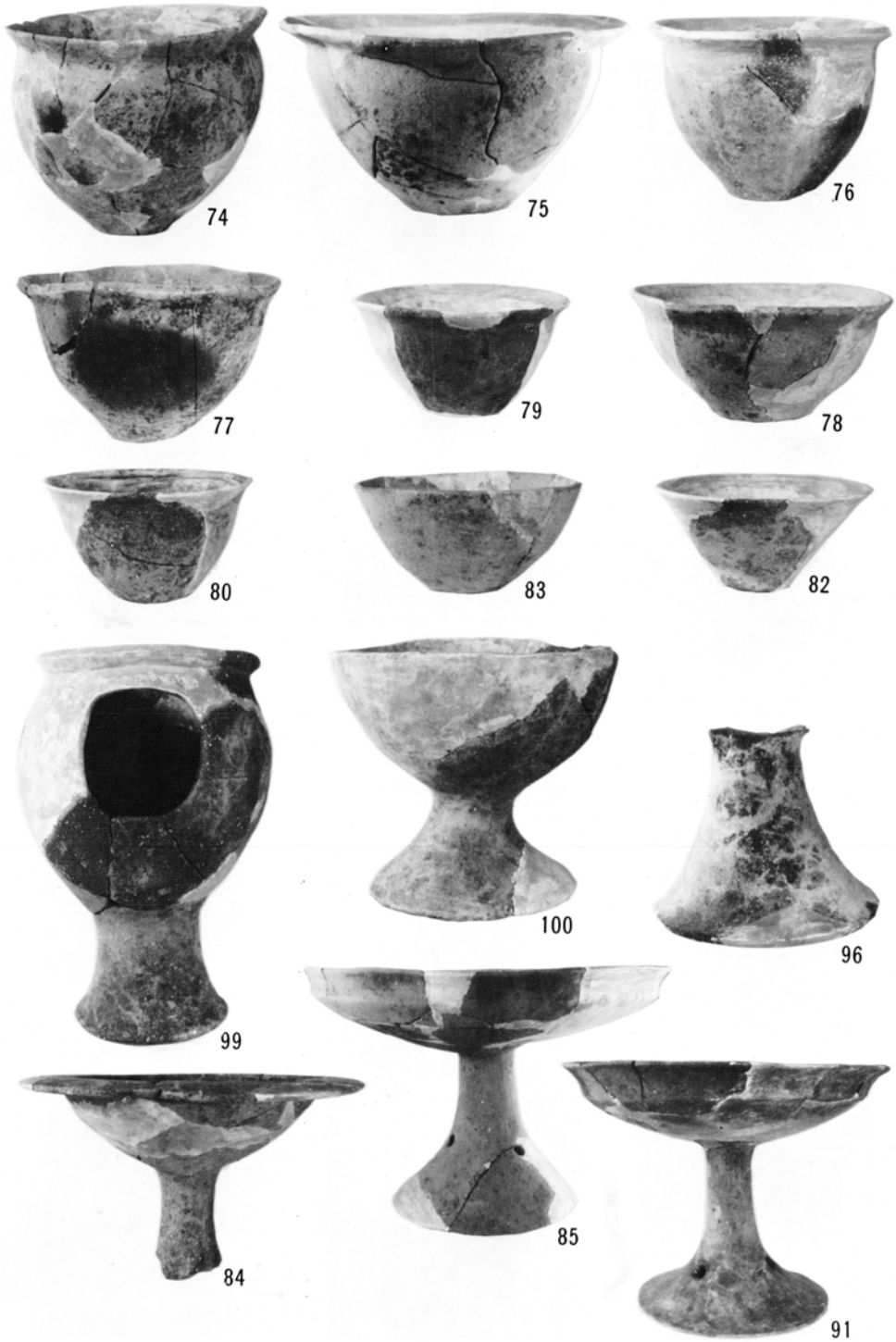
55

50

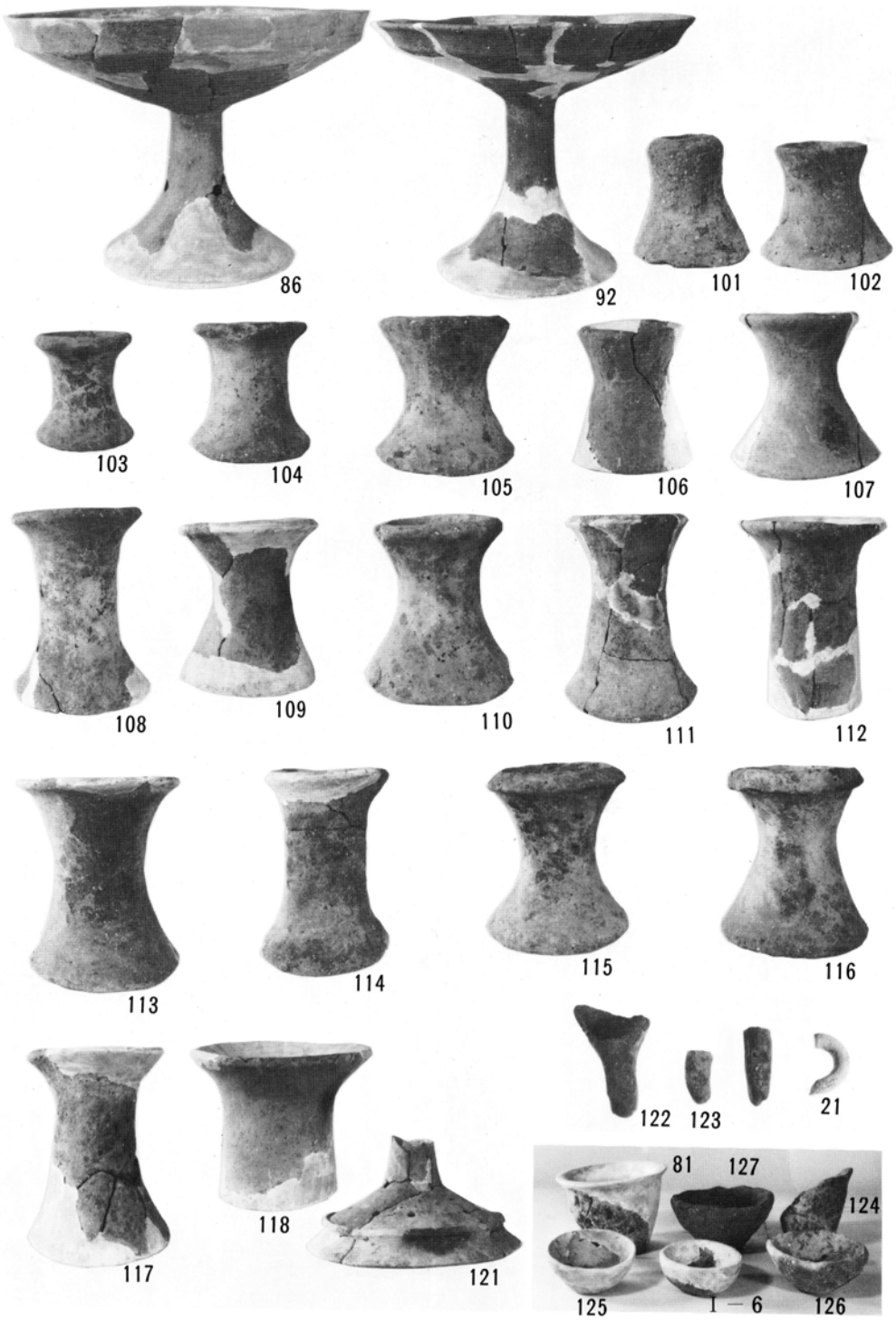
SD-01出土土器(3)



SD-01出土土器(4)



SD-01出土土器(5)


86
92
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
122
123
21
117
118
121
81
127
124
125
I－6
126

SD-01出土土器(6)

SD-01出土石器・鉄器及び各遺構出土石器

福　岡　市

今宿五郎江遺跡 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集

1986年 3 月31日

発　行　　福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市中央区天神 1 － 8 － 1

印　刷　　㈱　玉　川　印　刷　所